

レスルエンジェルスサバイバー2 二次創作小説

S e r a p h i c S t r i k e r s

■登場する主な選手たち

・第一章

早瀬葵（ドルフィン早瀬）、桜井千里

・第二章

寿零、柳生美冬、真田美幸

・第三章

伊達遥、ウォン姉妹（タイプB）

この話はフィクションです。

「レススルエンジェルズサバイバー2」に登場するキャラたちとはちよつとだけ関係がありますが、まあ他人の空似みたいなものとお考えください。

あ、エロもリョナもないです。ごめんなさい。

第一章 Blue Moon

1

雲一つ無い夜空に、月だけが蒼く輝いていた。

「くうっ！」

一瞬の油断で脚を払われ、しなやかな身体が地に倒れる。

背中への衝撃こそ受身をとって抑えたが、起こそうとした肩は、次の瞬間左右から踊りかかってきた四本の太い腕に、為す術無く押さえつけられてしまった。

「離してよ……このお！」

それでも気丈に抵抗の意志を示して足掻く女の顔を、乾いた音が張った。右、そして、左の頬にも。

「このアマがつ。手こずらせやがつ……！」

手のひらを振って一旦身を起こしたりダーダー格の中年男が、ひねりの無い毒づきの言葉

に続けて、唾を吐き出した。

土手の黒土を汚した液体には血が混じり、橋げたに申し訳程度でつけられた暗い水銀灯の中でもうつすらと赤い。

見れば、腕を押さえる二人と周りに立つ三人の男たちは、いずれも屈強ではあるが、顔を腫らしたり青アザが見えたりと傷だらけで、息も荒かった。

一方、強気に男たちを睨む女はといえば、先ほど殴られた頬以外にさしたる傷も見えない。

二十代もせいぜい半ばに見える彼女が、一人で五人の男を一方的に痛めつけた——と聞いて信じる者はごく少数であろうが、それが事実であることは、男たちの憎悪に満ちた目が証明していた。

だが、どれだけ強くても女の身だ。二人がかりで地面に押さえつけられては、どんなに暴れても服が乱れるだけで跳ね除けられない。

むしろその足掻きが、憎しみに火をつけられた男たちの嗜虐心しぎやくを大きく煽った。

「こいつ——犯っちまいましたや」

誰が言ったのか。普段であれば酒の上での冗談にもならない噴飯ものの言葉に、場の全員が思わず動きを止めた。

「……おいおい。そこまではヤベえだろ。うちの女ボス、いや、師範は——」

「たっぷり痛めつけてこい、後始末は全部旦那がやるから、つってましたよ。議員さんが揉み消してくれんなら、半殺しもレイプも変わりませんや。でしょ？」

「……そうだな。どうせ、この女はよそ者だしなあ」

男たちは互いの顔を見渡してから、あろうことか一斉に下卑た笑みを浮かべた。

「ちよ、ちよっと……あの、冗談、ですよね？」

女の硬い声に応えてくれる者は皆無だ。

代わりに欲望をぎらつかせた五対の眼が、女——早瀬葵の瞳を捉えた。

「ひっ！」

早瀬の唇から反射的な悲鳴が漏れる。

胸を鷲掴みにする恐怖を何とかしようとし、一層激しく抵抗するが、仰向けにされた上半身は全く動かず、蹴りが届く位置には男たちも近寄ってくれない。

それでも、暴れている限りは手出しできないはずと脚をばたつかせ、大声で助けを呼ぼうと息を吸ったが、

「おイタが過ぎるぜ、お嬢ちゃんよっ！」

リーダー格が踏みおろした靴がみぞおちに入り、早瀬の吸った息を根こそぎ吐き出させた。動きを止めた早瀬の脚をすかさず男の一人が押さえ、酸素を求めて咳き込む口はリーダー

格の男の手が掴んで、左右でくくった長い髪ごと頭を地面に押し付けた。後頭部からの衝撃と呼吸困難が、早瀬の意識を朦朧もうろうとさせる。

「おいおい。もっと優しくしてやんなよ」

とからかう仲間をリーダー格はひと睨みで黙らせると、焦点の定まらない早瀬の目を見て、下卑た笑みをさらに深めた。ご丁寧に、舌なめずりまでつけてみせる。

「へへっ、そその顔つきしやがって。恨むんなら、うちの師範に恥をかかせた、テメエ自身を恨むんだな」

無遠慮にのしかかり、口を押さえた手を整った形の顎へとずらす。

獣の顔が小さく開いた唇を蹂躪しようと迫り、臭い息が整った鼻梁をわななかせた。

——何か、立て続けに二つ、風を切った。

早瀬に覆いかぶさった男の動きを止めたのは、風の音ではなく、その「何か」が少し離れた地面とさらに離れた橋きょう脚あしに当たった音だった。

おそらくは、小石。

しかし、男はその出どころを悩むよりも、目の前の美しい獲物に集中することを選んだ。欲望を満たすための動きが再開され、

「あ、危ねええっ!!」

仲間の叫び声と、大きなものがすぐ傍らの土にめり込む音は、ほぼ同時に男の聴覚を伝わった。

少し遅れて、ずらした目の視覚が今度の「何か」を認識する。

子供の頭ぐらいはある石だ、と。

小さな岩といつても良いそれが自分をかすめて落ちたのだと気付いて、さすがの男も慌てて身を起こした。

「な、何もんだ、テメェ!?!」

月並みな誰何の声を上げた仲間の声を追って、リーダー格の男を含む全員の視線が、一点に集中した。

土手の上。

月を頭上に従えて立つ細身の影が、男たちを見下ろしていた。

月明かりに隠されて、顔までは見えない。

それでも、腰まで流れたポニーテールとそれを結わいたリボン、そして膝上で揺れるスカートカートの輪郭が、その影が女性であることを男たちに教えてくれた。

微かな風が、川原を吹き抜ける。

「高校、生……か？」

半袖のシルエットと胸元でなびいたスカーフに気付いた、男の一人が呟いた。

「すみません。コントロールが、悪いもので」

セーラー服姿の影が紡いだ第一声に、男たちは全員眉を寄せた。

その意味するところに全員が気付いたのは、少女が数歩ほど土手を降りてからだだった。

「て、テメエか、あの石は!? あんなデカいの投げやがって、危ねえじゃねえか！」

「女性を押さえつけて乱暴しようというのは、危なくないことですか？」

男たちが息を詰まらせたのは、少女の指摘が正鵠せいこくであったからと、背後の月光から解放

された彼女の顔を見てしまったからだ。

切れ長の眼と整ったフェイスラインは、美少女という意見に首を振る者はいないだろう。年相応のあどけなさを無表情が覆い隠しているが、その分だけ凜とした印象が強く、そよ風に流れるポニーテールと相まって、何より月光に映えた。

(……格好、いい……)

早瀬は、霞んだままの意識の内で呟いていた。

(なんでかな……天使、みたい。ひよっとして……あの子……)



その天使は、無造作にポケットを探ると携帯電話を取り出した。短いプッシュで耳に当てる。

おそらくは警察への通報。男たちが気色ばんだ。

「ざけんなっ！」

早瀬の拘束に参加していなかった一人が、土手を駆け上がる。

筋肉が目立つ野太い腕が瞬く間に少女に迫り、寸前、いや、かわ躲したとも見えない少女の横を虚しく通り過ぎたところで、急速にスローダウンした。

二歩、三歩、よろめいて、うつ伏せに倒れ伏す。

「もしもし。救急車をお願いします」

声を失った男たちの間を、少女の落ち着いた声が流れていく。

いつの間にか上げられていた少女の膝は下ろされ、電話の向こうへは現在位置に続いて、患者の情報が伝えられる。

「男の人が五人。喧嘩か何かで負傷。命には別状ないと思います。あとは——」

少女は、男たちを見渡した。

へいげい睥睨、という言葉が似合う、忌々しげな視線で。

「全員、げサ下衆、ですね」

言い放った少女が携帯を閉じた瞬間、男たちは激昂した。

早瀬をリーダー格一人に任せて、残り三人が殺到する。

雄牛の群れを、女豹が迎え撃った。

立ち位置の高さを活かして軽く跳ぶと、前蹴りが正面の相手の顎を打ち抜いた。

着地際に襲った二人目の足刀を側面への足捌きでかわし、戻りが遅れた脚に沿って肉迫しなやかに軸足を内から刈った。

空中でばたつき腰から墜ちる男への追撃こそ、最後の男が振り回す強烈な左フックに阻まれたが、少女はすかさず軸足を切り替えて、続く右のストレートに左の横蹴りをカウンターで合わせる。

脇腹を押さえてよろめく相手を少女の二撃目が冷酷に突き放すと、男は土手を無様に転げ落ち、倒れ伏した。

その男と最初の男が動かないことを少女が確かめたのは、無慈悲な踏み付けで二人目の男の意識を奪った後のことだった。

「久しぶりに帰省してみれば、こんなことに巻き込まれるとは。厄日です」

溜め息をついて——つまりはここまで息一つ乱すことなく、制服まで跳ねた土を払い落とす少女。

残ったリーダー格の動揺ぶりは、滑稽こっけいや哀れを通り越してあっぱれなほどだった。

「て、テメエ、そこまでだ！ この女がどうなっても——!？」

ぐったりとした早瀬を引き上げ、後ろから喉に腕を回して盾にする。

そこまでは良かったが、少女が何の感慨も逡巡も見せずに近づいてくるのを目の当たりにすると、男の狼狽ろうばいは瞬まく間に沸点まで達した。

「こ、この、人質っ！ 女が、こいつ！ この、ガキがあっ!!」

放り投げるように人質の早瀬を少女に向かって突き出すと、自分は一拍置いて地を蹴った。

少女が早瀬を受け止めた隙を狙う。その程度の計算をする理性はかろうじて残っていたのだが、

「やはり、下衆でしたね」

倒れ掛かってくる早瀬を少女が鮮やかに無視して避けた瞬間、男の目論見は全て水泡に帰した。

跳ね上がった少女の脚が男の股座へと綺麗に叩き込まれ、たまらない衝撃が男の脳天まで突き抜ける。

絶叫すら上げられず、泡を吹いて屈み込む男の側頭部を回し蹴りで刈り倒すと、横倒しで意識を失った早瀬の方を振り返って、

「人を守るのは、苦手なので」

少女は、少しだけ申し訳なさそうに呟いた。

雲一つ無い夜空に、月だけが蒼く輝いていた。

2

幸せな夢を見た。

過ぎ去ったあの頃。楽しかった日々。

かけがえの無い思い出は、今もなお、温かく自分を迎え、包み込んでくれる。

しかし、幸せだったという思い出を抱いて生きることが、決して幸せではないのかもしれない。

たとえ、夢を見ているこの瞬間が、どんなに幸せだったとしても。

(あれ……?)

眠りの国から戻ってきた早瀬が、最初に覚えた感覚は、違和感だった。

見覚えの無い天井と、つながらない前後の記憶。

そして、水の中にいるかのように焦点の定まらない視界。

「あれ……？」

口に出してベッドから身を起こすと、掛けられていたタオルケットが胸元から滑り落ちた。それを追って、水滴が一つ。タオルケットに小さな染みを作った。

「あれ……？」

同じ眩きを繰り返して、左の指先を顔に当てる。

泣いている自分に気づいて、早瀬は目元をこすった。

「痛むんですか？」

無愛想だが心配していることはわかる声が届いた。拭い終わった目を向ける。滲みにじが消えた視界に映ったのは、大きめのシャツを着崩して立つ少女だった。

「あなた……夕べの……」

「おはようございます。傷は、痛みますか？」

身体の痛みはさほど感じなかったが、昨夜の一部始終が突如として鮮明によみがえり、早瀬は身を固くした。

それでも、一度身震いしただけで恐怖を拭い去れたのは、目の前に立つ少女のことも全て思い出したからに他ならない。

その少女が心配そうな顔を崩していないのに気付いて、早瀬は笑顔を返した。

「ううん、全然大丈夫だよ。ありがと」

本当は少しだけみぞおちや頬に痛みは残っていたが、職業柄この程度は日常茶飯事だ。気遣ってくれている相手に言うほどではなかった。

「それは、良かったです。昨夜は病院に連れて行くことも考えたんですが、あの男たちと一緒に救急車に乗ってもらうのはどうかと思ったので」

「う、うん。それはちよつとね。でも、それじゃあここは——」

「私の家です。……顔、洗いますか？」

広くはないが、少なくとも貧乏ではないよね、と早瀬が感想を抱くほどには立派なマンション。その洗面台へと案内しつつ少女が早瀬に語ったところによると、今この家にいるのは彼女だけらしい。

その彼女も、普段は県外の学校で寮住まい。学校が休みに入り寮も閉まったため帰省してきたところで、昨夜の事件に出くわしたのだという。

「あんな男たちがいるなんて、地元の人間として恥ずかしい限りですね。——早瀬さんは、ご旅行でしょうか」

「う、うん。旅行っていうか——あれ？ 私、自己紹介したかなあ？」

タオルから顔を上げた早瀬に、少女は少しバツの悪そうな顔を見せた。

寝かせる前に外しておいた早瀬の髪留めを手渡しつつ、

「すみません。勝手にポケットのお財布を見てしまいました。お住まいか連絡先があるか  
と思ったものですから」

「えへへ、空っぽな中身とスタンプカードの山にびっくりしたでしょ？ よく後輩のみん  
なからも言われるんだ」

早瀬は手早く左右で髪を留めながら、鏡ごしに笑った。

社長から渡された旅費は明日まで泊まる旅館の金庫に入れてあるため、財布の中は早瀬  
の少々寂しい個人資産と、団体発行のIDカードぐらいしか無い。

「それじゃ、もう知ってると思うけど」

いつもの髪型になった早瀬が向き直った。

「私は、早瀬葵。今はちよつと休んでるけど、神奈川にある団体で、プロレスラーやって  
るの。昨日は本当に助かったわ。ありがとう！」

年上の女性の、屈託の無い笑顔。

慣れていないのだろう。少女は戸惑い気味に視線を外した。

少しだけ頬が紅い。

「ご、ご丁寧に、どうも。私は——桜井。桜井、千里です」

「桜井……千里、ちゃん？」

一瞬だけ、奇妙な間が空いた。

「……えーっと。桜井は、普通の桜井だよ。ちさとって、せんりって書くちさと？」

「はい」

「そっかあ。いい名前、だね」

「そうでしょうか。自分では、別にそれほど」

「そんなことないって。桜井千里ちゃん——うん、いい名前だよ？ ね？」

笑顔で押してくる早瀬に、千里はもう一度、今度は大きく目線を外した。

どうにもこういうタイプは苦手のようだ。

「私のことはいいです。それで早瀬さんは、どうしてあんな場所で男たちに襲われてたんですか？」

あまりにストレートな質問がちよっとした仕返しだったとすれば、その効果はてきめんだった。

早瀬の顔から笑顔が消え、入れ替わりに千里の胸には小さな罪悪感が点る。

早瀬はそれでも、昨夜の恩人に黙っているわけにはと思ったのだろう。ぽつりぽつりと事情の説明を始めた。

「あのね。私、ここには人を訪ねて来たの。拳法の道場で師範やってる、なんかもう伝説的に強い女の人がいるって聞いて、それでね」



「プロレスの、スカウトというやつでしょうか？」

「う、うん。まあ、そんなところ」

分かりやすい歯切れの悪さが、千里の耳に引つかかった。

しかし千里が黙っているうちに、早瀬は話を進めてしまう。

「昨日その人に会って——正直、悪趣味なオバサンだったんだけどね。強いのかとか、協力してくれるかとか話したら、試合することになっちゃったの。そしたら——」

「早瀬さんがあっさりと勝ってしまった。それで、逆恨みしたその人が門下生に早瀬さんを襲わせた。……そんなところですか？」

「うん。なんかねー、伝説どころか、秒殺勝ちできちゃったから」

ソファに腰を下ろしつつ、早瀬が息を吐いた。

洗面所で立ち話もどうかと思った千里の先導で、場所はリビングに移っている。

「おかしいとは思ったんだあ。昔の武勇伝や、議員の旦那さんのことや、叔母さんの従兄弟の娘さんが『元・ミスもみじまんじゅうのプロレスラーだった』なんて話ばかりして。試合前には、遠路はるばるの交通費とか言って、一万円札が詰まった封筒渡そうとするし。あーあ、せめてあのお金、貰っておけばよかったかなあ」

「……受け取ったのに秒殺していたら、もっと大変なことになってますよ」

「あ、やっぱりそういうお金だったんだ。わかってたら、試合しなかったのにねー」

あはは、と笑ったところを見ると、どうやらかなり天然らしい。

向かい合って座った千里もそう思ったかどうかは、無表情に隠れてよくわからなかった。「千里ちゃん、それはそれとして」

「なんででしょう？」

「夕べの千里ちゃん、凄かったよね！ 経験者の男の人たちを、あんな簡単につ。いつの間にか気を失ってたけど、私も途中までは見とれちゃってたもん！」

「どの辺りまで、覚えてますか？」

「うーん。三人目か四人目、かな。どうして？」

「いえ、別に」

五人目との戦いでは、千里が綺麗さっぱり人質の早瀬を見捨てている。

「それでね。見た限りは足技ばかりだったけど、千里ちゃんはどんな武术やってるの？空手、拳法、それとも、キック？」

目を輝かせて身を乗り出してくる早瀬に、千里は心持ち背を反らせた。

「早瀬さん」

「なに？ ひよっとして、テコンドー？」

「これも、スカウトなんですか？」

——早瀬さん。

早瀬の脳裏に、かつて耳にした一つの声が蘇った。

——強いストライカーを、連れてきなさいな。そうすれば——

「……………」

「早瀬さん？」

「は？ あ、はいっ」

「独学、です」

「えっ？」

「私のは、独学です。幼い頃は道場に通っていましたが、今は何も。技は、道場で習った記憶を頼りにしただけです」

早瀬は、ぽかんと口を開けた。

あの動きが、独学？

「あの……。ホントに、それだけ？」

「いえ。最近、メールで通信教育みたいなものも受けています」  
つうしんきよういく。

早瀬は口の中でその言葉を反芻はんすうした。目まいすら感じて、テーブルに両手をつく。

追い討ちをかけるかのように、リビングの掛け時計が時報を鳴らした。千里がそちらを見て、腰を上げる。

「朝ごはん、食べますか？ 買い置き冷凍食品でよければですけど」

「……いただきます」

早瀬はがっくりと俯いたまま、答えていた。

3

「早瀬さんは、プロレスラーなんですよね」

お米以外は、冷凍食品のおかずと、レトルトのお味噌汁。

いささか味気ない朝食を終えると、千里は早瀬にそう切り出した。

「う、うん。あんまり、強くはないんだけどね」

苦笑いを付けて答えた早瀬は、そのまま考え込んだ千里の様子に、首を傾げた。

「実は、お願いがあるのですが……」

千里は、言いかけてからもう一度熟考モードに入り、早瀬ももう一度首を傾げた。

時間にして、五秒。体感では、その倍。

ようやく千里は、口元に触れさせていた左手を離して、言った。

「私のトレーニングに、付き合ってくれませんか？」

マンションからは徒歩数分の、運動公園。

スーパ―のお惣菜とサンドイッチで済ませた昼食や、何度かの休憩を挟んで、トレーニングは夕方まで続いた。

「千里ちゃんって……このトレーニングを、毎日やってるの？」

「平日は、半分だけですよ」

舌を巻くとは、このことだった。

半分でもプロ顔負けの分量もそうだが、問題は内容と密度だ。組み手や技の練習が多いならともかく、ひたすらハードな基礎鍛錬のメニューが続くとあつては、体力が続いたとしても、普通なら気持ちの方がもたない。

（さつきは、すごい天才さんかと思ったけど。これだけ基礎がしっかりしてれば、あれだけ『動ける』のもおかしくないってことかな……）

早瀬も途中までは同じメニューをこなしていたが、参考にしたいという千里の勧めもあつて、後半は自分用のメニューに切り替えている。

「それも、プロレスの技なんですか？」

「ううん。これは、琉球空手の型だよ」

小休止して自分を見ていた千里に、早瀬は型の動きを止めないままで言った。

「プロレスだから一通りいろんな技も使うけど、やっぱり私のベースは、昔からやってたこれだからね」

なめらかだが力強い動きは、遅れて身体に付き従う長い二つ結びの髪の毛の効果も得て、上質な舞いのようにも見えた。

千里の他にも、散歩中のお年寄りや子供を連れだした女の人は何組か、時おり立ち止まっては目を細めていく。

「空手の型は、実戦相手を想定して行なうもの。そう聞いたことがあります」

千里が給水用のペットボトルを片手に立ち上がった。トレーニングズボンについた芝生を払う。

「私は素人ですが、その動きを見ればわかります。早瀬さんは——強い。プロレスでのラックはともかく、昨日の男たち程度は、軽く捻ることもできたんじゃないでしょうか」

早瀬は、型の動きを止めた。

その顔に、はにかんだ微笑が刻まれる。

「それはちよつと、買いかぶりすぎかなあ？ 恥ずかしいけど、夕べの私は——」

「ほとんど無傷、でしたね。倒してから気づきましたが、男たちは全員傷だらけでした。どうして、本気で戦わなかったんですか？」

「……一応、私もプロのレスラーだもん。ケガ、させちゃうかもしれないし」

「訴えられたら困る、ということでしょうか？」

その発想は無かったらしい。早瀬の目が大きくまたたかれ、それから、「もっと、逃げ足が速かったらよかったですね。うまくは行かなくて、今度は困ったような微笑を浮かべた。

対する千里はしばらくの間、理解不可能、という顔つきを見せていたが、「あの手の男たちは、しつこいです」と、少しだけ話題を変えた。

「ここでの用が終わったのであれば、早めに発たれることをお勧めします。本気で戦えないのであれば、なおさらに」

「千里ちゃん？ どこ行くのっ？」

早瀬から見て横方向、公園の出口に向かおうとしていた千里が、足を止めた。

「仕上げのロードワークです。一時間ほど走ってくるので、先に帰っててください。もし出発されるつもりなら、カギはポストの中に入れて」

「冷蔵庫っ」

あまりに唐突な単語に、前を向いたばかりの千里の顔が、もう一度早瀬の方へと戻った。

「あのね。冷蔵庫の中、勝手に使っちゃっていいかなあ。ダメ？」

「……家のカギを冷蔵庫に入られても、困りますが」

「違いますっ。えーとね、その、私、お金なくって。助けてもらったお礼とかできないから、せめてお夕飯でもって思うんだけど……」

胸の前で人差し指を合わせ、上目づかいでこちらを見られては、これはもうどうしようもない。

千里は無言のまま、頷きを返していた。

商店街を抜けて、住宅地に入った。

角をあと三つほど曲がれば、スタート兼ゴールの運動公園に辿り着ける。

その一つ目の角、十字路の手前で、千里は快調に飛ばしていた足を急停止させた。

「よお、姉ちゃん。夕べは世話になったなあ。ああっ？」

さんした  
三下のチンピラ役を選ぶオーディションなら、一発合格も堅いと思われる声と態度。

ぞろぞろと仲間を連れて角の向こうから姿を現したのは、夕べに千里の金的蹴りで生き地獄を味わった、リーダー格の男であった。

「ちよっとちよっとお。あんたらってば、こんなか細い小娘にのされたのかい？」

女の声は、背後から聞こえた。

右足を引き、半身になってから視線を流すと、キラキラ光るラメ入りの派手な紫ワンピース



すが、千里の目を吸い付けた。

十人近い男たちを引き連れて道を塞ぐ、スタイルこそ悪くないが目つきと服の趣味は最悪な年増女性の姿は、早瀬から聞いた話の記憶とぴったり符合した。

「……秒殺女」

「はあ？ 何ですって？」

ひつつめ髪の中の厚化粧が、怪訝そうに歪む。

その反応を無視して素早く目を走らせたところ、相手は前後合わせて十七名。

か細い小娘一人を取り囲むには、あまりに大仰すぎる数だった。

「聞けば、夕べはうちの師範代と門下生を、随分と可愛がってくれたそうじゃないの」

女の声には余裕が溢れていた。自らの実力ではなく、頼んだ数の多さからくる余裕だ。

「しかも昨日の今日で、あの早瀬って女と二人仲良く公園でお遊戯してたってねえ。これ

また随分と、あたしたちをナメてくれたもんじゃないか。そうだろ、あんたたち？」

男たちが全員、一歩前へ踏み出した。

どの顔も、夕べ早瀬に向けたような下卑た笑いを浮かべている。

女がひと声掛ければ、一斉に男たちが押し寄せてくるのは間違いない。その渦の中心で、

千里は顔色一つ変えずに女と正対した。

「私なんですか？」

いきなり千里が発した質問の意味が、女にはわからなかった。

千里は噛み砕いて質問を繰り返す。

「私よりも恨みを晴らすべき相手が、他にいるんじゃないですか？」

今度は意味を理解した上で、女は押し黙った。

その反応を誤解したのか、千里は三たび、さらに露骨な表現を使って訊いた。

「あの人、早瀬さんを連れてくれば、私は見逃してもらえませんか？」

一秒——二秒——。

突然、甲高い笑い声が夕暮れの迫る住宅地に響きわたった。

腹まで抱えてひとしきり笑う女を前にしても、千里は無表情のままだった。

「あー、面白い。何を言うかと思ったら。あんた、想像以上に大したお嬢ちゃんねえ。気に入ったわよ」

くくくつ、とまだ喉で笑い続ける女に、千里は軽く両目を閉じた。お礼の意味だったのかも知れない。

「いいわ、確かにあたしの目的はあの女だしね。あいつを呼び出してくれたら、その場であんたを解放してあげる。それでいい？」

千里が首肯するのを待ってから、女はあからさまな侮蔑の笑みとともに言った。

「それにしても。最近の若い女の子って、怖いものなのねえ？」

「うん、そう。来月の仕送り、ちよつと遅れるかもしれないの。ごめ——うん、うん。大丈夫なのね？ よかった。それじゃあ、また」

安堵の表情で実家への電話を切った早瀬は、携帯——ちなみに団体から無料で借りている業務用だ——の液晶画面に表示された時刻に気付き、不安げにテーブルの上を見た。

「千里ちゃん、遅いなあ。貧しいお姉さんならではの知恵と工夫と愛情がいっぱい詰まったお夕飯、このままだと冷めちゃうよ」

温め直してもおいしいとは思うけど、でもレンジ使うと電気代もつたいないし、と腕組みしてしかめっ面を作ったところで、電話が鳴った。

携帯ではなく、千里の家の電話だ。

取っていいのか迷っているうちにコールは十回を数え、しかも止まる気配を見せない。意を決して、早瀬は受話器を取った。

## 4

「千里ちゃん!!」

息せき切って夜の運動公園に駆け込んできたパーティの主賓を、主催側の男たちは三秒と待たせはしなかった。

物陰から次々に姿を現したかと思うと、早瀬が身構えた時には、すでに歓迎の輪で彼女を取り囲んでいた。

「あなたたち、よくも千里ちゃんまで巻き込んで……この卑怯者！」

十数人の男たちによる輪の中でも、早瀬は臆するところを見せなかった。目には怒りの炎が燃えている。

「千里ちゃんはどこ!? 無事なんでしょうね！」

「無事ですすよ」

弾かれたように振り返る早瀬の前に、輪の一部を割いて三つの人影が現れた。

薄暗い公園灯に照らし出されたのは、昨日訪ねた女と、先ほど電話してきたリーダー格の師範代。

そして――

「その様子だと、策も何も無く、ただ駆けつけたようですね」

「千里、ちゃん……?」

女のすぐ横に立った千里は、拘束されているわけでもなく、男が電話で言った捕らわれの身とは思えなかった。

何より自分を見つめて首を振る軽蔑の眼差しが、早瀬にかすれた声を上げさせた。

「千里ちゃん？ これは……」

「見捨てて逃げるような人とも思いませんでしたが、いくらなんでも甘すぎですよ、早瀬さん。普通ならこれで、共倒れ確定です」

「そうよねえ。まったくくだわ、お嬢ちゃん」

したり顔で頷いた女の手が、千里の肩に置かれた。至極、親しげに。

「そんな、まさか……」

虚ろに呟く早瀬の顔から、音すら立てて血の気が引いていった。

嘲りの笑い<sup>あざけ</sup>が、自分を取り囲んだ男たちの輪から聞こえてくる。

それでも早瀬は信じられないという顔で、すぎるような視線を千里に向けた。

「千里ちゃん……どうして？ 私はただ、あなただけでも守ろうって……」

「守る、ですか」

その声だけで、早瀬は慄然とした。嫌悪の感情に満ち満ちた、千里の言葉に。

「それは、私が一番嫌いな、弱い考え方です。愚かですね」  
ぐらり、と世界が揺れた。

早瀬の膝が、地面に落ちる。

取り囲む嘲笑はさらに大きくなって、脳裏に容赦なく鳴り響いた。

「——さて。これで私は帰れるんでしょうか？」

話は終わったとばかりに、千里は女に訊いた。そういう約束だ。

「そうねえ、あたしはもういいかしら。ご苦労さま」

早瀬を痛めつける準備なのか、革手袋をはめながら、女は言った。

「ただ——」

視界の中で師範代の男が背後から千里に忍び寄るが、女は意識して無反応を通す。

「こいつらも、あんたに用があるみたいでねえ？」

毒々しい笑みこそが、合図だったのか。

男が、至近距離から千里に踊りかかった。

愕然と振り向く間も与えず、鉤状かぎに曲げた指で少女の肩と胸を抱きつくように鷲掴みす

ると、足を払って引き摺り倒す。

必死で逃れようとする肢体を、男の腕力でねじ伏せ馬乗りになって、自分を見上げてくる怯えた瞳に背筋を震わせながら、整った鼻筋に拳を一発、二発、三発。

いとも容易く飛び散る、千里の鮮血。自分の頬にも跳ねたその一滴を舐めとって、男は恍惚の眼差しで哄笑を放った。

——激痛が脳内物質を飛び散らせる、焼き切れた意識の中で。

「だと、思いました」

前に大きく傾かせた身体を起こすと、千里は軽く頭を振った。

二夜連続、今夜は後ろ蹴りを股間に受けて悶絶した男と、笑みの名残りで頬を引きつらせたまま後じさる女をそれぞれ一瞥するにとどめて、男たちの作る輪の中心へと歩を進める。

ぺたりと座り込んでこちらを見上げた、早瀬のもとへと。

「千里ちゃん……」

「先ほどは、少し言い過ぎましたね」

いろいろな事が一度に起きて処理しきれしていない早瀬に、千里が手を差し出した。

「えっ……えと。えっ？」

口を金魚のようにパクパクとさせながら——髪型のせいとか妙に似合う——早瀬がその手を取った。

ぐいつ、と引かれて早瀬の腰が上がり、勢い余って千里の肩に寄りかかった。

「十七人。先ほど一人減らして、それでも十六人」

頬にかかる千里の髪が、くすぐったい。

早瀬は、肩から少しだけ顔を離して、小さく動く千里の唇を見つめた。

「この人数を私一人では、さすがに無理がありました」

早瀬の肩に両手が添えられ、少し距離が作られる。

「ですが」

ほんの一瞬だけ視線を交錯させてから、千里は身体ごと後ろを向いて、構えた。

「早瀬さんと、二人なら」

無防備な背中を、早瀬に託して。

「千里ちゃん……」

「どうしたんです？」

千里は振り返らない。

振り向ける状況でもないのだろう。師範代を倒されたショックからようやく持ち直した男たちの輪は、じりじりと狭せままってきている。

「でも、でもね。私は、そんなに強く——」

「私と二人でも、無理ですか？」

「……………」

なおも逡巡する早瀬に、呆れたのか、痺れを切らしたのか。

本当に『嫌いな考え方』なのだろう。次の言葉を告げた千里の声は、とても嫌そうで、そしてどこか照れくさげだった。



「早瀬さんは、私を……守っては、くれないんですか？」

はっとした早瀬の顔が、たちまち輝きを——そして闘志を、取り戻した。

「ううん！」

くるりと半回転して、構えを取る。

互いに預けた二人の背中が、微かに触れ合った。

「いつまでも何やってんだい、あんたたち!! やっておしまい！」

こればかりはびたりと雰囲気合った女の号令に、男たちは一斉に動いた。

中でも数人が地を蹴って二人に殺到する。

そのことごとくが、わずか数秒で跳ね飛ばされた。

「な……なんですって!？」

驚愕に目を見張った女の前で、第二陣、そして続く第三陣までもが、次々と宙を舞い、

地に倒れ伏していく。

「——ですねっ」

「なに？ 千里ちゃん!？」

「早瀬さんの技、やはり多彩ですねっ！」

「これでも、プロレスラーだから、ね！」

千里の打撃は、重く鋭い。

しかし、ほぼ我流のため相手に合わせる法や理には欠け、着地や技の終わりを狙われれば大きな危険が待っている。

それを見事に補完したのが、早瀬の存在だ。

ともすれば突出しがちな千里の死角を、なめらかだが一瞬で間合いを詰める足運びでカバーして、敵が入り込む隙を許さない。

守っては突き出された手足の関節を取って投げ落とし、攻めては一呼吸で数発を打ち込む寸打の嵐に、カウンターで顔面へ叩き込まれる足刀蹴り——プロレスで言うところのトラースキック。

早瀬の甘さゆえ、倒れた中にはあっさり身を起こす者もいたが、その分は千里が見逃すことなく無慈悲に沈めた。

「これで——終わりです！」

破れかぶれで突進してきた最後の男を、すれ違いざまに打ち倒す千里。

呻きを残して地に伏した男を見下ろして、彼女はようやく息をついた。

そこに生まれた、大きな隙。

「危ない！ ちーちゃんっ!!」

悲鳴に近い声にハツとする間もなく突き飛ばされ、千里がたたらを踏む。

肉が弾けるような音と、早瀬の短い叫びが同時に耳を打った。

「あぐうっ！」

愕然と振り返った千里の目の前で、肩口を押さえた早瀬がうずくまった。

「早瀬さん!!」

自分をかばった早瀬に駆け寄ろうとしたのも束の間、千里は大きく後ろに跳んだ。間一髪、大気を裂いて襲った黒い蛇が千里の影を打ち、激しい音を響かせる。

「よくも……よくもやってくれたわねえ！ この、じゃじゃ馬どもがっ！」

咆えた女は、革手袋に握った長い鞭を、さらに何度もアスファルトに打ち付けた。公園灯と月の光に晒さらされる、けばけばしい女と黒い鞭。

その組み合わせを前に、

「うわあ。なんか、びったり」

と軽口を叩いたところを見ると、早瀬の肩の傷は深刻ではなさそうだ。

千里は胸の内で安堵した。

「男たち——あなたの門下生たちは、仮にも素手でしたが」

近くに居て、早瀬を狙われるわけにはいかない。千里は、横目で女を睨みつけながら、するすると後ろに摺り足を使った。

「恥という字を、ご存知ですか？」

「耳へんに心でしょ！」

女が振り下ろした右手から、唸りを上げて鞭が飛ぶ。

立て続けに三撃、いずれも左に跳んで躲し、しかし千里と女の距離は変わらない。

間合いを詰められないのだと判断した女が、頭上で鞭を回して、にんまりと笑った。

「達人の振るう鞭はね！ 音速だつて超えるのさっ！」

空気を灼いて走った鞭が、ついに千里を切り裂いた。

長いポニーテールの先端、数センチだけを。

低い姿勢で飛び込んで一気に眼前に迫った千里の姿に、女は背筋を凍らせた。

それでも何とか鞭を引き戻して抵抗しようとするが、その首元に容赦なく打ち込まれたのは、千里の鞭。

それは、しなやかな右脚が放つ上段蹴り——ハイキックであつた。

「あなたは、達人ではなかったようですね」

どうと倒れる女を一顧だにせず、千里は肩にかかった後ろ髪を、颯爽さつそうとかきあげた。

「千里ちゃん、大丈夫？ 怪我は無い!？」

全てが終わり夜の静寂を取り戻した公園を、早瀬が駆け寄ってきた。

「それはこちらの質問です。肩は大丈夫ですか？」

「うん、かすり傷。でも、服は破けちゃって、どーしてくれよーって感じだよっ」

1980円もしたお気に入りなのに、とむくれる早瀬に、千里は、ご愁傷様です、と全くそんな感情はこもっていない声で返した。

そんな千里の瞳に、ふと、とある感情が揺らめいた。

「ところで、早瀬さん。さっき——」

「え、なに？ 千里ちゃん？」

「いえ……やっぱり、いいです」

きよとんとした早瀬を前に、千里は首を振って自分から話を打ち切った。そのまま無言で歩き出す。

早瀬が慌てて、その後ろに続いた。

夜空に浮かぶ月は、昨夜よりも少しだけ小さい。

しかし、昨夜と同じように、蒼く煌々こうこうと輝いていた。

## 5

「あーもう、疲れたなあ。お巡りさんたち、もうちよつとテキパキ仕事して欲しかったよ

ねっ」

「同感です」

夜の住宅地を並んで歩く、早瀬と千里。

時計の針は、夜の十時を回っていた。

警察署では事情聴取やら書類作成やらでのんびんだらりと無駄な時間を取られ、さらには二人が被害者なのか加害者なのかという議論まで起こり、早瀬と千里は留置場での夜明かしも覚悟した。

ところが驚いたことに、相手の女たちが『拳法の試合』と言い張ったとのことで、加害者の線は消滅。早瀬と千里は被害者として事件にするつもりもなく、急転直下解放されることになったのだった。

最後に二人を送り出した老齢の刑事によれば、「大の男が二十人近く娘二人にやられたとあっちゃ、そりや道場の面目がたたんわな」とのことである。

「でも、本当に大丈夫かな？ あの人、議員の奥さんとか言ってたし。嫌がらせとか復讐とかされちゃったら……」

「それは大丈夫でしょう。恥ずかしい写真を撮っておきましたので」

「あ、あの。千里ちゃん、いつの間に？」

「冗談です」

と言いながら、千里は携帯電話で何やらデータをチェックしている。傍らを歩く早瀬は、ただ空笑いを浮かべた。

どこからどこまでが本気なのか、千里の冗談はどうにも分からない。

もう少し付き合えばコツが分かるかもしれないが、その時間は無さそうだった。

「さてと。私は、ここでお別れかなあ」

唐突な宣言に、千里は困惑を湛<sup>たた</sup>えて早瀬を見た。

マンシヨンの前まで来て立ち止まった早瀬は、手を後ろに組んで千里に笑いかける。

「これ以上、私はここにいない方がいいかなーって。私のせいで千里ちゃんまで巻き込んで、いろいろ迷惑かけちゃったしね」

「それはまあ、そうですね」

千里は、容赦が無い。

彼女は冗談のつもりかもしれないが、判断するにはやはり付き合いが不足していた。ううっ、と身を小さくする早瀬に、千里がさらなる追い討ちをかける。

「そう思っているなら、別れるのは迷惑料を払ってからにしてみませんか？」

「迷惑料って……あのお、私、お金は……」

「身体で払ってください」

今度はさすがに冗談だろうと思ひ、しかし千里の目が真剣なのに気付いて、早瀬の身体

は固まった。

内心では、わたわたと慌てている。

だから、

「私に、早瀬さんの技を——プロレスを、教えてくれませんか」

という千里の言葉を聞いても、すぐには反応が返せなかった。

「ちようど休みです。年上の方との旅行も、悪くはありません。それぐらいの貯金は、私にもありますし」

「あ、あのね、千里ちゃん。旅行とかお金とか、そういう話じゃなくて。ね？」

「私は、強くなりたいんです」

——強いストライカーを、連れてきなさいな。

早瀬の脳裏に閃いたのは、かつて耳にした女の声。

そして、彼女が天使とも見まがえた、淡い蒼光そうこうに浮かび上がる千里の姿だった。

「……でも。でもね、千里ちゃん……」

「夕ごはん」

「え？」



「夕ごはん、作ってくださったんですね」

千里は、いつの間にか背を向けていた。

マンションの入口に向いた身体、その顔だけを肩越しに振り向けて、

「二人分を、私一人に食べさせる気ですか？ 責任もって付き合ってください」

その頬が、夜目にもわかるほど紅くなっているのを見て——とうとう早瀬は、観念した。

「うん！」

空には、蒼い月。

早瀬が作っておいた二人分の夕食は、温め直しても十分に美味しいものだった。

## 第二章 漆黒のダイヤモンド

1

闇を閃光が切り裂いてから、数秒。

遠くの雷鳴が、明かり一つ無い路地にまで聞こえてきた。

「あら、怖いこと」

ちつとも怖がつてはいない声が、頭上を気にして振り仰いだ。

手にした精緻せいぢな作りの扇子が、半開きからぱちりと閉じられて、典雅な口元に当てられる。

「雨に降られては、たまらないわね。戻るわよ」

路地の奥にかけられた銀鈴のごとき響きは、耳にした者全てが何らか反応を示さずにはいられない艶やかさと威厳とを備えていたが、今回に限ってはそのまま闇へと吸い込まれた。

それを気にした風もなく、女は再び口元の扇子を弾く。

「それにしても、『南海の弾丸』を目当てに来てみれば、『眠れる獅子拳』までも一緒に  
はね。あのクラスとの二対一は想定外だったから、どうなることかと思っただけど」  
視線が動いた。

路地の奥から、静かな足音がやってくる。

闇の中から浮かび上がってくるのは、周囲よりもさらに濃密な闇。

フードを備えた漆黒の長衣を、頭から纏まとった人影だった。

「終わってみれば、結果は一石二鳥。むしろ、手間が省けたかしら」

フラッシュにも似た雷光が、路地を青白く染めた。

一瞬だけ浮かび上がったのは、長衣に飛び散った赤い血と、垂らした両手で硬く光る、

長衣と同じ漆黒のフィンガーグローブ。そして、フードの奥で冷たく輝いた、氷の瞳。

「私の予想以上に強くなってくれたみたいで、嬉しいわ。これからもその調子で頼むわよ。

ねえ——」

女の唇が最後に紡いだ名前は、世界を揺るがす雷鳴に遮られ、誰の耳にも届くことはな  
かった。

激しい雨はもう、すぐそこまで迫っていた。

「うわあつ、ストップ！　そこまではストップう！」

窓越しでもわかる、気持ちの良い朝の光。その中に響き渡った必死の声が、倒れた顔を襲いかけた物理的衝撃を、ぎりぎりまで風圧までにとどめた。

「あははっ、間一髪。……はあ」

少女の足首とシューズが大写しになった光景は、ある趣味の男にとっては堪<sup>たま</sup>らないものかもしれないが、早瀬葵にそんな趣味は無かった。大体、性別からして違う。

「え、えーっと、合格。今のが、相手のタックルへの対応の一つよ。切って倒して、蹴りを一発。キックの当てどころ間違えると本っ当に危ないから、そこは気をつけてね」

「はい。ありがとうございます」

素直に頷き、頭まで下げた桜井千里に、早瀬はマットから身を起こしつつ笑顔を見せた。額に少しだけ浮いてしまった冷や汗を、手の甲で拭う。

「あとは、もうちよつと余裕持つて寸止めしてくれると助かるかなあ。この調子だと、そのうち私の心臓が止まっちゃうかも」

「す、すみません」

これも素直に謝った千里の肩に掴まって、早瀬は立ち上がった。

少しずれてしまった右の髪留めを直しつつ、思った以上に恐縮している千里へのフォローで、もう一度笑顔を見せた。

「でもホント、千里ちゃんの吸収力はすごいよねー。私なんか、タツクル切れるようになるだけでも随分とかかったもん」

千里の家を出発してから、まだ三日。

早瀬の用が優先のため、練習は早朝と夜の短い時間のみ、という状況下において、千里はすでに受身や防御テクニクスのいくつかを、ほぼマスターしていた。

幼い頃からひたすら基本を積み重ねてきた千里ならではの吸収力、ということは理解しつつも、覚えの悪い我が身と比べて、少しやるせなくもなってしまう早瀬だった。

「うーん。私もいつそ、一からやり直した方がいいのかなあ」

「タツクルの切り方を、ですか？」

「ううん。そっちじゃなくって、基礎鍛錬の方なんだけど」

と言ったところで、早瀬は三日前から気になっていたことをふと思い出した。

忘れないうちに、千里に訊いてみる。

「そういえばさ、どうして千里ちゃんは『技の受け方』から教えてほしいって言ったの？  
てっきり、プロレスや空手の攻め方を知りたがるかと思っただけだ」

「……おかしいでしょうか？」

「あ、違う違う。むしろ、そっちの方が正しい道だとは思うの。でも、普通はまず攻撃の方を知りたがるんじゃないかなーって」

「もちろん、プロレス技にも興味はありますよ」

千里は、傍らのロープに掛けていたタオルを取りながら言った。

「投げや関節、あとはドロップキックとかそういう技にも。ただ、もし誰かに直接教わる機会があればまず防御を、と先生に言われていたものですから」

「先生って、幼い頃通ってた道場の？」

「いえ、メールで教わっている先生です」

「あ、そっちなね……」

通信教育って話はホントだったんだ。いや、今のも千里ちゃん流の冗談なのかも、と悩みつつ、早瀬も自分のタオルを手を取った。

その早瀬に、というよりも自分に言い聞かせるように、千里が呟いた。

「……私の技は、相手を倒すためのもの。ただ、それだけなんですよ」

「え？」

「自分でも、わかっているんです。このままでは、すぐに限界がやってくる。だから私は、早瀬さんに——」

「私、に……？」

早瀬が顔を拭く手を止めたところで、ちょうどタイムリミットがやってきた。

「あつ、早瀬さんだあ！」

「おはようございます、早瀬さん！」

がらがらと音を立てて開いた入口の引き戸から、きゃあきゃああと連れ立って入ってきた五人は、いずれも千里と同じか少し下くらいの女の子たち。

彼女たちは、早瀬が会いに来た人物が所属するこのジムの、練習生だった。

## 3

「今日も大した人気ぶりでしたね、早瀬さん。さすがです」

「もうっ、おだてたつてここはオゴらないよ？ 何年もやってる分、少し名前が知られるってだけなんだもん」

本来の練習開始時刻までなら、というジム側の好意で、早瀬と千里は、この二日間だけ特別に設備を使わせてもらっていた。

練習生たちは、他団体とはいえ名の知れたレスラーである早瀬と一緒に練習をやりたがったが、これは約束だからと早瀬が辞退。

二人は、時間つぶしと軽い食事を兼ねて、近場の喫茶店に入っていた。

「ウチは小さい団体だけど、他のトコとの交流は活発だったの。私もしょっちゅう出稼ぎ——じゃなかった、参戦してたから、顔はそこそこ広いんだ」

「今日、試合から戻ってくるはずの人、確か——」

「柳生さん。柳生美冬さんよ」

「その柳生さんも、早瀬さんとはお知り合いなんですか？」

「柳生さんが前の団体だった頃、挨拶程度にはね。年は下だけど、私なんかよりもすごく強くて。あとは、ホントのお侍さんみたいな人だったなあ」

柳生美冬が、当時所属していた老舗団体・WARSを離脱したのは、一年と少し前のことだ。

打撃系中心の小団体に移ったことで、メディアなど一般への露出は激減。しかし、彼女の白刃はくじんを思わせる鋭い技と武骨なファイトスタイルは、その後も健在どころか磨きがかかり、男女問わずコアなファンからはカリスマ視されているという。

早瀬は、その柳生に会うべくこの地を訪れ、巡業から戻ってくる今日の午後、ジムで顔を合わせる約束を取り付けたのだった。

「早瀬さんよりも強い人、ですか。会うのが楽しみですね」

「楽しみと言いながら、千里の口調は淡白で、ニコリともしない。」

思わず早瀬は『会った早々、柳生に果たし状を突きつける千里の凶』を脳裏に浮かべて



しまったが、いくらなんでもそれは無いだろうと、笑って打ち消すことにした。

「あははは。まあ、私より強い選手はたくさんいるんだけどねー」

自分で言うのもちよつと悲しい補足を入れつつ、早瀬はソファシートから腰を上げた。千里に一声かけて、化粧室へと向かう。

残された千里は、ちょうど食器を片付けに来たウェイトレスに軽い頷きだけで答えると所在なさげに店内を見渡していたが、その視線が不意に止まった。

向かいの席でサラリーマンらしき男性が広げたスポーツ新聞に踊る『女子プロレスラー』の文字。

数日前までなら気にも留めなかったであろうその記事に焦点を合わせると、続いて『辻斬りか!』『闇討ち相次ぐ!』といった物騒な文字が飛び込んできた。

思わず千里も目を凝らす。

細かい文字の一つ一つまでは読み取れなかったが、どうやら二人の女子レスラーが路上で何者かに襲われ、病院に担ぎ込まれた、という記事のようだ。

被害者であろう二人の写真は知らない顔だ——といっても千里が顔を知るレスラーはごく少数しかいない——が、顔の広いという早瀬なら、知っている選手かもしれない。二人の名前を記憶しようとしたところで、低い振動音が千里の注意を引きつけた。

ガラスのテーブルの上で、早瀬が置いていった携帯電話が震えている。

他人の電話に出る気はなかったが、ガラスを叩く音が明らかに耳障りだったし、放っておけばテーブルの端から落ちるかもしれない。

千里がテーブルから携帯を拾い上げると、液晶の小窓に表示された発信者名が、見るにはなしに目に入った。

「あ、電話!? ごめんね、千里ちゃん!」

謝られても困ってしまうが、小走りに戻ってきた早瀬に、とりあえず携帯を渡す。

早瀬が焦り気味に耳に当てて「もしもしっ」とやると、幸いにも向こうがしびれを切らす前だったようで、早瀬の顔には安堵の色が広がった。

「はい、はい、早瀬ですが——って、那月ちゃんじゃない! どうしたの、急に……?」

安堵の色は、たちまち喜びと不安のブレンドに変化した。

千里に背を向けて少し離れ、他のお客さんの手前もあつてか、小声で話す。

それに聞き耳を立てるほど千里は無神経ではなかったが、特徴的な一部の言葉は、聞かずとも耳に入ってきてしまうものだ。

「——団体の——大丈夫? ——中森さん——入院してから——唯ちゃんも。退院は——」

千里はふと、先ほどの新聞記事を思い出した。

向かいの席に目をやるが、残念なことに新聞は、ちょうど男性の黒いカバンに収まった

ところだった。

その間に、早瀬の電話も終わろうとしていた。

「うん。お大事に……って、もうだいぶ元気なんだよね、よかった。それじゃあ！」  
最後は弾む声で通話を終えた早瀬だったが、直後に携帯の画面を見つめた顔は、その声や「よかった」という言葉とは正反対の印象しか与えなかった。

それでも、千里の視線に気付くと微笑みを浮かべたが、これも明らかに失敗作だ。

こういう場合、話の内容を細かく詮索する人もいれば、何も聞かない人もいる。

千里が選んだのは、前者に近い中間地点だった。

「早瀬さんの仲間——後輩の方ですか？ 電話を持った時、真壁那月、というお名前を見てしまったのですが」

早瀬はそれには答えずに、少しうつむき加減で席に戻ってくる。

すぐ座るのかと思いきや、立ったまま、上げた顔を千里の方に向けた。優しく明るい、しかしどこかいつもとは違う笑みを浮かべた早瀬は、

「そうなの。那月ちゃんは後輩なんだけど、気が強い子ですねー。最近、こっちから連絡しなかつたから、何やってんのよって怒って電話してきたんだ」

と肩をすくめてから、

「そういえば、千里ちゃんには言ってなかつたね。実はうちの団体、ほとんどの選手が食

中毒で入院しちゃってるんだ。平気だったのは、なんと私一人。私はほら、賞味期限切れの牛乳とか平気なくらいに鍛えられてるじゃない？ だから一人だけ平気だったのね。これはもう、アレよアレ。貧乏生活の勝利ってとこかなあ？」

流れるような弁舌だった。

りゅうちょう流暢すぎて違和感は強いものの、説明は筋が通っていなくもない。

千里が納得したのかどうか、変化の少ないその顔色から窺い知ることはできなかったが、「それは、大変ですね。ところで——」

ともあれ、彼女の方針は『少し質問を変える』で決まったようだ。

「早瀬さんが強い人を訪ねているのも、そのせいなんでしょうか？」

——強いストライカーを、連れてきなさいな。

「えっ？ うん、そう、そうなの。現役の人でもそうでなくても、何とか人数集めないと興行打てないからね。なりふり構ってられなくてっ」

今度は、私は動揺していません、と全身で主張してしまっている早瀬がそこに居た。

千里は対照的にほぼ無反応のままだが、いい機会だからいろいろ訊いておこう、とでも考えたのだろう。あるいは、面白そうだから質問攻めに見してみよう、ぐらいは思ったのかもしれない。

「もう一つだけ、訊いていいですか？」

「う、うん。なにかな？」

「ちーちゃん、というのは、どなたかのあだ名なんでしょうか？」

早瀬の一時停止ボタンが押された。

そう思えるほど見事に、席につこうとした早瀬の動きが固まっていた。

それも一瞬、すぐ何事もなかったかのように腰を下ろすと、早瀬は再び千里と向かい合った。

しかし、その表情は明らかに硬く、顔色は白い。

「ちーちゃん……って？ 千里ちゃん、どうして、その名前……？」

紡がれた声は人形を思わせた。

「……初めて会った次の朝、早瀬さんが寝言でおっしゃっていました。それから、公園で戦った時にも聞いた名前です。その時に訊こうかとも思ったんですが——この話は、ここまでにしましょう」

千里からの唐突な打ち切り宣言に、むしろ早瀬の方が驚いた。

まばたきをした早瀬の瞳に、斜め下に目を落とした千里の姿が映っている。その顔には、はつきりと後悔という色が刻まれていた。

「どうも私は、空気を読まずに質問や発言をしてしまう癖があるようです。学校や寮で、相手を怒らせたたり煙たがれたりしたのも、一度や二度ではありません。——あまり、好か

れるタイプではないということですね」

千里の顔は、後悔から自己嫌悪へとその色を変えていた。

早瀬は何か言わなきゃと口を開いたが、いざ開いた口からは、何の言葉も出てきてくれなかった。

「早瀬さんは優しいので、少し甘えてしまいました。これからは、もう少し気をつけることにします。だから、今の話も——」

「違うのっ」

ようやく出てくれた言葉とともに、早瀬は強く首を振った。

「違うの。言えない話なんて、一つもないんだよ。ただ、何から話せばいいのか……って、それだけなの。だから……もう少しだけ時間くれるかな？」

「それは、構いません。ですが、無理をする必要は……」

「無理じゃないってば。私が、千里ちゃんには知っておいてもらいたいんだもん。ね？」

早瀬葵・謹製の、今度こそ本物の微笑み。

互いの間を流れる空気が、ようやく和やかなものへと戻り——  
喫茶店の古風な鳩時計が、二人に時の訪れを告げた。

少し余裕を取ったため、二人がジムに戻ったのは約束の時間よりも随分と前だった。

「あれ？」

「どうしました？」

「なんか、鍵がかかかってるみたい」

入口の引き戸に手を掛けた早瀬が、困惑顔で千里に言った。

扉の小窓は曇りガラスで見通せないが、明かりがついていることだけはわかる。建てつけの問題かと千里も手を貸し、二人で力を入れてみるが、そういうわけでも無さそうだ。

二人は顔を見合わせ、それから早瀬が、扉の向こうに呼びかけた。

「あの一、早瀬ですけど。開けてもらえますかー？」

応答は、すぐにあった。

二人のどちらも予想だにできなかった応答——苦痛と恐怖に満ちた、少女の悲鳴が。

「早瀬さんっ！」

「うんっ！」

こちらを見た千里に、頷きを返したのも一瞬。早瀬は一步下がって半身になるや、鋭い呼吸から左の横蹴りを放った。

合わせ鏡の如く同じ姿勢から放たれた千里の右脚とともに、直線を描いた衝撃が二つ同

時に扉を貫いた。

引き戸は吹き飛びこそしなかったが、扉同士を固定しただけの簡素な錠はひとたまりもなく、揺らいだ戸に千里が手を掛けて力任せに引くと、意外なほど素直に滑って、派手な戸当たり音を響かせる。

その音が大気を震わせているうちに、二人は室内に飛び込んで——驚愕がその足を止めた。

ほぼ中央に位置する、練習用の簡易リング。

それを囲うかのように四方に倒れ、ぴくりとも動かない人影は、ちようど四つ。いずれもこのジムの練習生たちだ。

五人の練習生、残り一人の姿は、マット上にあつた。

背にしたコーナーポストを今まさにずり落ちていく日焼けした小柄な身体には、かけらほどの生命感も見当たらない。

その手から、リングという舞台にはそぐわない無機質な物体——携帯電話が滑り落ちた。警察か他の誰かへ助けを求めようとしたのか、そうだとすればそれは成功したのか。

少なくとも今すぐにそれを確かめることは、誰にもできなくなった。

無慈悲に携帯電話を踏みつけ粉碎した、黒いリングシューズの持ち主——頭から漆黒の長衣を纏った人物によって。



「一体これは……」

千里の眩きは届かなくても、二人の登場にはとうに気付いているはず。

しかし長衣姿は一顧だにすることなく、かつて携帯電話だった物をリング外へと蹴り飛ばすと、ゆっくりと足を進めて、もう一つの物体をも、凄まじい力でリングの外まで蹴り飛ばした。

おそらくは自らが打ち倒したであろう、五人目の少女の身体を。

「なっ！」

きらきらと輝く瞳で、早瀬を見つめていた少女たち。

部外者で無愛想な自分にも、笑顔で接してくれた少女たち。

一瞬だけ見開かれた千里の目が、すうっと細められた。

瞳の奥に湛えた激情の命ずるまま、傍らで同じく怒りに身を震わせる早瀬とともに、リングへと一步を踏み出し――

「早瀬さん？」

早瀬は、身を震わせたまま動かなかった。

振り返った千里が思わず息を止めたほど、表情は凍りついて、血の気が無い。

震わせているのではなく、震えてしまっている身体。その身体を自らの腕で抱くように

して、早瀬は見てはいけない深淵を覗いてしまった者の声で喘いだ。

「なんで……どうして、ここに……」

「……早瀬、さん？」

「そうそう——早瀬さんよね。ようやく思い出せたわ」

あさつての方向から聞こえてきた声に、はっと千里が目を向けた。

彼女にとって微妙に死角となっていた、入り口側左手の隅。

壁から身を離れた女性が優雅な会釈を見せると、流れるような黒髪が差し込む光に揺れ

て、艶やかに<sup>あや</sup>絢をなした。

「お久しぶりね。早瀬葵さん——でよかったかしら。こんなところで鉢<sup>はちま</sup>合わせるとは思っ

ていなかったから、思い出すのに時間がかかってしまったの。悪かったわね？」

口元にあてがわれた扇子が、ぱちりと鳴った。

黒を基調とした控えめな意匠は高級感を感じさせるが、女性の手には少々余り気味の武

骨さが、ただの工芸品でないことを示していた。

鉄扇だ。

「寿……京那……」

ことぶき、けいな。

早瀬の虚ろな眩きを聞き取った千里と、女性——京那の目が合った。

京那がにこやかに目を細める。

敵意のかけらも感じられない、天与の美貌に裏付けられた、品のある微笑み。

なのに、千里の背筋には冷たいものが走った。

「その子は初顔だけど、さしずめ候補者の一人といったところかしらね、早瀬さん」  
候補者？

千里は、目だけを早瀬の方に送った。震えは治まってきているようだが、受け答えができそうな顔色にも見えない。

京那は、気にすることなく続けた。

「柳生さんにも目をつけたとはさすがだけれど、こちらもただ待っているつもりは無くつてね。そろそろ現役選手を中心に、目ぼしい相手を漁あさっていくことにしたの。強いと評判のストライカーを、ね」

——次は、強いストライカーを連れてきなさいな。

目の前の顔が、かつて早瀬に告げた言葉。

早瀬の身体が、はた目にもわかるほど大きく、びくりと震えた。

それを見て、京那が、あら、という形に口を動かした。ようやく、早瀬の様子がおかしいことに気付いたらしい。

「大丈夫？ 顔色が悪いわよ、早瀬さん。どうかしたの……つと。ああ、これはショック

よね。気が付かなかったわ、ごめんなさい」

突然、得心とくしんがいったというように表情を変えた京那が、口元の鉄扇を広げた。細めた目だけを二人に見せて、

「そうよねえ。この子が行きかけの駄賃に全員片付けちゃって、あなたが駆けつけた時には、辺りはもう血まみれの死屍累々。——今の光景は、中森さんの……あなたの団体の時と、同じですものね？」

微かだが明らかに嘲弄の混ざった響き。小さく息を吐いた京那が、鉄扇を少し下げた。

「あなたが愛した仲間たちを、この子が残らず叩き伏せた時。そう、あの——」  
早瀬の瞳に、京那の笑みが映る。

「あの、どうしようもなく弱つちい、身の程知らずなクズどもをね？」

この上ない、侮蔑の笑みが。

「京那あ!!」

早瀬が、弾丸の勢いで地を蹴った。

薄笑いを浮かべた京那が、すかさず右手を引く。

鈍く光る鉄扇が、目には見えない投擲とうてきのルールを高速で滑っていき、しかし射出の寸前、急制動を掛けられた。

「千里ちゃん!!」

京那の投擲を止めたのは、飛び出そうとした早瀬の前にかざされて行く手を阻んだ、千里の右手だった。

「千里ちゃん！ 邪魔を——」

「とんだ食中毒ですね」

京那を見つめたまま千里が放った一言に、早瀬は抗議の声を呑み込んだ。嘘が一つ、ばれたのだ。

「……千里ちゃん。あの……」

「気にしていません。それに、もう一つ、わかりました」

「え？」

もう早瀬の激発は無いと判断したのか、千里の右手が下がった。視線も京那から外されて、リングの方を向く。

こちらを見るでもなくリング中央でたたずむ、長衣の人物の方を。

「あれが、強い人を探していた理由。いえ、目的ですね」

「え？」

早瀬二度目の「え？」は、ひるがえ翻った長いポニーテールに当たって消えた。

颯爽とリングへ駆ける千里の凛々しい背に、思わず見とれたのも数秒。トップロープを掴んで跳んだ千里が、華麗にリング内へと降り立った時、

「千里ちゃん!? ダメエっ!!」

駆け寄ろうとした早瀬の足下に、鋭い風切り音が突き刺さった。

「駄目なのはあなたよ、早瀬さん」

クツシヨンフロアを切り裂いた鉄扇の姿に、早瀬は歯噛みした。

「あの子の身のこなし、私もなかなかに興味があるの。もし邪魔をすれば……わかってい  
るでしょう?」

脅しだと断じて走る手もある。

しかし余人は知らず、相手は寿京那だ。

背後から自分に鉄扇を突き立てることに何の躊躇ちゆうちよも無いことが、確かに早瀬にはわかっ  
ていた。

「あなたに悪い話ばかりでもないはずよ。もしもあの子が勝てば、あなたの満願は晴れて  
成就。めでたしめでたし、じゃないかしら?」

予備があるのか、同じ鉄扇で口元を隠して、くすくすと笑う京那。

千里の勝つ可能性など全く信じていない彼女を、早瀬は殺意すら込めた目で睨みつけて  
から、リング上に視線を戻した。

その目は、祈りを込めたものに変わっていた。

「一応、名乗っておきます。桜井千里です」

いささかの好意も感じさせない声で、千里は自分の名を名乗った。

正対した二人の距離は、二メートル弱。

どちらも構えは取っていないが、いまだ顔も見えない相手の技や戦法が不明な以上、少なくとも千里にとって、油断できる距離ではない。

いつ相手の急襲があってもおかしくない状況で、それでも千里は『一応』名乗った。

半分は儀礼、あと半分は動かない敵の反応を見る呼び水であり、もとより返答など期待してはいない。

だから、

「……ゼロ……」

という小さな声がフードの奥から聞こえてきたとき、千里は思わず反射的に聞き返してしまっただ。

「ゼロ？」

「う、ん。私の……リングネームだ、よ。寿、零……」

千里の殺気が、ほんの少しだけ緩んだ。

想像していたものとは全く違う、朴訥ぼくとつな女性の声。

これが、少女たちを無惨に痛めつけリング外に蹴り飛ばした、あの非情な敵のものなのか？

「よろし、く……」

漆黒の長衣から突き出された同じ色のフィンガーグローブ、右手のそれが、ゆっくりと前に突き出された。

ここだけは白い肌を見せる指先が開かれ、明らかに握手を求める形で止まった。

千里の驚きと、戸惑いと、逡巡。

それを救ったのは、リング外から鋭く投げ込まれた一言だった。

「零」

苦々しい叱責の響きに、長衣が大きく一度、震えた。

「何をやっているの？ これはボクシングやプロレスの試合じゃないわ。『死合い』なのよ。そのつもりでやりなさい」

京那の手元で鉄扇が閉じられ、音を立てた。

零のフードが揺れた。頷いたのかもしれない。

握手を求めた右手がゆっくりと喉元に上がり、左手は少し前方に突き出される。右足を引いたオーソドックス・スタイル——ボクシングだ。



千里もすでに、真半身に構えている。

ジャブ、ストレート、意表をついての蹴り技まで、何が来ようと対処できる自信はあった。

「……いく、よ」

零の身体が前へと滑り、千里も重心をわずかに移動させる。

——次の瞬間、空間が爆発した。

「っ!!」

声にならない叫びは、早瀬が上げたものだった。

爆風が荒れ狂った錯覚まで感じて思わず髪を押さえ、それでも目だけは閉じずに必死に前を見る。

零が右拳を繰り出し、顔面を襲う寸前、千里が左腕でガードした。それだけだ。

だが、いかなる拳圧の為せる業か、千里の身体はリング中央からロープ際まで吹き飛ばされ、左腕は防いだのではなく犠牲になったというべきか、痺れて力が入らなかった。

「くう！」

己を叱咤するかのように呻いた千里が真に驚愕していたのは、拳のパワーでもスピードでもなかった。

零の初撃は、ジャブでもストレートでも、他のボクシングブローでも無い。

ただ、無造作に殴っただけ、だったのだ。

テクニクや駆け引きを排した、ただの暴力。それ故に感じる絶対的な力の差——底知れぬ戦慄に襲われつつ、それでも千里は前に出た。

出ようとした。

「ふっ!!」

千里の声か、零の声か。

今度は教科書通りの左ストレートが千里を打ち抜き、決して教科書通りではない凄まじいパワーが、今度も寸前で間に合った右のガードをもともせず、千里をロープまで弾き飛ばす。

運動エネルギーは吸収されたが、慣れていないロープの反動を受けて、千里のバランスは大きく崩れた。

つんのめった前面を痺れた両腕で何とかガードするも、拳だけでは無いと主張するかのような零のミドルキックが、空いた脇腹にめり込んだ。

全身を駆け巡る衝撃。

肋骨が折れなかったのが不思議なくらいの激痛の中、必死で斜め後方へ跳んだその鼻先を、唸りと共に左フックが過ぎた。

コーナーに背をぶつけた千里の息は、早瀬がこれまで見たことが無いほど、荒かった。

「零を相手に数合持すうごつとは——なるほど、逸材ね」

斜め後ろから早瀬に届いた京那の声には、千里への感歎と早瀬への嘲りが入り混じって  
いた。

「動・術・実・技、いずれも申し分なし」

コーナーポストを揺るがす、零の右ストレート。それを大きく沈んで躲した千里が、ロープ際を滑ってサイドへ回るや、右のローキックを走らせた。

「されど。計・理・虚・法、いずれも遠く及ばず」

零は、素早く踏み込んだ左脚で打点を潰すと、零距离から右のアップパーを放つ。

千里は、避け得る体勢に無かった。

「それでは——」

突き上げられた拳が、千里の顎を——身体を宙に跳ね上げる。

「あの子に、勝てはしないわ」

大きく反った身体が、ロープを遥かに越えて、弧を描いた。

——雨が、降っていた。

白く、しかし暗い闇の世界で、無機質な光と音が、早瀬の耳から離れない。

早鐘を打ち鳴らす鼓動の音も、もはや聞こえない。

突如ゆるやかに変わった時間の中で、少女の微笑みだけが、淡く輝いていた。その姿と重なるように、もう一人の少女が——千里が、頭から落ちていく。

「ちーちゃんっ!!」

早瀬が走った。

京那の警告など、頭の中から消えていた。必死に手を伸ばす。

間に合う——そのはずの軌跡が、突如乱れた。

足下に突き刺さった、二本目の鉄扇。

前のめりに倒れる視界の隅に、唇の端を吊り上げた京那の姿が、流れた。

千里は、頭から床へと落ちていく。

「千里ちゃああん!!」

悲痛な声が、呼び込んだのかもしれない。

ジムに吹き込んだ、二陣の烈風を。

「根っつ性おおーっ!!」

けたたましい雄叫びがスライディングで滑り込み、床まではまさに間一髪、千里を下から受け止めた。

「間に合ったっすよ!」

失神した千里を抱えた元気そうな少女が、気合いの入った笑顔で、床からびしっと親指を立てた。

シグナルを送った先は、リングに立ったフード姿の零。

そのすぐ背後からトップロープを越えた、ひょうかん剽悍な女性だった。

「参るっ!!」

鋭い声に振り向く間も与えず、長いポニーテール——彼女に関しては長いちよんまげと称するべきか——の女性は、トップロープを越えた跳躍を、ステップ一つで零への攻撃に転化した。

「行けえ、雷神蹴っ!」

見守る少女の喚声とともに、長衣の後頭部に唸りを上げて叩き込まれた、迅雷の一閃。零のフードが大きく揺れた。

「なに!？」

驚愕の叫びは、着地直後に跳んで間合いを離れた、攻撃者の方から発せられた。

必殺を確信した延髄への蹴撃。それを見事に紙一重でガードした敵の右腕と、それを可能にした敵の技量。

そして何より、フードがめくられて露あぶらわになった、無感動な視線をこちらに向けた相手の顔に。

「寿、零……だどっ!？」

「ようやく主役のご登場、と。遅かったわね、柳生さん」

京那が放った擲<sup>や</sup>楡<sup>ゆ</sup>の声にも、柳生美冬は視線を動かさなかった。

かつてリングで何度も肌を合わせたあの、寿零が相手と知った今、迂闊<sup>うかつ</sup>な行動は命取りになる。

そう悟った柳生の代わりを買って出たのは、彼女の後輩で千里を助けた殊勲の人物、真田美幸だった。

「なにが、遅かったわねっすか、この犯罪者どもがっ!」

握り締めた拳にも、熱い大声にも、恐れの色は見えない。

この団体でデビューしてまだ一年半と経たない真田は、寿零というレスラーの名前すら良く知らないのだ。

もっとも、知っていたとからといって、態度を変えるような性格でもなかったが。

「さつき、後輩が柳生さんにかけてきた電話! あれでお前らの悪事とはつくに白日のもどっすよ! もう警察も呼んだから、覚悟することっすね!」

「……警察、ねえ」

京那は、本日三代目にあたる鉄扇を肩に乗せ、薄く笑った。

「そんなのどうにでもなるわ……と言いたいところだけど、今ここに踏み込まれては、少々

対応が面倒よね。下っ端連中は融通が利かないもの」

わざとらしい大仰な溜め息から、これもオーバーアクションでジムを見渡す。倒れた練習生たち。

リング上の零と、柳生。

歯を剥いてこちらを睨む真田。

彼女から託された千里に必死で呼びかける早瀬。

その膝に抱かれた千里に目を止めたところで、京那は扇子をぱちりと鳴らした。

「いいわ、零。今日はここまでよ」

能面のような零の顔が、京那を向いた。

「メインディッシュは惜しいけど、ここで慌てることはないわね。楽しみはとっておきましよう。——帰るわよ」

零は、微かに頷くと、フードを被りなおし、柳生に背を向けてリングを降りようとする。柳生の足が半歩前に滑るが、それ以上は動けなかった。

「柳生さん」

その柳生に向けて、京那から声がかかった。慇懃無礼の見本となれそうな口調だ。いんぎん

「本日はこれにて失礼しますが、また折を見て伺います。それと、ジムやこちらの皆さんには十分な賠償をさせてもらいますので、どうかご安心くださいな」

「安心っ!? なにをまた、ふざけたことを言って——」

「承知した」

怒り心頭の真田を、柳生の一言が押さえた。

「聞きたいことも言いたいことも多いが、どのみち答えてはくれまいな。だが、承知する代わりに、二つだけ教えてもらいたい」

「何かしら?」

小首を傾げた京那の傍らに、リングを降りた零が歩み寄る。

二人を視界に収めて、柳生は一つ目の質問を口に乗せた。

「昨今、そこかしこで伝え聞くレスラー鬨討ち騒動。あれもおぬしらの仕業か?」

「ええ」

当然でしょうと言いたげな京那の返答に、真田があんぐりと口を開けた。柳生は微かに眉をひそめたのみで、残りの質問を口にする。

「もう一つ。——おぬしは、何者だ?」

「ああ、そういえば。これは申し遅れました。わたくし、寿グループ武道関連特別顧問、寿京那と申します」

京那は、遠き日の華族もかくやと思わせる物腰で、優雅に一礼をしてみせたのだった。



「すまぬな」

「えっ？」

町の小さな診療所。

他に誰もいない薄暗い待合室で、硬いソファに腰を下ろした早瀬は、傍らの壁に立つ柳生を見上げた。

「あの。もっと早く戻ってきていれば、という話なら、もう……」

「そちらではない。うちの練習生で救急車を占拠してしまったことが、だよ」

「ああ……」

早瀬はやんわりと、少し気恥ずかしそうに微笑んだ。

京那と零が去った後、ジムは警察と負傷者への対応に追われた。

そんな中、千里は無事に意識を取り戻して早瀬らを安堵させたが、ここで「病院へ」と言い張る早瀬と、「大丈夫」と言い張る千里の衝突が、にわかに勃発。

双方譲らずで、間に入った真田をオロオロさせた挙句、人数的に全員が救急車に乗れないことも判明したため、柳生の提案で『念のため近所の医者に診てもらおうこと』で落ち着

いたのだった。

「でも、ごめんね。柳生さんにまでこっちについてきてもらって。本当は、みんなの傍にいてあげたかったんじゃないの？」

「ジムの人間は他にもいるし、なにより真田が付き添っている。あやつはあれで、面倒見のいい奴だよ」

「……そうだね」

その真田がいなければ、千里は大怪我を負っていた可能性が高い。あとでちゃんとお礼を言わなきゃね、と早瀬は心の中で頭を下げた。

「まあ、桜井千里といったか。あの者も、あれだけ元気であれば心配は要るまいな。心配なのはむしろ、あなたの方だ」

「私？ 私は……元気だよ？」

「団体の仲間の仇を、取れなくてもかな？」

今日の夕食メニューでも尋ねるような口調での問いに、早瀬は息を引いた。

「あなたの団体を襲った凶事のことには、噂で聞いている。一連の闇討ち騒動、その中でもひととき大きな話であったのでね」

柳生は、壁から身を離すと、早瀬の前を横切った。

「そんな中、あなたが私に会いに来ると聞いた時は、正直首を傾げたものだよ。よもや、寿零を倒せる人間を捜してのこととは、思わなかった。——勘違いなら、そう言ってほしい」

早瀬の沈黙は、否定にも肯定にも取れた。

その隣に柳生は腰を下ろした。

「光栄な人選だが——私でも、今のあやつには勝てまい」

吐胸とむねをつかれた表情で、早瀬が柳生を見た。

柳生の目は斜め上、微かな風を吹かせている業務用エアコンに、淡い焦点を合わせていた。

「今日は刹那の手合わせであつたが、それでもはつきりとわかつた。あやつの力量は、かつてリングで戦つた時のそれを、遥かに凌駕りょうがしているとな。まるで別人……いや、あれは本当に、寿零なのか？」

「柳生さん……？」

「私は、よく覚えているのだよ。零のことをな……」

柳生の脳裏に、カクテルライトの下で躍動する零の姿が甦つた。

無口で無表情、それは今日出会つた零とも変わらない。

しかしそれだけに、瞳の輝きや、時折近しい人間に見せる穏やかな笑顔は、一時期に比

べて低迷する女子プロレス界の未来を背負うとまで言われた闘いぶり以上に、柳生の記憶に焼きついていた。

「柳生さん……」

「いや。つまらぬことを言ってしまったな」

柳生は、いつの間にか閉じてしまっていた瞼を開いた。自分を見つめる早瀬に、その目を合わせる。

「あれが誰であれ、あやつらの所業は放っておけん。私も微力ながら協力させてもらいたい。——どうすれば止められるかの検討はつかぬがな」

「……勝つことが、できれば」

「勝つ？ 寿零に、か？」

「あの人、寿京那は、私に言ったの。強いストライカーを連れてこいって。零に勝てれば、全てを終わりにできるって」

「ふむ」

柳生は、曲げた指を自分の顎先に添えた。

復讐を餌に高いレベルの相手を集めさせ、零を鍛えたいということなのか。京那の思惑や目的に見えない点は多かったが、ともあれ、他に当てがないことも確かではあった。

「敵の言を信じることはなるが、今はそれしかあるまいか。しかし、零に勝てる相手と

「いうだけでも、検討がつかんところではあるな。早瀬さんには当てがあるのか？」

「ううん。柳生さん以上の人は、もう一人も」

「となれば、イバラの道だぞ。外国人選手を探るか、他の武術団体を当たるか、だが」

「私が、勝ちます」

二人を振り向かせた三つめの声は、何の気負いも感じさせないほどに静かで、落ち着き、そして澄み渡っていた。

診察室のドアを開けて、千里が立っていた。

小さな湿布を貼られた両腕と頬、そして心なしか赤く腫<sup>は</sup>らした目の他は、いつもと変わらない姿を見せて。

「おぬし……」

「千里ちゃん！ 怪我の方は——!？」

「私が、あの人に勝ってみせます」

腰を上げた二人の声も聞こえぬげに、千里は繰り返した。

少しでも言葉が変わったせいなのか、声にも少しだけ変化があった。

わずかに溢れた、熱さと、波立ち——それは、決意だったのかもしれない。

「今よりも、もっと強く……本当の強さを、手に入れて」

ドアを通り抜けた千里の拳は、ただ固く握り締められていた。



## 第三章 迷宮に迷いし蝶

## 1

静かな昼下がりは、突如として、その終わりを告げた。

「真田六文銭の一撃！ 受けてみるおっ!!」

辺りを揺るがす、大音声。おんじょう

ジムの窓が震度四クラスに揺らぎ、窓の外で寝そべっていた野良猫は、毛を逆立てて跳ね起きた。

続いて、声と張り合うかのようなけたたましい衝撃音が鳴り響くに至り、あわれな猫は、絶好の昼寝スポットを追い出される憂き目を見たのだった。

「ふっふっふっ。遠からん者は音にも聞け、近くば寄って目にも見よ……」

猫の受難は露知らず。自らの放った一撃に大きく鎖を軋ませるサンドバッグを前にして、仁王立ちの少女——真田美幸が、時代考証的には少し問題のありそうな口上を、至極満足げに言い切った。

両の腕を胸前で開いて、握った拳をわななかせる。

「これがこの真田美幸の最終決着技、その名も『斬馬迅』っ！溜め込んだ気合と根性を雄叫びとともに解き放つての上段蹴りは、馬をも断ち斬る大太刀が如し！この技さえあれば鬼に金棒、真田に十勇士！喰らって倒れない敵がいるものか！」

右拳を天に突き上げて叫んだ真田が、その勢いのまま豪快に後ろを振り向いた。

「さあ！この技をやってみるっスよ、千里さん！」

「嫌です」

ズルツ、という音が聞こえてきそうなほど見事に、真田が床に滑った。

いちいち大げさな人だ、と千里が思ったかどうか。

「ななななぜ!? どうしてっスか!? 自分のとつておきっスよ！最終決着技っスよ！

千里さんだって、ぜひ見たいって言ったじゃないですか!？」

「確かに見たいと言いましたが、やるとは言ってません」

立ち直るやいなや口から泡を飛ばす真田に、桜井千里は相変わらずの無表情の中で、少しばかり迷惑そうに眉を寄せた。

「見たところ、予備動作や溜めの隙が大きすぎます。パフォーマンスありの相手ならともかく、零零相手では使えそうにありませんよ」

千里は技を教えてもらう立場だし、真田は仮にも命の恩人なのだが、数ヶ月とはいえ真



田が年下でもある。

そのせいか、千里はかろうじて敬語ながらも口撃に容赦が無く、真田は真田で、怒ると言うよりは耳が痛いと縮こまった風だった。

「それに、何より……」

「な、何より？ なんっスか？」

恐る恐る訊いた真田に、ちらりと目をやってから、千里は反対を向いた。さすがに少し言いにくそうに、それでもはつきりと、言う。

「技を出しながら叫んだりなんて、できますか。あんな、恥ずかしい」

「があーっーん！」

自らの口でシヨックを表現して、真田はがつくりと床に手をついた。

どうやら、彼女にとって一番大切な点かつ凶星を直撃したようだ。

うううっ、という小声まで加えた姿は、普通なら演技か冗談でしかありえないが、彼女の場合は本気の可能性が高かった。

「ただ——」

見るに見かねたか、千里が言葉を繋つなげた。

「ただ、威力はこの上無く凄まじい技ですね。ぜひ参考にさせてもらいます」

真田が、横向きに千里を見上げた。

ここで一発ニコリと微笑めば、単純な真田は気を取り直しただろう。

しかし、千里は決して笑わない。

結果、真田は一層重たい空気を纏って床に丸まってしまい、気休めは要らないっス、などとブツブツやり始めた。

それを見た千里は、額に指を当てて、首を二、三度、横に振る。

面倒なという苛立ちと、やってしまったという後悔が、四対六にブレンドされた挙動だった。

「……あはははは。これは、振り向かない方がいいお話だよー、きつと」

規則正しくダンベルを振りながら、背後で展開された小芝居風味な騒動を無視することに決めたのは、早瀬葵だった。

柳生と真田のところではらくの間お世話になることに決めた、早瀬と千里。

目下のテーマは、打倒・寿零を目指す千里の鍛錬であり、これには柳生と真田も協力を申し出てくれた。

しかし、全員つきつきりでコーチというのはあまりに効率が悪いし、それぞれ自分の練習もある。

自然、千里の面倒見は毎日三人で回り持ちというルールが設けられ、すでに何度かのローテーションをこなしているのだった。

「……むむ？ 真田の奴、なにを珍妙な休憩の取り方をしているのだ？」  
事務室に続くドアが開き、柳生美冬が姿を見せた。

「床をゴロゴロと、ストレッチとも思えぬが。ううむ……これは……」  
と生真面目に考え込んだ結果、

「真田！ コーチ役が生徒を放置して遊んでいるとは何事だ。サボってないで真面目にやらぬかっ」

この結論には、さすがに早瀬も同情した。

歩いてきた柳生にフォローの一つでも入れておこうかと思ったところ、その柳生から差し出されたものがある。

「週刊……レッスル？」

女子プロレスを黎明期から扱い続けてきた、老舗しにせの雑誌だ。

早瀬が受け取った一冊は、発行年こそ今年だったが、日付は随分と前のものだった。

「零の記事が載っている」

はっとした早瀬が、ぱらぱらとページをめくる。厚い雑誌ではないので、目次を見るよりも直接探す方が早いだろう。

「それと——これは、懇意にしている忍者に調べてもらった話だが」

——忍者？

記事を探す手を一旦止めて、早瀬は柳生を見た。

真顔だった。

「失敬。くのいちと言うべきだったな」

いやそういうことでは、と早瀬は思ったが、何も言わない。

侍の友人に女忍者がいても別に不思議ではない、そう思うことにしたらしい。

「彼女の調査によれば、零は母方が寿財閥の本家筋。一方の京那だが、これは分家の人間ということだ」

これは、早瀬も知らない話だった。

脳裏に、このジムで会った時の零と京那の顔が浮かぶ。

「本家と分家……にしては、京那の方が偉そうだよね」

「うむ。最近では、傘下企業の経営難や、力を入れていく武道・スポーツ界、なにより女子プロレスにおける実績不足で、本家の動きが問題になっていたらしい。そこで、分家代表の顧問役として、あの女が抜擢はってきされたんだそうだ」

「実績不足、ねえ……」

ページめくりを再開していた早瀬の手が、目的の記事を見つけて止まった。

見開きカラーで大きく載った、零の写真。

アジアタッグ王座を奪いシングルとの二冠王者となった直後のようで、リングに飛び交う紙テープの中、ベルトを掲げて穏やかな微笑を見せた零と、その傍らで愛くるしい笑顔を増かべる大きな目が印象的なタッグパートナー、そして零と似た面立ちに誇らしげな笑みに乗せたセコンドらしき女性が、一つの写真に納まっていた。

大きく踊る見出しには、『日本人久々の世界王座挑戦か!?』とのフレーズも見える。

「一時期のプロレス界に比べれば、な」  
息をついたのは柳生だった。

「新日本女子を始め、各団体がしのぎを削った黄金時代。世界王座すら日本人が独占しようかという時代を知る者たちには、もはやアジアのベルトなど物足りなく感じるのである。わからぬ話ではないが」

「……うん」

次のページでは、試合の写真がふんだんに使われていた。半数ほどに出てくる零の顔は、一見無表情ながら、その端々に様々な感情があらわれている。

先日の柳生が語ったように、早瀬が知る先ごろの零とは、まるで別人だった。

「あやつ——零も、今の状況は、望んではおらぬものなのかもしれんな」

「そう……だね」

二人は揃って、沈黙に身を任せた。

早瀬は、雑誌に目を落として。

柳生は、早瀬の横顔を目で捉えて。

気のせいか、柳生の目つきはどこか陰しくも見えた。

サンドバッグ脇では、何とか復活したらしい真田が、先輩二人の様子など知らぬまま、千里に踵落としを披露していた。

今度は大げさな叫びも溜めも無しで、鋭い蹴り足が空気を縦に切り裂く。

「と、これが踵落とし。モーションがデカいのが難点つすが、前蹴りや上段と組み合わせ一発狙いとか、使い方はあると思うっす。ま、見た目以上に習得は難しいんで、まずは柔軟から……」

先ほどよりもさらに鋭く、空気が縦に切り裂かれた。

「なるほど。振り下ろした後のバランスが難しいですね」

真田の目には自分以上と見えた踵落としを初見で放っておいて、千里は全く納得がいかないのか、眉根を寄せた。

「重心の位置が、はつきりしません。あの、もう一度見せてもらえますか？」

「い、いいっすよ。お安い御用っす、アハハハハ」

真田が浮かべた承諾の笑みは、明らかにぎこちない。

それでも律儀に構えに入った後輩の姿を眺めて、柳生は苦笑した。

「桜井千里——まったく大した吸収力だ。真田の奴が、他人をうらやむような性格でなくて良かったよ」

「うん。……実はね。私は、ちよつとうらやましく思っちゃってるんだ。千里ちゃんのこと」

「私もだ」

恥ずかしそうに告白した早瀬に、柳生もさりと同意した。

「昨日は私の体捌たいさばきを教えたが、一日で練習生や真田の域を超えてしまった。これなら零に勝てる日も遠くないかも、と思っちゃったよ。天才——と言うのは簡単だが、あれは少し違うな」

「基礎がすつごくしつかりしてるから。どんな動きも、身体の方が吸収できちゃうんだよね」

「そして、執着心だな」

「執着心？」

意外な単語だったのだろう。早瀬のオウム返しには、疑問と不可解が詰まっていた。柳

生もそれを感じたゆえか、表現に訂正を入れる。

「執念、こだわり——いや、想いとも言った方が良いかな。『強さ』というものに対する、純粹なまでの想い。基礎の積み上げも、技を学ぶ際の集中力も、それが全てを支えているのだろう」

「強さへの、純粹な想い……」

早瀬は、蒼い月に照らされた千里の姿を思い出した。

強くなりたい、と言ったあの時の、千里の瞳を。

「そうだね……。千里ちゃんは、本当にそうだよ」

「その純粹さを、このような争いごとに巻き込まざるをえないのは心苦しい——などと私に言えた義理ではないが」

と、柳生は苦笑しながら、

「彼女は、我らのようなプロの格闘家ではないのだ。そんな彼女の想いを歪ませてしまうことにならなければと、それだけは願っているよ。早瀬さんも、そうは思わぬか？」

「そうだね……。千里ちゃんは、本当に……」

最後の「そうだよ」だけを、なぜか早瀬は繰り返さなかった。



「よし。買い物、買い物！ まっかせといてね、美幸ちゃん！ これでもかっつてくらい安く抑えてみせるからっ！」

「そ、それは頼もしいっす、早瀬さん。けど、予算内であれば、そこまでケチらなくても大丈夫なんで……」

「ケチじゃないの。節約なの！ 安物掴んだりしちやダメだけど、同じ物なら安い方がいいに決まってるじゃない。そうでしょ？」

「ま、まあ。確かに」

「買うもの一杯あるし、これは腕が鳴るよお。無駄遣いはこのお姉ちゃんが許さないんだからっ！」

食材だのジムの備品だのの買い出しに、ここまで燃える人間がいようとは。

優しく柔和で物静かで、どちらかと言えば気弱な先輩。そう思っていた早瀬に対する大幅なイメージ修正を余儀なくされた真田は、やる気一杯で腕まで振ってる早瀬の三步後ろを歩きながら、こっそり溜め息をついた。

「これはもう、考えすぎっすよ。柳生先輩……」

——早瀬さんの買い出しに、荷物持ちとしてついていけ。

柳生から一人呼び出され、告げられた指令。その前半部分は、真田にとって何ら問題は無かった。

しかし、

——そして、彼女の挙動に怪しい点がないか見張れ。

という後半部分は、真田にとつて到底二つ返事で受けられるものではなかった。

「……具体的に何かあるというわけではない。そう先走るな、真田」

と柳生が言ったのは、早瀬は実はスパイなのか偽者なのか黒幕なのかと、真田が想像力豊かな質問を一通り披露しきった後のことだった。

「仲間が病院送りにされた仇討ちと、これ以上の惨劇を防ぎたいと願う気持ち。これらは早瀬さんも、我々と何ら変わらぬ。いや、我々よりも強いだろう」

「そりゃあ当たり前っス。でなきや、こんな物騒な話に千里さんや自分らを巻き込もうとする人じゃないですよ、早瀬さんは」

これは柳生も認めた。しかしその上で、どうしても違和感が拭えないのだと言う。

「仲間の仇である京那と零を、彼女はもつと憎んで良いはずなのだよ」

京那の手駒という感がある零はまだしも、京那本人には同情の余地など無い。

なのに、早瀬は京那に対しても憎しみや恨みをさほど抱いてはいないようなのだ。

早瀬の優しすぎる性格の分は差し引くとしてもなお、柳生にとってそれは大きなしこりとなっていた。

「早瀬さんと京那、あるいは寿家との間には、他にも何か裏が——関係があると私は見た。あくまで私のカンにすぎんがな」

「関係って……実は二人が幼なじみだとか、生き別れた姉妹だとか、あるいは禁断の仲だったりするとか、そういうのっすか？」

「……いや。さすがにそこまでの関係では無いと思うぞ」

柳生は、後輩のどうにも飛躍がちな発想に呆れたのか、奇妙なほど神妙な顔で言った。

「——美幸ちゃん？ 話、聞いてる？」

真田は我に返った。

そして、慌てた。

出がけのやり取りを思い出してため、早瀬の話は全く耳に入っていなかったのだ。

「あ、いや、えっと、その……節約の話、でしたよね？」

「あー、聞いてくれてないんだ、ひどいなあ」

いつの間にか前ではなく傍らを歩いていた早瀬が、真田に向けて頬を膨らませた。精一

杯睨み付けてはいるが、それがかえって微笑ましく、しかも目は明らかに笑っている。

真田も、すんませんっ、と手を合わせてはみたものの、早瀬の演技につられたか、今一つ真剣味が無いものになってしまった。

「もうっ、けっこう恥ずかしかつたのに。私、美幸ちゃんにお礼を言ったんだよ？」

「お礼、っスか？」

「うん。千里ちゃんと仲良くしてくれてありがとう、って」

真田は一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「あのお。早瀬さん？」

「なに？ 美幸ちゃん」

「いや、自分、別に千里さんのことは嫌いでも怒ってもいないっスよ？ でも、今日のやり取りを見て、どの辺で仲良くしてるって思ったんでしようか？」

「あ、ごめんね。私、千里ちゃん目線だったかも」

真田はさらに混乱した。

「いやいや、それなら尚更っス！ 千里さんはずっと無愛想で、言うこともキツくって怖いぐらいでしたって！ 自分は教えるのも下手で、仲良くどころか軽蔑されてないかビクビクしてたんですから！」

「そうなんだ。でも、千里ちゃん、よく笑ってたじゃない」

駄目押しだった。

「いやいやいやいやっ！ 全然、一度も、笑ってませんって！ 今日はおろか、今まで一度だって、自分は千里さんが笑ったとこなんて見たことないっすよお！」

力説した真田が肺の酸素を出し切って言葉を途切れさせた時、小さいがリズムの良い響きが、その耳に届いた。

「そうだね。確かに私も、千里ちゃんの笑った顔は見たことないかなあ」  
くすくすと、早瀬は楽しそうに笑っていた。

「でもね、最近わかったの。あの子、よく笑う子なんだよ」  
そう言われたところで、頭上に疑問符を浮かべるしかない真田に、

「美幸ちゃんも、注意してればそのうちわかるんじゃないかな」  
と、早瀬は片目を瞑こむってみせた。

「千里ちゃんね、よく笑ってるんだよ？ 苦手なのか嫌いなのか、顔にはぜーんぜん出してくれないけどね」

軽く肩をすくめながらの、こぼれるような笑み。

「だから、こうなったら意地でも見てやらなくちゃ、なんて思ってるの。あの千里ちゃんが、笑顔を浮かべてくれたところをね！」

真田は、そんなもんすかねえ、とうわの空で返事をした。

しながら、眩しく感じられる早瀬の顔をどうしても直視できずに目を逸らして、(裏だの何だのなんて、やっぱり考えすぎっスよ。柳生先輩……)と、心の中で呟いていた。

止める間も無く出てしまった、大きなくしゃみ。

柳生は、更衣室に自分しかいないことは知りつつも、口を押さえて咳払いまでし、さらに三つ数えてから、ジムへの扉をくぐった。

ドアを閉めようとしたところで、サンドバッグを打つ衝撃音が一つ、耳に届いた。

「なんだ。まだ終わっていなかったのか？」

その声に荒い息をつきながら振り向いたのは、千里の他にいるはずもなかった。

「ええ。まだ日も高いですし、もう少しと思っただけ」

「練習は夜にもある。オーバーワークになる前に、一度休んでおいた方がいいぞ。それとも、なにか上手くないところでもあるのか？」

柳生の問いかけに、どこか思い悩んだ表情で千里が頷いた。

「真田さんに見せてもらった、斬馬迅です」

「斬馬迅？ 真田の奴、あれも教えたのか」

柳生の驚きは、昼過ぎのやり取りを見ていなかったからだ。

もつとも、見ていたら見ていたで、別の驚きに変わっただけだろう。あの時、千里は自ら習得を拒んだはずなのだから。

「隙が大きすぎる技ですが、あの威力は魅力的です」

千里は、手の甲で汗を拭った。

「パワーの乗せ方だけでも取り入れられればと思ったのですが。そう上手くはいきませんね」

「まあ、真田のアレは確かに凄いが、あくまで他の要素を度外視した結果だからな」

本人は気合と根性が生み出す破壊力と言いつ張るが、その正否はともかく隙や無駄が多すぎる点は、千里も二、三時間前に指摘したことだ。

柳生もそこは同意見とみえる。

「とはいえ、技の底上げを図りたい気持ちもわかるな。どれ、私で良ければ見てやろうか？」

「上段蹴り——私のハイキックをですか？」

「私も技の重さ軽さに悩んだ時期はある。斬馬迅は打てぬが、アドバイスくらいならしてやれるかもしれないぞ」

「ぜひ、お願いします」

「うむ。但し、それが終わったら休憩を取ることだ。良いな？」

はい、と短く返して、千里はサンドバッグに構えを取った。

ただの練習——とはいえ、張り詰めた緊張が波紋のように広がっていく。

「いつでも良いぞ」

千里が微かに頷いて——きっかり一秒。

真田のような雄叫びはもちろん、他の劇的な効果や演出も無く、千里の軸足が生み出す螺旋らせんが蹴り足へと伝わった。

柳生の鋭い目が、大きく見開かれた。

商店街からジムへと戻る道には、長い下り坂が横たわっている。

今しがた下り切ったばかりの坂を数メートル上りなおしたところで、早瀬は一旦立ち止まり、後方で自分を見送っている真田に声を掛けた。

「荷物持たせてごめんね、美幸ちゃん！ 急いで買ってくるからね！」

「別に急がなくていいっすよ！ 自分は先に帰ってますから、気をつけて！」

「ありがと！ 美幸ちゃんも、気をつけて戻ってね！」

手を振る早瀬に、真田はレジ袋を持った左手を上げて応えた。右手は中身の詰まった大



きな紙袋を抱えているため、おいそれとは動かせない。

備品の買い忘れに気付いたという早瀬が、早足で坂を上っていくのをしばらく見届けてから、真田は長い坂に背を向けた。

「あっ」

早瀬を見張れ、という柳生の指令を、ようやく思い出したらしい。やばっ、と左手で額を押さえつつ、真田は奥歯を噛み締めた。

善後策に悩んでか、しばしそのまま唸っていたが、

「……ま、いいや。どう考えても、柳生先輩の思い過ぎしっす！」

という独り言を残すと、一度も後ろを振り向くことなくジムへの道を歩き始めた。

もしも、ちようどそのタイミングで振り返っていれば、真田も商店街まで戻る気になっただかもしれない。

坂の途中で立ち止まり、思い詰めた表情でこちらを見つめる、早瀬の姿を目にしたならば。

「……ごめんね。美幸ちゃん」

謝罪の言葉は、荷物を持たせたことに対してではないだろう。

早瀬は、何かを振り切るように、一気に坂の上まで駆け上がった。

商店街に戻ってきてても、そのまま脇目も振らずに走り抜けて行く。そのまま長い通りを抜ければ、ちよつとしたオフィス街になっている駅周辺へと辿り着くはずだ。

それは、買い物の中で真田が教えてくれたことだった。

「駅に……あと、十五分……」

商店街を抜けたところで、息が続かなくなった。

一度足を止めて呼吸を整えながら、早瀬はポケットから一枚の紙を取り出した。

最初から持っていたものではない。小さなスーパードの買い物中、すれ違いざまにぶつかった吊り目の女性が、いつの間にかポケットにねじ込んでいったものだ。

駅の名前と時間、そして短い文が書かれただけのプリント用紙に命ぜられるまま、早瀬は駅を目指しているのだった。

「走らなくても……間に合うかな」

大通りを右に行つたところに、駅ビルが見えている。ゆっくり歩いたつて、五分もかからないだろう。

早瀬は、吹き出す汗を拭おうとハンカチを取り出して——チクリと刺す、小さな痛みを首筋に感じた。

「えっ、やだ！ 虫!？」

早瀬は身震いと同時に、右手を急いで首の後ろに回した。

——およそ、一時間後。

駅の方角から歩いてきた一人の女性が、風が足元に運んできた白い紙に気付き、なんとはなしに拾い上げた。

その紙には、駅の名前と時間、そして『貴女と寿京那の關係を知っている』という一文だけが無機質に印字されていたが、拾った女性には意味がわかるはずもなく、ただ首を傾げることしかできなかつた。

### 3

夕闇の訪れはまだ遠いはずが、にわかには広がりだした雨雲のせい、人々には照明の助けが必要になってきていた。

それは、比較的日当たりの良いジムの休憩室も例外ではない。

度合いを増していく薄暗さにそろそろ限界を感じてきたのか、柳生は椅子から立ち上がると、壁に歩み寄った。他の二人を軽く見やり、異論は無さそうだと判断してから、スイ

ツチを押す。

「やっぱり……早瀬さん遅すぎるっス！」

電気が点くのを待っていたかのように声を上げたのは、真田だった。

「自分と別れてから二時間、戻ってこないし連絡も来ない。携帯にかけても繋がらないっで……絶対おかしいっス！ 何かあったに違いないっスよ！」

「だから、お前が早瀬さんを監視していればよかったのだ」

……などは千里の前で言えるはずもなく、柳生は横目で真田をひと睨みしただけで、無言のまま席へと戻った。

さすがに察したのか肩身を狭くした真田は、柳生から見て左手のソファにもたれている。椅子に座りなおした柳生は、真田とは反対側、ほぼ正三角形を描く位置に立った千里が身体を動かしたことに、目の端で気付いた。

顔を向けると、千里はポケットから携帯を取り出していた。音はしないが、どうやらバイブ機能で振動しているようだ。

「早瀬さんか!？」

「メールですね」

ひとまずそう答えてから、千里は携帯の画面を見た。

「違う人からです」

そうか、と思わず浮かせた腰を下ろす柳生。

身を乗り出した真田も、嘆息とともにソファに背を戻した。そのまま天を振り仰ぐと、身悶えまでしながら呻き出す。

「うーっ……心配っス！ きつと、あの鉄扇なんか持つてる時代錯誤女！ あいつが早瀬さんに何かしやがったに違いないっスよ！」

「あら、とんだ誤解ね」

三対の視線が、即座に声の出どころを向きかけ——倍の速度で戻って、別の場所に焦点を合わせた。

真田の顔のすぐ横、ソファを大きく抉って刺さった、鉄扇に。

「来ていきなり、よくわからない濡れ衣を着せられるとは思わなかったわ。随分とご挨拶な人たちだこと」

今度こそ、視線が声の主に集まった。

二本めの鉄扇を手に、休憩室の戸口にもたれかかる、緑なす黒髪の主に。

「こ、こ、こ、こと、け！」

「寿、京那……！」

ニワトリのような声を上げる真田に代わって、柳生が唸った。既に立ち上がって構えを取り、油断無く周囲の気配を探っている。

「一人のようだが……何用だ。何の断りも無くここまで入ってきて物まで投げるとは、そちらこそ随分なご挨拶ではないか」

「ああ、それもそうね、ごめんなさい。海外が長かったものだから」

どこの国にもそんな風習はあるまい、と思つたが、柳生は話を先に進めることを選んだ。「さつき濡れ衣と言つたが、本当か？ おぬしたちが、早瀬さんに何かしたわけではないのだな？」

「早瀬つて、早瀬葵さんよね。知らないわ。彼女に何かあつたのかしら？」

「買い物に出たきり、戻つてこない。連絡も無しだ」

「あら、それは大変なこと。でも、買い物ぐらいで騒ぐなんて、子供みたい。迷子なら警察にでも——」

京那はそこまで言つてから、薄笑いを突如中断した。閉じたままの扇子を艶やかな唇に当て、何か考えを巡らすと、

「お待ちなさい。一度、調べさせるわ」

携帯を取り出し、片手で開いた扇子で口元を隠して——あまり意味は無さそうだ——どこかへ連絡を取り始めた。

私よ、から始まった居丈高いたけだかな口調からすると、部下宛だろうか。

早瀬の行方不明と、「もしかしたら」という思わせぶりの言葉、そして足取りを調べな

さいとの指示だけ伝えて、一方的に電話を切る。

「へええ。やっぱ、心当たりがあるってことっスね？」

「後で話すわ。先に本題と行きましょう」

真田の当てこすりを平然と返して、京那は扇子をぱちんと閉じた。

「回りくどいのは嫌いだから、単刀直入に言うわね。今日はあなたをスカウトに来たのよ、桜井千里さん」

千里が、顔を上げた。

柳生と真田の視線も、京那から彼女へと移動する。

先ほど届いたというメールを読んでいたのか、千里の手には携帯が握られたままだった。

「あの子——零に完敗したとはいえ、あなたの先日の戦いぶりにはなかなかだったわ。それで、少し調べさせてもらったの」

京那は千里の方を向いて言ったが、千里のさほど驚いたようにも戸惑ったようにも見えない表情は、彼女には期待外れだったのかもしれない。

そのせいかわ、続く言葉は、右前の千里本人ではなく、左前の窓に向けて放たれた。

「正直、驚いたわ。目立った格闘技経験や実績も無いのに、あれだけの動きができるなんてね。何より、零を相手に最後まで勝負を捨てず、負けた後も腐ることなく高みを目指している、その姿勢が気に入ったのよ」

言葉を区切った京那の手元で鉄扇が弾かれ、音を立てた。演出というよりもむしろ、彼女の癖だろう。

「けれど、このままでは零との差は広がるばかりよ。ロクな設備もコーチもない、こんなさびれたジムでいくら修行しても、ね」

もともと睨むようだった柳生と真田の表情が、一段と険しくなった。特に真田は今にも飛び出して噛み付かんばかりだったが、京那はどこ吹く風で窓の外を眺めている。

じきに、一雨来そうだった。

「私たちと一緒に来なさい、千里さん。——あなたを、もっと強くしてあげる」

「馬鹿っスか!!」

一刀両断したのは、真田だった。

「千里さんが、んなことオツケーするわけないでしょうが！ あんたらが何をやってきたか、胸に手を当てて考えてみろっス！」

「あなたには訊いていないわ」

絵に描いたような冷笑が、真田に向けられた。

「零と一緒に行動しろなんて言うつもりもない。あの子を倒すつもりでもかまわないの。いえ、むしろそのつもりなら、零と同じ強さを手に入れる方が近道ではなくて？」

「だ、だからって、そんな裏切りがっ!!」



「……黙っている、真田」

「でも、柳生さん!？」

「黙れ」

真田を押し黙らせた鋭い眼光は、真田ではなく京那を見据えていた。

怒りを堪<sup>こら</sup>えているようにも見える表情の中で、しかし柳生は内心、ありえない話ではない、とも思っていた。

千里について、である。

強さに対する、純粹なまでの執着心——早瀬にも話した千里の特質を考えれば、京那の提案は極めて魅力的なはずだった。

加えて、自分たちや早瀬と違い、千里は京那に直接的な恨みを持つわけでもない。

好んで敵の軍門に下る気は無いにしても、獅子身中の虫となることへの抵抗は、さほど大きくないはずなのだ。

果たして千里は、どういう答えを選び出すのか。

柳生は、神妙な面持ちで千里の方を向いた。

真田もそれを追い、最後に京那が加わった。

奇妙なことに、事ここに至るまで、誰も話の中心人物である千里を見ていなかったのだ。ようやく注目が集まった中で、当の千里が取っていた行動は、三人の誰の想像とも異なる

るものだった。

千里は、まるで今の話など聞いていなかったかのように、携帯電話のキーを叩き、メールを打っていたのである。

「ち、千里さん……？」

声を上げた真田だけでなく、程度の差こそあれ、全員があっけに取られていた。京那など、明らかに頬が引きつっている。

不穏なまでの沈黙が場を支配し、それは千里がメールを書いている間、続いた。

「当て馬か、かませ犬ですか？」

「えっ？」

送信のボタンを押すと同時に千里が放った一言に、京那は即座に対応できなかった。

かろうじて反射的に発せられた京那の問い返しは無視して、

「お話は分かりました」

千里は、携帯を閉じた。

プラスチックが奏でる音<sup>かな</sup>を挟んで、言葉を続ける。

「全く、興味はありません」

真田の顔は明るい色に染まり、柳生のそれは安堵と驚きに染められた。

残った京那は、眉の片方をわずかに吊り上げて、千里に念を押す。

「決断が早すぎるのではなくて？ 感情だけで物事を判断しないほうがいいわよ？」

「私にとって良い話だとは、全く思えません」

千里は、わざわざ言い直した。京那の顔が、懽然ぶぜんの一色に染まっていく。

その顔に真正面から瞳を合わせ、千里は最後に付け加えた。

「私は、寿零の——あなたたちの強さには、興味がありませんから」

京那の眉が、理解不能というシグナルで震えた。

「それは、どういう——」

意味かと問う言葉を呑み込んで、京那は目線を自分の腰へと移した。

軽い舌打ちとともに手を差し込み、携帯電話を取り出す。

パイプでの振動は千里の時と同じだったが、こちらはメールではなく電話だった。

「何よっ？」

不機嫌な声で、どこか遠くの哀れな部下を萎縮いしゆくさせてから、京那は報告に耳を傾けた。

## 4

パンッ。

乾いた音がどこかで聞こえた。

右の頬に、鈍い痛みが走る。それを合図に、泥の海に沈んでいた意識が、ゆっくりと浮かび上がって来た。

辺りは暗く、しかし<sup>よと</sup>激んだ海面の上には、光が見える。

動かない手をそちらに伸ばそうとした時、水と光が大きく揺れた。氷のような冷たさが急激に雪崩れ込んできた瞬間、

「半醒半睡？ そろそろ目を覚まさない！」

苛立つ女の怒声が決定打となって、早瀬ははつきりと覚醒した。

頭や顔の不快感に首を大きく振ると、水滴が飛び散ったことを感じた。どうやら、目を覚まさせるために、頭から少量の水を掛けられたらしい。

「こ、ここは？」

薄暗い部屋、ということだけは認識できたところで、左から髪を荒々しく引つ張られた。顔ごともっていかれそうになったが、今度は右から顎を掴まれて強引に引き戻される。

「いつぞやのリング以来ですわね。まさかあなたが泥棒猫とは」

「鶏鳴狗盗……。唾棄<sup>だき</sup>すべき存在ね」

歪んだ形で固定されてしまった顔を痛みにしかめつつ、早瀬は左右の手の主を、何とかさせる目で追った。

ロングとセミロング。髪型に大きな違いはあるものの、顔立ちは酷似した二人の女性が、

軽侮<sup>けいぶ</sup>の笑みを浮かべて自分を囲んでいる。

試合用のメイクこそしていなかったが、その顔と笑みとに、早瀬は見覚えがあった。

「あ、あなたたち……まさか、ウォン・シスターズ!？」

「姉のキャシー・ウォンと、妹のブルック・ウォン。アメリカは T W W A を主戦場とする、中国出身の現役ヒールレスラーよ」

「その二人なら、私も何ヶ月か前に対戦したことがある」

柳生が、京那の出した二つの名前から、記憶の中の情報を引っ張り出した。

「姉妹ともに中国拳法を主体とする選手で、特に姉の方は相当な達人だった。あの二人も、零の……おぬしの標的なのか?」

「その反対。彼女たちはね、協力者なの」

「協力者だと?」

「ええ。お金次第では、いろいろやってくれる子たちでね。お父上は中国系マフィアの幹部だし、何かと重宝しているわ」

「ち、中国マフィアあつ!？」

真田の素<sup>す</sup>つ頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な声に、京那は、別に珍しくないでしょ、と言いたげに頷いた。

「穏健派だから、この国で人を殺したりはしないわよ。とにかく、以前は零にグラップラー——組み技系の相手をあてがってたんだけど、その調査や手引きをしてくれていたの。早瀬さんの時を境に相手をストライカーに切り替えたわけだけど、役割は同じね」

「待て」

柳生が割り込んだ。

「グラップラーだのストライカーだの、私たちにはどうでもいいことだ。その協力者たちが、なぜおぬしの命令も無しに早瀬さんを拉致したのだ？ 彼女らは、今どこにいる？」

「どこにいるのかは、まだ調査中。拉致したのは——縄張り争いみたいなものじゃないの？」

「縄張り争い？ どういうことだ」

聞き返したのは柳生だったが、真田も訝いぶかしげな顔を作った。残る千里も、ポーカーフェイスの中で閉じていた目を開いて、京那へと向ける。

三人の視線を浴びて、京那は扇子で軽くあおいだ。その動きと、そよ風を受けた表情が、物分りの悪い人たちねえ、と主張している。

「そりゃあそうでしょ、言わば早瀬さんは商売敵だもの。いきなり独占市場に割り込んで来られては、誰だって良い顔はしないわね。まあ、早瀬さんとの契約をあの姉妹にも伝えておかなかった点だけは、私のミスといえば——」

「待て！」

今度も割り込んだのは柳生だが、先ほどとはトーンも鋭さも段違いだった。

「商売敵だの契約だの、何のことだ？ 早瀬さんとお前の間には、やはり特別な関係があるのか!？」

京那の表情が、三秒おきに変化した。

まずは、ぽかんと小口を開け、次に眉をひそめ、さらに目を閉じて沈黙考し、そして最後に——声を上げて笑い出した。

「ああ、そういうこと？ どうもおかしいと思ってたけど、道理で私一人が悪者にされているわけね！ あらあらっ……まったく早瀬さんも何も言わないなんて、とんだ偽善者ぶりじゃないのっ」

閉じた扇子で膝まで叩き、やや上品さには欠ける態度でひとしきり笑ってから、京那は自分を見つめる三つの顔を、芝居がかった動きで見回した。

柳生、真田、そして千里の順に。

「いいわ、私が話してあげる。早瀬さんが隠してることも全て、ね」  
京那は、自慢の長い黒髪をかきあげた。

「あのお、お二人とも……こういうの、日本では犯罪なんで……」

おそろおそろ口を開いた早瀬の頬が、派手な音を立てた。

既に何度も平手で叩かれ、左右ともに少し赤くなっている。

「ご安心なさい。拉致監禁はうちの国でも犯罪ですよ。気にしていません」

「順従謙黙。素直に、私たちの邪魔はしないと誓いなさい」

入れ替わりで話しかけてくるウオン姉妹に、早瀬は果敢に訴えかけた。

「だから、私はあなたたちの邪魔なんてしてません！ これからもしませんから！」

「では、寿家とも二度と関わりあいにはならないと約束できますわね？」

「そ、それは……」

「笑止千万。それでは話にならないわ」

鼻で笑う姉妹に、早瀬は唇を噛んだ。

先ほどから、この繰り返しだった。

元はバーか何かだと思われる、小さなビルの地下テナント。

小部屋で椅子に縛られた早瀬の傍に立つのは姉妹だけだが、彼女たちに付き従う女性た

ち——早瀬に紙を渡し、麻酔針を刺したのは彼女たちだ——の姿も隣室に確認できている。

説得にしろ強行突破にしろ、このままでは、早瀬の脱出は甚だ困難を極めると思われた。



そう、このまま、何か新しい要素が加わらない限りは。

「何ごと!？」

姉のキャシーが突然上げた鋭い声に、妹のブルックと早瀬も、ようやく隣室の騒ぎに気が付いた。

閉じられたドアの向こうを、甲高い中国語が飛び交っている。

慌ただしい物音がそこに混じった——と三人が思った瞬間、内開きのドアが衝突音を伴って勢いよく開き、あろうことか一人の女性が、仰向けに倒れながら飛んできた。

すわ敵か、と身構えた姉妹はしかし、のっそりとドアから入ってきた人影に、吊り目を精一杯丸くすることとなった。

「ぜ、零……さまっ!？」

寿零の登場は、ウオン姉妹にとっても予想外だったらしい。

顔を見合わせた二人を、今日は長衣でなくごく普通のトレーニングウェアに身を包んだ零が、少し迷惑そうに一瞥した。

「いきなり、襲われ、たら……困る、よ」

「も、申し訳ございません!」

キャシーが居ずまいを正して頭を下げ、ブルックも慌ててそれに倣う。京那以外でも、

寿家は雇い主であり、零もその一員ということなのだろう。

「それで、零さま。どうしてここを？ いえ、今日はこんなところは何を……」

「その、人……」

零の登場に姉妹と同じく驚いていた早瀬は、彼女から人差し指を向けられて、身を硬くした。何をされるかという不安が早瀬からにじみ出る中、

「しばらく……二人きりで話、させて……くれる？」

零を除く三人が、一斉に驚いた。

「零さま!? この女と話などと！ それも二人きりとは！」

物申したのはキャシーだったが、零のひと睨みで気圧されて、あっけなく引き下がった。妹を促して、二人で倒れた手下を抱え、そそくさと隣室へと出て行く。

早瀬が言葉を発したのは、ドアが閉められて零と二人きりになってからだった。

「あのっ。どうして、ここに？」

「京那が、あの子……あなたの連れに、もう一度会うつて言う、から。それで私も……」

早瀬が訊いた『ここ』の意味を零は取り違えたようだが、その答えは答えで、早瀬には気になるものだった。

「連れって、千里ちゃんのこと？ 一体、何の用で？」

「知らないし……答えないよ」

零の声は少し不機嫌に聞こえた。

教えてくれない京那への不満か、自分に話をさせず質問ばかりする早瀬への不満か。いずれにせよ早瀬は、ひとまず口をつぐまざるを得なかった。

「それじゃ、こっちの話……するね」

零は、早瀬の正面に立った。

自然体からも滲み出る彼女独特の迫力に、早瀬は思わず身じろぎをし、縛られた椅子が床と擦こすれて音を立てた。

そんな早瀬目がけて、零の顔がゆっくりと下がり、

「たくさん仲間を怪我させて、ごめん……なさい」

深々と下げた零の頭は、ちょうど早瀬の目の前にあつた。

「零……さん？」

つむじは左巻きだった。

「あなた、とは……何度か会ってるけど。謝ったことなかった、から」

零は、下ろした時よりもさらにゆっくりと、顔を上げた。

「ターゲットだった、中森って人。だけじゃなく……他の人たちまで。それにこの前は、千里って子にも……だから、ごめんなさい」

相変わらずの鉄仮面で声にも抑揚よせようはないが、心底申し訳なく思っていることは十分に伝

わってくる。

いや、もうずっと以前から十分に伝わっていたからこそ、早瀬は零を恨む気になれないでいるのだった。

恨むとすれば、それは――

「なのに……どうし、て？」

「えっ？」

「私と京那は、あなたの仲間に……酷いこと、したよ。それなのに……あなたは、どうしてなの？」

早瀬は、視線を床に落とした。

零の目を見ていられなかったのは、彼女が次に何を問うか、わかってしまったからかもしれない。

「あなたは どうして……京那に協力なんかできる、の？」

「お金のためよ」

自信たっぷり言い切ったのは、京那だった。

柳生、真田、千里の三人を見回すその口元には、ここには居ない早瀬に対する冷笑が隠

しようもなく浮かび上がっている。

「私と早瀬さんは、一つの契約を結んでいるの。零を倒せるくらい強いストライカーを連れてくれば、前の融資の何倍ものお金を、団体に寄付してあげるといふね」

「前の融資、だと？」

柳生の反応は想定の内、あるいは誘導した結果だったのだろう。京那は即座に言葉を返した。

「早瀬さんの所属団体は、少し前から資金繰りが非常に危ない状態だったのよ。それで、見かねた私が融資を申し出たってわけ」

「なんだあ。お金って、団体の話だったんっすね」

真田が、ほっと息をついた。

「てっきり、早瀬さんが自分の欲望のために、なんて話かとビクビクしたっす。団体のためなんて、むしろ早瀬さんらしいじゃないですか」

「そうね。私も美談だと思うわ」

京那もにこやかに同意した。

花のような笑顔が、元の冷笑を通り越して嘲笑に変わるの、一瞬のことだった。

「その資金難を引き起こしたのが、当の早瀬さんでなければね」

むろん京那とて、最初から全ての事情を知っていたわけではない。

零を実戦で鍛え上げるべく、まずは実力派のグラップレーに的を絞って野試合——闇討ちを仕掛けていた京那は、仕上げとして、早瀬の先輩にあたる国内有数の関節技使い・中森あずみを標的に据えた。

中森が所属する団体の資金繰りが、急激かつ深刻に悪化しており、その原因が早瀬葵という一選手に多額の現金を貸与したためと知ったのは、中森を調査した過程のことだった。貸与自体は不正でも何でもなかったのだが、通常では考えられない金銭の動きを京那が見逃すはずはなかった。

「これは、後で早瀬さんから直接聞いた話だけれど」

わざわざそう前置きしてから、京那は続けた。

「彼女、相当お金に困ってたとかで、最初は本当に会社のお金に手をつけようとしたのよ。ところが、なんと社長に見つかっちゃって、あえなくお縄——と思ったら、なんとなんと、社長が同情して会社のお金を貸してくれたんですって。美しい人情話よねえ」

おかげで零細団体の経営は火の車だけだね。と付け加えた京那は、何が面白いのかころと笑った。

生まれてこの方、貧乏などとは無縁の生活を送ってきた人間の笑いだった。

「その後は……もう、さすがにわかるんじゃないかしら。私は早瀬さんに話を持ちかけ、早瀬さんはそれを受けた。その結果、彼女の仲間になんか起きたかは知っているはずね。全てが終わってから駆けつけた早瀬さんは、蒼い顔して『まさかこんな話だったなんて』とか言ってたけど——ふふふつ、それもどうか。本気で後悔してるなら、次に提案したストライカー探しなんか、引き受けるわけがないものねえ？」

楽しい声で言い終えると、京那は一つ息をついて聞き手の反応を待った。

結果は、無言。

声も出ない様子の三人に満足したのか、京那は再び口を開いた。

「これでわかったでしょう？ 彼女がどんな人間で、何を隠していたのか。あの人は、早瀬さんはね——」

もうどのくらい、時は流れたのだろう。

数秒か、数分か、あるいは数時間か。

零の問いかけにもその眼差しにも応えることができずに、早瀬はただ、唇を噛んでいた。

（早瀬さん。あなたはね——）

早瀬の脳裏に、京那の姿がゆっくりと像を結んだ。

強いストライカーを連れてくるよう早瀬に告げた時、去り際に振り向いた京那の姿。彼女は、こう言ったのだった。

「涙を拭ってくれた社長、支えてくれた先輩、慕ってくれた後輩——その全てを、早瀬さんは裏切ったのよ」

## 5

「高飛車というか、生意気というか。まったく何様のつもりよ、あの千里って子」  
天に唾する悪態をつきながら、京那はジムを退出した。頭上に広がる厚い雲が気になったものの、幸いにしてまだしばらくはもちそうだ。

「あの話を聞いても、返事が全然変わらないなんて。頭悪いんじゃないかしら」  
早瀬に関する京那の話が終わった後、さすがにショックを受けた様子の子の柳生や真田と異なり、千里は少なくとも表面上、平然としていた。

その千里を廊下に誘い出すと、京那は改めて自分の下に来るように勧めたのだ。  
即時承諾は無くとも、今度は悩むはず——と踏んだ京那の予想はしかし、全く変わらな  
い千里の態度と返答の前に、あえなく裏切られた。

あまつさえ、京那が念を押そうとしたタイミングで千里に再びメールが入り、京那を無



視して返事を打ち始めたと思ったら、最後は携帯を操作しながら「失礼」の一言だけを残して歩み去ったとあって、ついに京那も憤然と辞去を決めたのだった。

「まあ、いいわ。それならこちらも、やることをやるだけよ」

腹の虫がおさまらないのか、わざわざ口に出して宣言してから携帯電話を取り出した。アドレス帳から番号を呼び出し、耳に当てる。

しばらく待つと、機械的な女性の声が、相手の携帯が圏外にあるか電源が入っていないことを一方的に告げた。

「ロードワーク中のはずでしょ!? なにやってるのよ、あの子はっ!」

八つ当たりだと多少は自覚しつつ、京那は苛立ちを電話口につけていた。

零は、まだ地下室にいた。

早瀬に向けた質問、その答えを辛抱強く待ち続けていたのだ。

しかし、早瀬は口を閉ざしたまま、何も語ろうとはしない。

関わりあいたくない種類の沈黙が続いて——とうとう、零の方が折れた。

「やっぱり……答えられないん、だ」

肩をすくめて、あるいは落として、零は踵を返した。

「京那の言ったとおりってこと、だよね……」

早瀬は顔を上げたが、背を向けた零が気付くはずもない。

ドアを開けると、すぐさまキャシーが声を掛けた。

「零さまっ。もうよろしいのですか？」

「う、ん……。用は済んだから……」

「この女は？ いかがいたしましょう？」

「好きに……していい、よ」

失望から来る無関心を早瀬の耳に残して、零は後ろ手にドアを閉めた。

駅から続く裏通りに面した雑居ビル。

地下からの階段を上がってきた零は、ちょうど携帯にかかってきた電話を取った結果、何度も電話したのに、という不機嫌な女性の嫌味を、しばらく聞かされることになった。

やがて電話を終えた零は、軽く柔軟をやり直し、駅とは反対方向に走り出した。ロードワークを再開したわけではない。

雨が降る前にホテルまで戻って、とある場所へと行かなければならなかった。

マラソンランナーばりのスピードで走り去る零。

その後ろ姿を物陰から見つめて、一人の女性が呟いた。

「……間違いない。寿、零……だよね……？」

どこか気弱そうに縮こまった女性の手には、道で拾った一枚の紙が握られていた。

千里は、商店街や駅へと続く坂道を駆け上ろうとして、不意に足を止めた。

携帯電話に、この一時間で三度目となる、同じ相手からのメールが届いていた。

「因果応報！ ワタシたちの邪魔をするからよ！」

「ウフフフツ。音を上げるなら今のうちですよ？」

地下の小部屋では、ウオン姉妹が早瀬への『説得』を再開していた。

縛り付けられた早瀬を椅子ごと床に蹴り倒して、足先で顔や身体を踏み付け、拷問用の棒で椅子や左右で結んだ長い髪の毛ふさの房を叩く。

肉体に傷をつける直接的な責めにはまだ至っていないものの、姉妹の顔で徐々に深まっ

ていく嗜虐しぎやくの笑みが、全ては時間の問題だと告げていた。

「お、お願い。もう、やめ……」

早瀬の弱々しい呻きが、逆に姉妹の背中を押した。二人の笑みが限界まで深まり、ついに自制心が決壊する——寸前、突如として邪魔が入った。

閉じられたドアの向こうで、騒ぎが再び巻き起こったのだ。

「今度は何ですっ!？」

キャシーは思わず欲求不満の叫びを上げた。

激昂のまま大股でドアに近寄ろうとした時、そのドアが衝撃音とともに開き、配下の女性が仰向けに吹き飛んできた。

つい先ほどのリプレイとしか、考えられない映像。

思わず呆然としてしまった姉妹と早瀬の前に、これも前回と同じく、一人の女性が姿を現した。

「零さま!？」

違う、とキャシーはすぐに自ら気づいた。

背丈は、前回——零とほぼ同じ長身。他方、やや細身な点と、一本結びにした長い髪が、明らかに異なっている。

何より、下手なモデルなど及ばぬ端正な顔立ちに乗った、切れ長の瞳。

姉妹と早瀬、三人の記憶が同時に彼女の名を導き出し、畏怖の響きすら込めて口に乘せたのは、その瞳に見つめられたからかもしれないなかった。

「伊達……遥っ!」

「……あ、うん。私……」

自分の名を呼ばれた女性は、およそ恐れや怖れなどとはほど遠い頼りなげな声で、小さくうなずいたのだった。

伊達遥。

静かなる不死鳥——フェニックスとも呼ばれ、長身を活かした蹴り技を得意とする国内きつてのストライカー。

現役レスラーの中では、寿零と並ぶ数少ない『世界を狙える選手』であり、実のところウオン姉妹も早瀬も、零の相手としては真っ先に思いついた人物である。

残念なことに、EWA世界王座への挑戦を目前に事故で重傷を負って以来、長期にわたる欠場を余儀なくされていたはずだが——

「……あなた、早瀬さん……?」

「は、はい!」

直接の面識は無いものの、同じ打撃系レスラーである早瀬にとって、伊達は目標とする選手の一人でもある。

まさかこんな地下室で、椅子に縛られ転がされて床から挨拶することになるとは思ってもみなかったが、登場の仕方から言っても敵とは思えなかった。

一方のウオン姉妹は姉妹で、突然どころか青天の霹靂（きれき）と言って良い伊達の登場に、敵か味方かの明確な判断すら下せず、ただ逡巡していたのだが、

「……待ってて。すぐ助けるから……」

伊達のこの言葉が、決定的だった。

「先手必勝！」

薄闇に踊ったブルックの貫手を、伊達は軽やかに後退して躲かわした。

正中線がぶれない伊達の動きに内心で感嘆しつつ、キャシーは伊達と妹を追う形で戸口をくぐった。

二十坪弱のスペースで相対した距離は三メートル弱。周囲には四名の部下が全員倒れ伏していたが、キャシーもブルックも今さら驚きはしない。

あの伊達遥なら、これくらいはやってのけて当然だ。

それほどの相手を前にしながら、しかし二人は自信と余裕の表情を崩さなかった。

「伊達遥——なるほど。私たちでも、これは危ない」

唄うように呟いてから、キャシーは、にいと笑った。

「あなたが、まだ復帰もできない怪我人でなければね。そして——」

「衆寡不敵——二対一でなければ！」

ブルックが動いた。

右側、伊達の左奥へと素早く弧を描く。

伊達は目で追いこそしなかったが、間違いなく意識はブルックに向いた。

「こちらですわよ！」

絶妙のタイミングは、姉妹ならではか。

伊達の意識の外側で、キャシーが直線を滑る。

放った掌打はそれでも躲され、入れ替わりに鋭い手刀が襲うが、これを化勁かけいでいなしたところまで、キャシーの読みの範囲内だった。

——これならば。

キャシーの自信に呼応して、ブルックの横蹴りが三連で襲う。

二発を捌き、一発は避けた伊達だったが、

「壊れなさいなっ！」

懐に入りこんだキャシーのエルボー——頂肘が、伊達の細いボディにめり込んだ。

「伊達さんっ！」

隣室の床からの悲痛な声を早瀬から、空気を吐き出す音と骨の軋きむ音を伊達から引き出して、キャシーの口元が吊り上がる。

あとは離れ際に顎を蹴り上げれば、それで一卷の終わり——。

終劇の二文字を脳裏に浮かべて放った脚があっけなく空を切った瞬間は、さすがにキャシーも肝を冷やした。

それでも、伊達が反撃もせず逃げるように大きく背後へと回りこんだのを見ると、すぐさま余裕と侮蔑の笑みを取り戻す。

「どうしたの？ そんなことで彼女を助けられるのかしら？」

「……うん。ちよつと、なまってるかも……」

肘を入れられた箇所をさする声に疑念を抱いたのは、ブルックの方だった。姉の一撃をまともに受けておきながら、伊達の声には苦痛の響き一つ残っていない。

警戒しながらキャシーの隣に並んだ時、初めてブルックは気がついた。伊達が、姉妹から早瀬を守るように、戸口の前に立ち塞がっていることを。

今までの攻防が全て、早瀬を人質に取られる危険を排するべく、立ち位置を入れ替えるためだったとすれば——？

「姉さんっ！ 油断——」

大敵、と続けようとしたブルックにこそ生じた、大きな油断。



姉の眼前で、警告のためにこちらを向いたブルツクの顔がひしゃげた。

跳躍一閃。雷槍の如き伊達の飛び膝蹴りが、妹の顔面を意識ごと吹き飛ばした——とキヤシーが悟ったのは、着地しざまの半回転から放たれた伊達の肘に、自分のガードが間一髪で間に合った時だった。

「……不意をついたとはいえ、あの子の内功を一撃で。やはり、大したものですわねっ」  
 鏢つばせ迫り合いにも似た状態で、キヤシーが唸る。

上ずったその声に、伊達の清冽せいれつな声が覆いかぶさった。

「……これで、一対一……」

優位性の一つは失われた——そう宣言された気がして、

「怪我人風情がっ！」

キヤシーは力ずくで伊達を突き放し、裂帛の気合とともに連撃を繰り出す。

左右交互の下段蹴りに裏拳を混ぜ、回転力と手数で圧倒する流派秘伝のコンビネーションには、伊達といえども受けと回避が精一杯で、反撃の糸口が掴めない。

どころか、何発かは捌ききれずに喰らってしまい、伊達には苦鳴を、キヤシーには嘲弄の響きを上げさせた。

「これで終わりね——別了！」

ビエラ。決別の言葉が跳ね上げた右脚をどう躲しても、真の狙いである踵落としが、伊

達の頭上に叩き込まれる。

詰んだはずの状況——それはキャシーの常識だった。

垂直に上がった脚が跳ね戻る刹那の間に、伊達は螺旋の動きで沈み込んだ体勢から長い脚を旋回させ、驚愕する間すら与えずにキャシーの軸足を刈り取った。

なぜ自分が天井を見上げて落ちていくのか。己を襲った状況を理解できないままに、キャシーの身体は長年の修練で刻み込まれた受身を取って、即座に起き上がる。

そのこめかみに吸い込まれたのは、閃光。

キャシーの意識を妹と同じ闇の奥へと送り込む、伊達の膝蹴り——シャイニングウイザードだった。

「怪我人……風情、が……」

消え行く意識がリフレインさせたつい先ほどの台詞に、

「……もう、怪我人じゃないもの……」

伊達は小さめの口を尖らせて、抗議した。

「……リハビリは……昨日で全部、終わったんだから……」

懸命の主張に反論できる存在は、この部屋のどこにも残ってはいなかった。

「……怪我とか、してない……?」

「あ、はい。大丈夫……かな」

倒れたままでロープをほどかれた早瀬は、手首をさすって立ち上がった。

「ありがとうございます!」

起き上がりざま目の前で弾けた、人懐っこい笑顔。伊達は一瞬見張った目を、思わず大きく逸らしていた。

「……ほ、本当に、『天使みたいに笑うお姉さん』なんだ……」

「え? なんですか?」

「……う、ううん。なんでもない……」

もじもじと頬まで赤らめた伊達は、もともと、極めて人見知りするタイプなのだ。

そんな伊達を目の当たりにして、凄く綺麗で怖いくらいに強いけど、案外かわいい人なのか、とか考えつつ、

「あの、伊達さん。でも、どうしてここに?」

と、早瀬が訊くと、伊達はさらに恥ずかしそうに身をすくめた。

「……メール……」

「メール?」

「……メールで、友達に頼まれたから……」

「友達？」

オウム返しで首を傾げる早瀬に、胸の前で手を合わせた伊達が、どこかうれしそうな口調で答えた。

「……桜井、千里ちゃん……」

「桜井……えええっ？ 千里ちゃん!？」

「先生っ！ 早瀬さん!」

面食らった早瀬の耳に、馴染なじみつつある声が飛び込んできた。

早瀬と一緒に階段口を向いた伊達が、

「……もう。また、先生って言う……」

メールで何度言っても直してくれない、会うのは二度目な弟子に、頬を膨らませた。

「……私も、お姉さんか、友達が、いいのに……」

呟きは小声すぎて、駆けて来る千里の足音に紛れた。

「早瀬さん、大丈夫ですか？」

「う、うん。伊達さんのおかげだね。千里ちゃんは、どうしてここに？」

今日はこの質問ばかりだなあ、と思いつつ、早瀬は千里に訊いた。

「話せば長くなるのですが——私に会いに来てくれた先生が、京那の名が書かれた紙を偶

然拾ったんです。メールでその話を教えてもらっていたら、ジムに現れた京那がウオン姉妹のことを教えてくれました。そして、ビルに入っていく零らしき人を先生が見かけて、あとは——」

かいつまんだつもりだったが、それでも長くなった。言葉を切った千里は、形の良い顎に指を添えて、

「——とにかく、先生とメールと偶然のおかげです」

無理矢理まとめた。

文句の一つも出なかったのは、早瀬が別の話に気を取られたからだ。

「京那がジムに……そうだ、零も言ってた。千里ちゃんに用って、何だったの？」

「誘われましたが、断りました」

今度は要約されすぎて、正確な意味がわからない。細かく訊こうとした早瀬より先に、千里が続きを發した。

「早瀬さんとの契約についても、話していききましたよ」

何気ないその言葉が、早瀬の世界を凍りつかせた。

千里も、それ以上は何も喋らない。

向かい合ったままの二人を、伊達はちらちらと目だけで見比べていたが、ふっと顔を階段の方へと向けた。

「……雨……？」

微かな雨音が、地下のこの部屋にまで、届いてきていた。

ついに降り出した雨は、雷鳴まで引き連れて、激しくなる気配を漂わせていた。

「降って来ちゃいましたね。早瀬さんたち、大丈夫っすかねえ」

真田の声の後半は、雨に濡れることを心配したものではなかった。

京那が去った後、いつの間にか外出していた千里からの電話で、千里の『先生』とやらが早瀬救出に向かったことは知っている。

肝心の行き先を聞きだせずに電話を切られ、折り返してもつながらないということ、真田は柳生からこっそり絞られたわけだが、

「こうなれば、信じて待つしかあるまい」

と腹を据えた柳生ともども、真田も待機することとなったのだ。

休憩室のソファで腕を組み黙考を続ける柳生を、真田はびくつき気味の顔で眺めて、

「先輩……ジム、行きますか？ 戻ってきたら、すぐわかりますし……」

と呼びかけた瞬間、いきなり立ち上がった柳生の姿に、真田はひっと身を引いて窓ガラスに肩をぶつけた。

「人の気配だ」

「へっ？」

と呆けた真田の鼓膜に、ジムの方から物音が聞こえた。

玄関の引き戸が開けられる音——ということは、外にいる人の気配を感じたのか、この先輩は？

真田が開いた口をさらに拡大させたところで、柳生は身を翻して駆け出した。慌てて、真田も後に続く。

「早瀬さん、千里さん！ 戻ってきた——!？」

ジムへと出たところで声に乗せた真田の期待は、言い終わらぬうちに打ち砕かれた。

開いたままの戸口の向こうは、大粒の雨。

その中を、一人で歩いてきたのだろう。傘も持たない足元には小さな水溜まりができ、さらに広がる様相を呈していた。

フードを目深に被った長衣から滴り続ける、水滴によって。

「もう、あなたたちは……終わりでいいって、さ」

身構える柳生と真田に向けて、零は静かに一步を踏み出した。

## 第四章 Heartful Voice

{ In my hope of it reaching you }

## 1

あの日も、こんな雨が降っていた。

降りしきる雨は、時に強く、時に弱く、闇に白く浮かび上がる建物を叩いた。

雨が奏でる不規則なワルツは、分厚いコンクリートと人工の光に守られた屋内にも無遠慮に届き、病院の広い待合スペースに座った人々の顔を、時おり不安げに窓へと向けさせる。

たった今、窓のある右側を向いた女性——伊達遥もその一人と思われたが、彼女の場合は事情が異なっていた。

顔に映るのは、不安ではなく気遣い。

瞳は、窓の向こうではなく、すぐ隣で力なくなぐだれる女性に向けられていた。



「……あの。早瀬……さん……」

人一倍内気な彼女が、精一杯の勇気を出した声は、それでもあまりに小さすぎた。

床を見つめる——本当はどこも見つめてはいない——早瀬葵の思い詰めた瞳をこちらに向かせることができず、伊達は唇を噛んだ。

そんな彼女の左、早瀬とは反対側の席には、桜井千里が座っている。

一見平然とした面持ちに、しかしさすがに焦慮と沈痛の色を浮かべたその視線は、待合スペースから続く廊下の奥、急患用の処置室へと注がれていた。

——寿零の襲撃を受けて、柳生と真田が病院に運び込まれた。

地下室を出た三人が衝撃の事実を知ったのは、大通りでタクシーを拾い、ジムへと戻る途中でのことだった。

タクシーに乗る前と、乗ってからしばらくは、千里が伊達に状況の説明をしていた。

千里は『通信教育の先生』である伊達にメールで事のあらましを知らせており、だからこそ伊達も、弟子に力を貸そうと急遽——実は、リハビリ終了記念で数少ないメル友と会いたいの思惑もあって——千里のもとを訪れたのだが、やはり直接話さないと伝わりにくい事柄も多く、千里の話は数分では終わらなかった。

その間、早瀬はほぼ無言。

意識してのことか、千里は伊達への説明中、早瀬と京那の『契約』についてはほとんど触れていない。伊達にとつても気になる点ではあったが、悲壮感すら漂わせてうつむく早瀬の様子は、伊達に気軽な質問を許さなかったのだ。

そして、千里の話が終盤に差し掛かったところで、早瀬の携帯電話に病院からの連絡が入った。

ジムのすぐ近くまでやってきていたタクシーは、その連絡を受けて目的地を変更。

それ以来、今に至るまで、三人の間には沈黙を原則とする旨の、暗黙の協定が結ばれているのだった。

普段ならむしろ歓迎ともいえる沈黙協定に、今回ばかりは耐え切れないのか。伊達は再度の勇気を振り絞って、早瀬に呼びかけた。

「……………あのっ……………」

さらに続ける言葉があったはずだが、それは急激な状況の変化に呑み込まれた。すつくと立ち上がった、早瀬の姿に。

「……………早瀬さん……………」

「電話、してきますね。すみません」

かろうじて微笑みとわかる会釈を残して、早瀬は急ぎ足で待合スペースを離れた。

この病院では、待合スペース近辺での携帯利用は禁止されている。

受付を挟んで反対に位置する玄関ホールへ向かう早瀬をしばらく目で追っていた伊達は、立ち止まった彼女が携帯電話を取り出したのを見ると、小さな吐息とともに視線を外した。そのまま外に出て行ったりしないかと、不安を抱いていたらしい。

「先生」

すかさず左側から掛かった千里の声に、伊達は若干焦り気味で振り返った。

千里は隣の席ではなく、数歩離れたところに立っていた。傍らには、眼鏡をかけた男性医師の姿が見える。

「先生がいろいろ書類を書いて欲しいと言うので、行ってきます。早瀬さんが戻るまで、先生はここで待っていてください」

最初の『先生』が医者なこと、後ろが自分のことだとは、伊達も理解できた。

とりあえず領いて、それから詳細を聞こうと思っていたら、

「お願いします」

の一声だけで、千里は医師とともにすたすたと歩き去ってしまった。

「……あ、あれ。えっと……」

戸惑っているうちに千里の姿は廊下の奥へと小さくなり、早瀬を呼びに行こうかと考え、でもみるが、電話の邪魔は失礼かとも思う。

リングではクールなファイトで名を馳せ、復帰さえすれば国内最強との声も上がる『静かなる不死鳥』。

彼女が病院の待合スペースでただオロオロと首を巡らす姿は、ある意味でファン垂涎すいぜんの映像と言えなくもなかった。

「——ではまた、後ほど」

二カ所めになる相手との通話を終わらせた時、早瀬はすでに歩き始めていた。

待合スペースに戻る道ではなく、玄関の向こう、銀の紗幕しやまくが待ち受ける夜へと向かって。

「……どこ、行くの……っ？」

小さな声は、すぐ後ろから聞こえた。

早瀬の足が止まる。

振り返らなくても、自分を心配して様子を見に来てくれた伊達の声だということは、もうわかっているに違いない。

「……早瀬さん？ 千里ちゃんが、待ってるよ。だから……」

「終わらせてきます」

伊達はその時、初めて早瀬の声を聞いたような気がした。

早瀬の、心からの声を。

「全部、私のせいなんです。だから、私が、終わらせてきます」

早瀬が、肩越しに振り返った。

その顔に浮かんでいる、微笑み。

出会った時に見たものとは全く違う、目を離れたらどこかへ消え去ってしまいそうなそれが、伊達の胸を打って――

「……ちーちゃんのこと、よろしくお願いしますね」

「――!？」

思わず伸ばした伊達の手は、早瀬の二つに結んだ長い髪にも届くことなく、ただ空気だけを掴んだ。

その手の先を、早瀬は駆けて行く。

雨音に閉ざされた、闇の中へと。

「早瀬さん！」

伊達は、自分が出したとは信じられないような大きな声を上げて、早瀬の背を追おうと

し——すぐに身体を反転させた。

がらんとしたロビーを突っ切って、待合スペースの席まで駆け戻る。携帯電話や折りたたみ傘の入ったバッグを掴んだところで、必死の顔を逡巡がよぎった。

このまま千里を呼びに行くべきだろうか？

千里が去った廊下の奥へと視線を送り、しかしそれも一瞬のこと、伊達は意を決して、早瀬を追うべく再び走り出した。

受付の看護師から飛んだ、病院内では走らないでください、という叱責も、その背には届かなかった。

指示された書類を書き終わり、急患用の簡易病室へ案内されて、数分。

千里は先ほどから、『はあ』『そうですか』『それは災難でしたね』の三語ばかりを何回も繰り返していた。

「あーもうっ！ 悔しいっス！ もうちよつとだったのに！ もう一回やったら、自分があいつをギッタギタにしてやるっスよ！」

「はあ」

「ホントっスからね、千里さん！ さっきだって、零の奴がびしよぬれの土足でジムに上

がってなければ！ そしたら自分が足滑らすこともなく、斬馬迅が当たってたはずなんですって！」

「そうですか」

「そうなんスよ！ それをこの不甲斐ない自分の足が、足がっ！ 滑ってよろけて、あろうことか柳生先輩の邪魔をしちゃったんス！ ああつ、あれさえ無ければ、柳生先輩が遅れをとることも無かつたはずなのに！」

「……まあ、そんなこんなで、私と真田が敗れたわけだ」

隣のベッドから柳生の冷静な声が割り込んだおかげで、千里は何度目かとなる『それは災難でしたね』を言わずに済んだ。

腕を組んだ柳生と、口をつぐむもまだ言い足りない様子の子の真田。

どちらも千里の前でベッドに横たわってはいるものの、これは起きると看護師に怒られるという理由が大きく、二人ともいつでも立って歩けるほどに元気だった。

心配して損しました——などと千里が考えているかどうか、表情からは掴めない。

「念のため、これから内臓や頭部の検査をするそうだよ」

柳生は、腕をつけて上体を起こした。

「ただ、おそらく二人とも、問題は無いと思う。派手に倒されて失神、病院に担ぎ込まれたが、結果的には軽い外傷のみ。さすがはプロレスラーと医者は褒めてくれたが——

今回ばかりは、そうではあるまい」

「……どういふことですか？」

千里の問いかけに、柳生は合わせていた目線を一旦外した。天井を見上げる。

「零の、おかげだよ」

「それは——彼女が手を抜いた、ということですか？」

「そう認めるのは、悔しくもあるがな」

柳生は苦笑した。

目線を天井から千里に戻す間に、その表情を真顔に戻して、

「零も、何か変わったのかもしれない」

「変わった……ですか？」

「今までのあやつであれば、手抜きも情けもありえぬ話だ。それに、救急車を呼び、連絡先としておぬしたちのことを伝えたのも、おそらくは零なのだよ」

医者の話によれば、救急車を呼んだ相手は名乗らなかつたのだという。

しかし、二人が倒された誰もいないジムから救急車を呼び、さらに早瀬や千里のことを知っている人間となれば、消去法で他には考えられなくなる。

柳生の顔は、再び苦笑を刻んだ。

「京那に知られれば、大目玉であろうになる。我らにとっては、悪くない変化だったわけだ



が——いや」

自らの言葉に首を振って、

「変化ではない。あやつは、戻りたいだけなのだろう。かつての寿零……京那が現れる前の自分にな。もしそうであれば——」

柳生は三たび真顔に戻って、千里を見つめた。

「零も、限界が近いのかもしれないよ」

その後、柳生から『懇意にしている忍者から届いた最新の噂』とやらを聞いたところで、千里は部屋から退出した。検査の準備が整ったからと、看護師たちが柳生たちを連れ出しに来たのだ。

柳生との会話を反芻はんすうしながら足早に待合スペースへと戻ると、そこには誰もいなかった。電話してくると言っていた早瀬を思い出して辺りを歩き回ってみるが、早瀬の姿も伊達の姿も見当たらない。

外は夜で、しかも雨とあつては、散歩に出たとも思えなかった。

どこへ行ったのかと首を捻りながら、千里は何となく自分の携帯電話を取り出した。玄関ホールホールの太い柱に背を預けて、病院に入った時にオフにしていた電源を入れる。

しばらく待たされて——もう少し早ければいいのと思う——携帯電話が立ち上がると、好んでシンプルにしてある画面で、マークが一つ増えていることに気が付いた。

留守番電話への着信を示すマークだ。

電話機本体ではなくセンター側で記録される留守電であり、いささか操作は面倒だが、かなり長いメッセージも保存できたはずだ。

もつとも、そんなに長い伝言が残っていることもないだろう。

むしろ間違い電話かいたずらの可能性が高いと思いつつ、千里は画面に表示された番号を押してセンターに繋ぐと、メッセージを聞くべく携帯を耳に当てた。

## 2

あの、早瀬です。

……あはは、近くににいるのに留守電なんて、なんか緊張しちゃうな。

えっと、こんなときにごめんね、千里ちゃん。

でも、こんなときだからこそ、どうしても千里ちゃんに話しておきたかったんだ。

早瀬がタクシーを降りたのは、この街では唯一とも言える最高級ホテルだった。

普段なら場違いさに気後れするであろう豪華なロビーに臆せず入っていくと、すぐさま丁重な挨拶とともに、制服に身を包んだ壮年男性が近づいてきた。

これから早瀬と会う相手が手筈を整えていたのか、二言三言話しただけで心得顔の男に案内され、早瀬はエレベータホールへと向かった。

途中、濡れた髪や身体のためかタオルを渡されたところで、その早瀬を追うように、ロビーに足を踏み入れた人影が一つ。

ドアマンが上品な会釈の中に微かな不審の色を漂わせるのを足早に無視して、人影——伊達は、早瀬の背を用心深く見つめながら、携帯電話を取り出した。

前に、私が話せなかったこと。

千里ちゃんが私に訊いたことと、私が千里ちゃんに聞いてもらいたいこと。

全部、千里ちゃんには話しておきたかったの。

早瀬の乗ったエレベータが最上階で止まったことを確認してから、伊達も近くのエレベーター

タに乗り込んだ。最高級スイートで占められたフロアが丸ごと貸し切られていることなど知らず、ボタンを押して最上階へと二十人乗りの巨大な箱を向かわせる。

わずかに身体が押さえつけられるような感覚の中、伊達は携帯電話を開くと、すでに書きかけていたメールを完成させていった。

まずは……やっぱり、あのことかな。

ほら、喫茶店で、誰かのあだ名かって聞いてくれたこと。

あの時の私、すっごくおかしな顔しちゃったんだよね。

千里ちゃんが心配して、話を終わらせようとしてくれたぐらいだもん。

……ごめんね、千里ちゃん。

千里ちゃんまで傷つけちゃったこと、ずっと気になってたの。

あの子のこと——ちーちゃんのことで、ね。

電子音とともにエレベータのドアが開くと、伊達は特殊部隊の隊員さながらに周囲を警戒してから、自らの色彩で高級感を主張するカーペットへと足を踏み入れた。

広く絢爛な廊下には、早瀬はおろか誰の姿も見えない。

まずはエレベーターから見て左を向き、しばらく先で行き止まりになっているのを見て取ると、右に向き直った。

伊達の端正な顔が、たちどころに驚愕と緊張で強張った。

確かに誰もいなかったはずの廊下、その中央に一つの影が立っている。

まるでずっと以前から伊達を待ち受けていたかのような不動の姿勢に、頭からすっぽりと漆黒の長衣を纏って。

音も無く半身の構えを取った伊達の肩から、小ぶりのバッグが滑り落ちた。

ちーちゃんはね、私の妹なの。

歳はちよつとばかり、離れてて。

子供の頃は、何かあったらすぐ大声で泣いて。

大きくなったら、しよつちゅう喧嘩して、けっこう素直じゃなくなつて。

でもすつごく懐いてくれて、笑ってくれて。

いつも私と一緒にだった、世界で一番一番大好きで大切な、私の妹なんだよ。

早瀬が通された一室は、リビングだけでも彼女の実家より遥かに広い、最高級のスイートルームだった。

見る人が見れば、うっとりと思をつきそうな調度品。それらが取り揃えられた空間を贅沢にも独り占めしておきながら、アンティークらしき椅子に一人座った早瀬は、ただ自分の足元だけを見つめていた。

あ、大好きだったのは、私だけじゃなかったかな。

家族も、友達も、ちーちゃんも、みんなから愛されてたもん。

私が、ちよっと妬いちやうくらいにね。

でも……ひよっとすると、愛されすぎちゃったのかもしれない。

それで、天の神様にまで、愛されちゃったのかもしれないね。

うつむいた早瀬の姿は、病院の待合スペースでのものとよく似ている。しかしそこには、一つだけ決定的に異なる要素が存在していた。

レスラーとして共に闘ってきた仲間たちであれば、気が付いたことだろう。控室でリングに向かう時を待つ、まさにその時と同じ色たを湛えた、早瀬の瞳に。

ちーちゃんの名前は——ちさと。

早瀬、千里。

千里ちゃんとおんなじ名前で、今はもう天国に行っちゃった、私の妹なんだよ。

鈍い、なのにどこか鋭くもある音が、衝突した互いの身体を軋きませた。

そこにどちらのものか歯ぎしりの響きが加わった時、向かい合った二人——零と伊達は、同時に後方へと跳んでいた。

零だけは、着地と同時にもう一回後ろへ跳ね、空中で身を捻って重い長衣を一気に脱ぎ捨てた。

これまでの戦いでは、一度たりとも必要としなかった行為。

それを零にさせた相手は、彼女の想定をもなお超えるスピードで、予想着地点へと風を巻いて肉薄した。

着地と同時にかるうじて躲した伊達の膝蹴りが、どれほどの威力を秘めていたのか。零の額に浮かんだ汗の珠だけが、知っていた。

私のウチはね、あんまりお金が無かったの。

ちーちゃんが子供の頃、すごく難しい名前前の病気にかかって——あ、全然そんな風に見えないくらい、元気だったよ？

だけどね、お薬代とか高くって、手術なんてとてもじゃないけど無理だった。

私がプロレスラーになって、何とかお金を稼げるようになって。

ちーちゃんが……高校生になったちーちゃんが、学校で急に倒れちゃっても……ね。

空気が、伊達の頬を叩いた。

直角を描いてこめかみを襲う黒いフィンガーグローブを、伊達は仰け反って避ける。

前髪が逆立ち、蹴りもかくやという風圧ゆえか、伊達のバランスが崩れた。

崩れたままに床を蹴って、後ろへと逃れる。零が平然とそれについて来るのを見越して、カウンター狙いの足刀を繰り出す。



空を切った。

ぞくり、と凍った背すじの命ずるまま、伊達は夢中で肘を打った。背後に。

骨の打ち合わさる音が鳴った。

相手の肘を肘で相殺することには成功したが、零がいつの間にも後ろへ回ったのか、伊達にはわかっていなかった。

だからね、京那が言ったことは、全部ホントなんだよ。

きつと京那は、千里ちゃんにも言っちゃってるよね。

全部、お金のためだつて。

それはね、そうなの。その通りなの。

団体のお金を盗もうとしたのも、京那の誘いに乗ったのも。

中森さんや那月ちゃんたちが酷い目にあつたのも、それでも止められずに強い人を探したのも、柳生さんたちを巻き込んだのも。

みんな、お金のためだつたんだ。

みんなみんな、私のせいだつたんだよ。

早瀬が案内された部屋とほぼ同じ作りの一室で、寿京那はソファに深く腰掛けて優雅にワイングラスを遊ばせていた。

グラスは空。飲み干したのではない証拠に、ワインクーラーに入ったままの白は、封も切られていない。

お酒よりもつと美味しいものを楽しんでいるの、とでも言いたげに陶然と酔った瞳、その先には、大画面の薄型テレビが置かれていた。

画面の左右に分割されて鮮明に映っているのは、身じろぎもしない早瀬の姿と、激しい動きで無音の死闘を演じている、零と伊達の姿だった。

軽蔑……したよね。私のこと。

でもね、悪いことだとか、思わなかったよ。

他に方法なんて、なかったから。

ううん、そうじゃない……そんなの、どうでもよかったんだ。

だって、あんなことまでして、お金を手に入れて、手術したのに。

それなのに、あの雨の日……ちーちゃんは、帰ってきてくれなかったんだもん。

私は、ひとりぼっちになっちゃったんだもん。

もうどうでもいい、みんなどうなったっていいって、ずっとそう思ってたんだよ。

モニタの中の早瀬と、目が合った。

そんな気がして、京那は少しばかり焦る。

こちらを見上げる早瀬の姿に、カメラを気付かれたかと思ったのだ。

しかし、京那の危惧をよそに、早瀬はただカーテンの開け放たれた暗い窓を見つめていた。自らの姿がぼんやりと滲む、濡れた窓の向こう側を。

あの日……あの月の夜。千里ちゃんと出会うまではね——

雨は激しく降り続いており、月など見えるはずもない。赤みがかった瞳は、暗い闇を哀しくらい忠実に映し出していた。

早瀬の唇が、何か短い言葉を紡いだ。

京那は身を乗り出して唇の動きを見つめたが、読唇術に長けているわけでもない彼女には、早瀬の呟きを読み取ることはできなかった。

なんでかな。

あの時ね、私、千里ちゃんのことを、天使に見えたんだよ。

きつと、ちーちゃんか私のために呼んでくれたんだ、なんて思っちゃった。

ひよっとして、私も連れてつてくれるかも……って。

だけど、その天使さんが、ちーちゃんと同じ千里って名前だって聞いて、私……

早瀬が席を立った。

モニタ越しに覗き見を楽しむ京那の眉が寄るが、特に劇的な展開も無いまま、早瀬はパウダールームへと向かった。

京那はリモコンを操作して、カメラを切り替える。

しかし、パウダールームにまでカメラは取り付けられていないのだろう。早瀬の姿はモニタから消え、京那はおよそ上品とは言いがたい仕草しぐさを一つすることになった。

舌打ちである。

……私ね、ちーちゃんが怒ってるって、思ったの。

ちーちゃんが千里ちゃんになって、みんなに酷い事してる私を、叱りに来たんだって。おかしいよね。そんなこと、どう考えてもあるわけないのにね。

千里ちゃん、叱るどころか私を助けてくれたもん。

ちーちゃんと千里ちゃん、全然似てないしね。

なのに私、千里ちゃんのこと何度も、ちーちゃん……って思っちゃったんだ。

悪趣味と言えそうなほどの装飾を施された蛇口を思い切りひねると、たちまちお湯の奔流とともに、白い湯気がその姿を現した。

薄い乳白色に支配されつつある鏡の前で、早瀬は両手にお湯を溜めて顔を洗った。何度かそれを繰り返し、びしょ濡れになった顔のまま洗面台に手をついた。湯気の中で、溜め息にも似た吐息が口から漏れる。

しばらくそのまま居て——早瀬は不意に顔を上げた。

掛けられたタオルを一気に引つ張り、抜き取る。いささか乱暴に、顔を拭いた。

だけど。

だけどね。

私は、そんなちーちゃんのことも、巻き込んじやった。

私を叱りに来てくれたのに、私の代わりに戦ってくれたのに。

私は何にもしなくて、できなくて、もつともつと酷いことになっちゃった。

それなのに、私一人だけ、元気で、ピンピンしててっ。みんなが怪我して、苦しんじやってるのに、でもどうしたらいいかもわからなくて——！

零の首筋を目がけて唸る、伊達の手刀。

狙い違たがわず難いだ相手が残像だったと気がついた時には、既に伊達の左側へと零が回り込んでいた。

左拳をフェイントに、鋭い右の振り足が、伊達の脚を砕くべく襲い掛かる。

回避は不可能、と判断するや、黒い牙が突き立つ寸前に伊達が浮かせた片脚が、骨をも

砕くはずの衝撃をゼロに近いレベルまで軽減させ、さらにその威力を回転に変えて、ステップ一つでソバットを放った。

思わぬ反撃に追撃を封じられ、零は大きく斜め後方に跳んだ。

着地してさらに後退した零も、一回転して態勢を整えた伊達も、とうにその息は荒い。

実力伯仲、カクテルライトの下での試合を万人が願う二人の静かなる死闘にも、確実に終わりの時が近づいていた。

長い呼吸で、零が息を整える。

伊達も、深く吸った息を静かに吐き出して——吐き切らぬうちに、呼吸が止まった。

違和感。

そんな生易しいものではなかった。

数メートル前方、確かに零はそこに存在している。それなのに、伊達の極限まで研ぎ澄まされた感覚は、その存在が無い、あるいは限りなく希薄だと、そう伝えて来ていた。

零が、地を蹴った。

達人であればあるほど、無意識であっても、気配というものを利用する。音や空気の流れはもちろん、目の動き、筋肉への力の伝わり、技の起こり、それらを第六感にも近い感覚でも捉え、相手の動きを察し、見切り、対応する。

しかし、今の零の動きには、伊達をもってしてもそれらが何一つ捉えられなかった。

ゼロ——その名を持つ者が一足一刀の間合いに迫るまで反応すらできずに接近を許し、それでも伊達は、半歩下がって迎撃の態勢を取った。

カウンターのトラースキックを、これだけは零を捉え続ける視覚だけを頼りに放つ。  
瞬間、零の姿が消失した。

……ごめんね。

ごめんね、ちーちゃん。

だからもう、千里ちゃんは何も心配しないでいいんだよ。

私なんか、みんな失くしちゃった私なんか、どうなったっていいんだから。

私が悪いから。私がいみんな、終わらせてくるから。

だから——

伊達の顔が絶望の色を刷く前に、その身体は宙を舞っていた。

景色が——零の姿が、残像になる。

神速の回転からの、神速のバックナックル。伊達の蹴りを躲かわしつつ放たれた、攻防一体



の一撃。

とある絢爛豪華な一室で、艶やかな女性が長い黒髪をかきあげた。

「サイレントナツクル。——完成、ね」

届かないその声はもちろん、自分の身体が壁に激突して崩れ落ちることさえ、伊達が自らの思考で認識することはなかった。

さよなら。

今までずっと、ありがとう。ちーちゃん——。

メッセージを伝え終えた携帯電話を耳から離して、千里は終話ボタンを押した。無言のまま見つめた小さな機械が、待ち受け用の画面に戻る。

そのまま閉じようとした指が、メールが届いていることに気付いて止まった。

受信時刻は、つい先ほど。差出人は、伊達だった。

慣れた手つきで表示させた内容を、千里は目だけで追う。壁に掛けられた時計がたてる微かな音が、数回。

千里は——身を翻した。

「あの……、バカっ!!」

それは決して、早瀬を追ひ、その行く先を千里に伝えてくれた、伊達に対しての言葉では無かった。

## 3

テレビの天気予報が、今晚これからの雨を告げる中。

苛立たしげな呟きを発したのは、四人部屋の病室に置かれた窓際のベッドだった。

「何やってるのよ。連絡もくれないで……」

同じ苛立ちを電話でぶつけたのが、随分と昔のことに思える。

入院中はさすがに編みこんでいない長い金髪を指に絡ませながら、上半身を起こしたその女性は、ベッド脇の台に置いた携帯電話を見つめていた。

そちらに向かって手を伸ばして——途中で、引き戻す。

今日だけで十回は繰り返した行動。そんな自分にいい加減いやげ嫌気がさしたのか、

「ああもう、知らないわよ!」

と大きめの声で言い放つと、ベッドに沈み込んで、頭から布団をかぶってしまった。

なんやなんや真壁、と隣のベッドから飛んできた先輩の声に、何でもないわ、といつも  
の如くタメ口で答えてから、彼女はぽつりと呟いた。

「どこで何やってるのよ……。あの先輩は……」

先ほどと同じようで、少し違う言葉。

その違いを作り出したのは、別れ際に相手が見せた表情、その記憶だったかもしれない。

「あんな、あんな顔で、どこか行っちゃうなんて……許せるわけじゃないじゃない！ 早く、  
戻ってきなさいよねっ。みんな、待ってるんだから……！」

白いシャツが細い指にきつく掴まれ、微かな音を立てた。

ただ待つことに、早瀬が不安と焦燥を感じ始めてきた頃。

ホールと言っても良いほどに広い部屋の扉が、ノックも無しに開いた。

「お待たせしてしまっでごめんなさいね、早瀬さん」

丁寧な物言いとは裏腹に、遠慮のかけらも無くズカズカと広い空間へと踏み込んできた  
のは、京那だった。すぐ後ろには、零も付き従っている。

零は長衣こそ脱いでいたが、フィンガーグローブなどを付けた戦闘スタイルであること  
と、肌には浮かぶいくつかのアザが、早瀬の目を引いた。

だが、何よりも早瀬が気になったのは、京那の口調の方だった。

「お話があるとのことだったけれど、私の方もお話があるの。ついさつき出来た、と言ったほうが正確かしらね」

弾むような声は、あからさまな上機嫌、いや有頂天と言っても良いほどで、早瀬はこんな京那を見たことが無い。京那も、早瀬の怪訝そうな視線に気付いたのか、

「あなたには、感謝してるのよ」

含み笑いを見せてから、指を一つ鳴らした。どういう仕掛けか、部屋に置かれたテレビの電源が入り、無音の映像を映し出す。

木製のアンティーク椅子が、カーペットの上で音を立てた。

立ち上がった早瀬の目に映っているのは、零と伊達による死闘の、まさに最終局面。モニタ越しでも鳥肌が立ちそうな零のバックハンドブロー——サイレントナックルという名を早瀬は知らぬ——によって、無惨に葬られる伊達の姿だった。

口元を覆った早瀬の手が、小刻みに震える。

「伊達……さん……」

「まさか、あの伊達選手を連れてきてくれるとはね。望外だったわ」

開いた鉄扇で隠された京那の頬が笑みを形作っていることは、想像に難かたくなかった。

「国内——いえ、現役最強とも言えるストライカーを倒した零に、もはや敵はいない。あ

なたのおかげで、寿零というレスラーはついに完成したのよ。約束通り、あなたの団体にも多額の寄付をしてあげるわね」

早瀬を振り向かせたのは、約束通りという単語だったのかもしれない。

「私は……私が伊達さんを連れて来たわけじゃありません。それに約束は、零さんを倒せたなら、という話だったはずですよ」

「そんなの、言葉の綾よ」

京那は、片手で鉄扇を閉じた。

「誰であろうと、今の零を倒せるわけが無いでしょう？ 命すら懸けた真剣勝負の場で、この子をさらなる高みへと上らせる相手が欲しかったのよ。第一、本当に零が倒されちゃったら大変なことになっちゃうわ。このプロジェクトは元の木阿弥、水の泡。私もコレよ、コレ」

横に倒した鉄扇を、首の前で左右に振る。そんな心配も無くなったせいかな、その挙動すら楽しげだ。

「そうそう、あなたにも特別ボーナスを出すわね。望む望まざるに関わらず、伊達選手を連れて来てくれたのは間違いないあなただもの。後で口座番号を教えてください……」

「お金なんて、要りません」

はっとした表情で早瀬を見つめたのは、零だった。

京那の方は、どうせ気の迷いかポーズでしょ、としか思っていない顔つきで、

「あらあら、遠慮しなくていいのよ？ それとも、お金以外の物がいいのかしら？ 大抵の物なら相談に乗れると思うけど」

「……それなら、お願いがあります」

やっぱりね、としたり顔で頷いた京那だったが、

「私を——寿零と戦わせてください」

「はあ？」

今度は京那も、思わず口を開けた。

「戦わせてって、リングの上で？ まあ、そうね。零もあなたも復帰すれば、そのぐらいのカードは組んであげても」

「今ここで、です」

京那の眉が不機嫌に寄ったのは、自分の言葉を早瀬に遮られたことだけが理由ではなかった。

「あなた、何を言ってるの？ まさかと思うけど、あなたが零を倒すって言ってる？ あんな小団体でセミ前止まりのあなたが？ もしそうなら、悪いけど正気を疑うわ」

「そうです」

早瀬の肯定は、『もしそうなら』という部分への答えだった。

京那は、本当に正気を疑うかのような目を早瀬に向けた。

それから手にした鉄扇を軽く弾くと、唐突に失笑した。

「やれやれ、本当によくわからない人ね。素直にお金だけもらっておけばいいものを。いわ、これも特別ボーナスのうち。——零。ダメージは残ってないわね？」

顔だけを振り向けた京那に、零は頷いた。ダメージがあっても頷きそうな性格ではあるが、京那の見立てでも大した怪我は無く、スタミナも回復している。

「早瀬さん、それではお望み通りにどうぞ。零は、優しく遊んであげなさい」

双方に声を掛けてから、京那は大きく一步下がった。

その顔を、風がかすめる。

焦って視線を飛ばした京那の眼前、一瞬で零との距離を縮めた早瀬が、先手を取っていた。京那の慧眼けいがんでさえ捉えそこなう動きから放たれた掌底は、零のスウエーで空を切ったが、

「お金のため、じゃ……なかった、の？」

「いいえ。お金のためですよ」

答えた早瀬を見つめる零の目にも声にも、嘲りや余裕は無い。

完璧に避けたはずの早瀬の掌底は、零の前髪を数本持つていったのだ。

「でも、でもね。どうしてお金なんか、あんなものが欲しかったのか……あなたたちに

は、わからないでしょうね！」

早瀬の流れるような追い突きからの前蹴りを、後ろにそして横に躲して、

「そうだ……ね」

零は、素早いバックステップで間合いを広げた。

「あなたにも……私のことはわからない、ようにね……」

アップライト気味の構えを取った零を目がけて、早瀬は悲痛にも聞こえる気合いとともに飛び込んでいった。

「へっ？ 早瀬さんなら、無事に決まってるじゃないっすか」

真田は、柳生に向けた目を丸くして言った。

エコー検査を終えて CT検査を待つ間の控室。検査着に身を包んだ柳生と真田は、他に誰もいない部屋で、隣り合って腰を降ろしている。

「怪我らしい怪我もなかったって千里さんも言ってたし。今は、ロビーかジムで自分らを待っていてますって」

「怪我が無ければ無事、というものでもあるまい」

「……それって、あの、ままま、まさかっ!? か、監禁された早瀬さんが、男たちからあ



んなことやこんなことを……!?!」

「違うっ」

ここ数日で知った、真田の意外に豊かで突拍子の無い想像力。それがこんなところで発露したことに、柳生は苦虫を噛み潰した。

「捕まっていたことが問題ではない。私たちがこうなってしまったことが問題なのだ」

「こうなってるって……自分らも、怪我らしい怪我は無かったわけで」

「だから、怪我の問題では無いと言っている」

柳生は溜め息をついた。

真田の物わかりの悪さというより、早瀬のことを慮おもんばかつてのものだった。

「私たちは、彼女の事情を知った。そして、零の襲撃を受けた。実際の因果関係はどうあれ、彼女がそれをどう思うか、ということだ」

「……秘密を知ってしまったあなたたちが悪いのよ、オーホホホッ——なんて言う人じや、まあ無いっスねえ」

「彼女は——優しすぎるのだろう」

柳生は、もう一度溜め息をついた。

そうだ。そうなのだ。

全てを受け入れるにも、撥はねつけるにも、知らぬふりをするにも。

そのどれを選ぶにも、早瀬は優しすぎたのだ。

「だから、苦しんでしまうことになる」

柳生は、細く鋭い目を閉じた。まぶたの裏に、早瀬の微笑みが浮かんでいた。

「それも、一人きりでな」

ほんの少し前、別の病院で一人の女性が想い浮かべたのと、同じ表情。

それは、あまりにあえかな微笑みだった。

数えて三発めとなる早瀬の中段蹴り。

それらは全て零に防御させることを真の目的としていたが、零は二発めでその目的までも見切っていた。

避けも受けもせず、鋭く踏み込んでのボディブロー。みぞおちを抉る黒い拳に、早瀬もたまらず顎が出た。

「く、うっ！」

すぐさま態勢を整えようとするが、下がる早瀬よりも伸びた零の右腕が速かった。

とっさにカバーした腕も間に合わずに喉元を掴まれ、そのまま左手までも加えられ、宙に吊り上げられる。

腕が伸び切った完璧なネックハンギングツリー——何という零の腕力か。

早瀬は手足を零に打ち付けるが、ビクともしない。宙吊りの状態では威力が出ない上、頸動脈を極められた身体からは急速に力が失われていってしまうのだ。

「勝負あった、ね。でも、大したものだったわよ、早瀬さん」

京那の宣言には、掛け値なしの賞賛が込められていた。

「これなら最初から、あなたを零にぶつけておけば良かったわ。リングでの戦績だけで実力は判断できない……良い教訓ね。まさに鬼気迫る、本当に素晴らしい闘いだっただもの」

京那の手放しの褒め言葉に、早瀬も満足——するわけがない。

薄れゆく意識を必死に繋ぎとめて、首を振り、腕を掴み、身体を蹴って、抗う。

うつすらと開かれたその目の端からは、一筋の涙が零れ落ちた。

「でも、そんなあなたですら、零には遠く及ばなかった。そうよね、早瀬さん？」

早瀬に呼びかけたようでいて、京那はもはや彼女など見てはいなかった。

窓の外、雨に煙る下界の明かりに向けて、手を広げる。

「わかる？ 零はね、もう世界を狙うどころじゃないの。世界を獲り、頂点に君臨できるだけの力を手に入れたのよ。この寿京那のプロジェクトのおかげでね！」

高揚とした彼女の、それは演説だった。

「ストライカー？ グラップラー？ そんなの、もう関係ないわ。今の零は、プロレス史

上、最高の作品。かつて女神とまで呼ばれた選手たちと同じ——いえ、彼女たちをも超える存在になったんですもの！」

——何か、立て続けに二つ、風を切った。

恍惚に酔った京那は気づかない。零だけが、自分を狙ったと思しきそれらが大きく逸れ、壁を叩いたことに気づいた。

床に落ちて転がったのが、青と赤の飾り石だと知った瞬間。頭上に何かの影が落ちたのを感じて——

盛大に陶器の割れる音が、すぐ近くから鼓膜を突き抜けた。

「きゃあっ!!」

京那が思わず前につんのめったのも、無理はない。

彼女の真後ろで弾けた鋭い破砕音は、さすがに京那を陶酔から一気に引き戻し、現実を振り向かせた。

飛び退った零と、振り落とされるように解放されて床で咳き込む早瀬の姿も視界に入ったが、京那が注目したのは、廊下にあったはずの大きな壺が床に晒さらした無惨な姿だった。

「な、何よ!? 何で、こんなものが!! 危ないじゃないの!!」

「すみません」

京那の視線が、開いたままの扉の向こうへと動いた。零も同じく。

最後に早瀬が、二人の視線の先を見つめた。

月など——どこにも出てはいない。

それなのに、床に座りこんだ早瀬の瞳には、夜を照らす月の姿が映っていた。蒼く揺れる光の中でたたずむ、長いポニーテールを靡なびかせた、一人の少女の姿とともに。

「コントロールが、悪いもので」

桜井千里。

早瀬葵にとって、ただ一人の天使が、そこにいた。

4

「……次から次へと、千客万来な夜だこと」

戸口に立つ千里に向けた京那の声は、すでに余裕を取り戻していた。

「早瀬さんが来たかと思えば、お次は伊達選手。まあ、どちらも零が片付けてくれたわけだけだ」

伊達の名前に、千里は微かな反応を見せて——それでも何も言わなかった。代わりに、左足を半歩だけ前へと滑らせる。

「さらにあなたまで登場するとはね。アンコールの声も、ほどほどにしてもらいたいものだわ」

京那は、鉄扇を左手に移した。空いた右手が、優雅な動きで腰の後ろへと回される。

「舞台の幕は——もうとつくに降りているのよ！」

引き抜かれた右手から、四筋の銀閃が飛んだ。

投剣か投げ矢かの如く放たれた閉じた鉄扇は、四本のそれぞれがすり抜けられない絶妙な間隔を保ちつつ、風を切り裂いて千里を襲った。

千里は——前に出た。

胸前に飛来した一本を捕捉、手の甲で叩き落とすと、強引に作った空間を縫って一直線に京那に迫った。それを見て、京那の顔が歪む。

笑いの形に。

彼女から見て斜め前方、千里の横合いから追いついた黒い影は、零だ。千里が気付く

も、既に遅い。

高速移動の中で交錯した、二つの身体。鈍い音を立てて、片方が大きく吹き飛んだ。

京那の得意げな笑みが、見る見るうちに侮蔑のそれへと変わり——立ったまま残った人影を確認した瞬間、驚愕へとリセットされた。

残ったのは、千里。壁際まで床を転がったのが、零の方だった。

「千里……ちゃん？」

床にへたり込んだままの早瀬の顔にも瞳にも、信じられないという感情が揺れている。

千里は一瞥で京那を後ろに下らせると、半ば惚けた早瀬の元へと踵かかとを返した。

「千里ちゃん……私、あの……」

「早瀬さん」

うわ言のような早瀬の呟きは無視して、千里は早瀬の前で歩みを止めた。

「どういたしました」

えっ、と早瀬が返す間も無く、千里が動いて——

早瀬の目の裏で、星が散った。

——頭を、げんこつで、殴られた。子供を叱るみたいに、上から、グーで——

星の世界で何とかそこまで理解し終えた時には、

「い……痛いあい！ 千里ちゃん、何するの！ なんで、いきなり、殴るって!？」

とつても痛かったらしい。

目から星と一緒に涙の粒まで出して、頭を押さえた早瀬が、大声でわめいた。

千里はすでに背を向けていたが、早瀬の抗議の声と視線を受けて、肩越しに振り返った。  
一言。

「バカですか、早瀬さんは？」

さすがの早瀬も、我を忘れた。

「ば、バカって、千里ちゃん！ いや、私、バカかもしれないけど！ だって意味わかんないし！ さっきの言葉の意味も！ 行動と全然合っていないじゃないの！」

「あなたが、さっき言ったからです」

千里はもう、こちらを向いてはいなかった。

「……私への言葉ではなかったのかもしれませんが。でも私は、私への言葉だと受け取りました。だから、私は——」

もう一度、千里は顔だけを振り向けた。

「私は、思った通りにやっただけです」

こちらを向いた横顔は、どう見ても不機嫌極まりなかった。

なのに。

「ただしです。私は天使なんかじゃありませんよ？ 私に言わせれば、それは早瀬さんの



……それをあなたは、軽蔑だとかさよならだとかつ。まったく人の気も知らないで——つ  
 それなのに、必死に照れ隠ししているだけなのだと、わかってしまった。

早瀬には、早瀬だけには、わかってしまうのだ。

千里の強さも、時にはそう見えて強がっているだけの彼女の弱さも、優しさも。そして  
 何より、けっこう素直じゃないところも。

そう——そんなところだけはとてもよく似ている、『二人』だったから。

「ち——……ちゃん……」

「……お話はまだ続くのかしら。仲良しさんたち？」

苛立った横槍が、早瀬と千里を同じ方向へと振り向かせた。

こちらは早瀬にも不機嫌そのものとしか見えない顔で、京那が腕を組んでいる。

「仲良しというより、勇敢なナイトとお姫様ね。さっきのまぐれには驚いたけど、きつと  
 あれも早瀬さんを守りたいという一心から。そう、さしずめ——」

千里の眉が、ぴくりと震えた。気づかずに京那が続ける。

「守るものがあるから強くなれた、といったところかしら？」

この時の千里の表情こそ、見ものだった。

「守るものが、あるから——？」

呟いた千里の纏った不穏極まりない空気に、彼女の『一番嫌いな弱い考え方』という言

葉を思い出した早瀬は戦慄した——はずが、なぜか思わず嘔き出してしまった。京那は京那で、

「な、なにか気に障ることを言ったかしら。だったら、その、ごめんなさいね」  
 思わず鉄扇を広げて、隠れるように身を引いていた。

「と、ともかく、千里さんは何の用なの？ 早瀬さんを助けに来たのなら、そのまま連れ帰っていいわよ。私たちは、これ以上何もしないから」

「……ありがたい申し出ですね。ですが」

「ですが？」

「それでは、駄目ですね」

「駄目ですって？」

眉をひそめた京那は、千里が早瀬のミッション達成を知らないことに気付いた。であれば、と経緯を説明してあげようとして、

「零を倒せる人を連れてくれば、早瀬さんの団体に多額の寄付をすること」

いきなり指を折り始めた千里に、先を越されてしまった。

「そ、そうだったわね。だけど、その話はもう」

「さらに、柳生さんたちの団体や、先生——伊達さんにも、十分な補償と謝罪をすること」  
 挟んだ言葉を無視されて、京那の不機嫌は一気に頂点に達した。

千里は我関せずの様子で、指の数を加える。

「さらに、もう一つ。寿零を、解放すること」

驚きの気配が、たちまち部屋を満たした。

早瀬と、京那と、すでに立ち上がって成り行きを見つめる零が、その出どころだった。

「これらの条件は、一度きりにかまいません」

驚きが生んだ沈黙の中で、千里は一人、言葉を続けた。

「私が今この場で、零を倒せた場合のみ。それで、いかがでしょうか」

京那に向けたその表情は、声と同じで、何の気負いも無く澄み切っていた。

「いかがでしょうか、ですって……っ？」

京那の全身は、はた目にもわかる怒りに震えていた。

「勝手に増やした条件で、零と戦わせる？ おまけに、今ここで倒してみせる？ 一回の

まぐれで、随分と調子に乗ったものね。そんな冗談……」

搾り出す声までも震え、手にした鉄扇がきつく握り締められる。

そして——高らかに響きわたったのは、哄笑。京那は、お腹を抱えて笑い出した。

「あははは！ 面白いじゃない、なによそれ！ この前あんな負け方しておいて、何様の

つもりよ！ 早瀬さんにも呆れたけど、上には上がいるってこと？ 身の程知らずもここまで来るとあっぱれね——ああ、おかしい！」

怒りではなく笑いをこらえていたのだと知って、早瀬は啞然とした。

千里は、表情を変えていない。

零もまた、無表情のまま京那の笑い声を聞いていたが、

「零、今のダメージは？」

いきなり真顔で振られて、戸惑いの色を見せた。既にチェックは終えていたが、改めて四肢を軽く動かしてから、

「問題ない……よ」

「油断は二度と許さないわ。連戦よ。全力を出せるのね？」

「う、ん」

「いいでしょう」

京那は鉄扇をぱちりと鳴らした。つかつかと部屋を横切ると、逃げ道を封じるかのよう  
に戸口近くで振り向いた。真つ直ぐに腕を伸ばし、千里に向けて鉄扇を突きつける。

「挑戦権をあげるわ、千里さん。ただし、それだけ条件を加えた以上、賭け金も高くさせ  
てもらおうわよ。せいぜい後悔するといいわ」

突きつけた鉄扇を、京那はゆっくりと頭上へと持ち上げていった。

それを合図に、大気もまたゆっくりと凝結していく。

零は、オーソドックス・スタイルに。

千里は、真半身に。

初邂逅——かいこうジムで対決した時と、同じだ。

あれからまだ、幾ばくも月日は経っていない。ゆえにおそらくは結果もまた、同じにしかならないはずだった。

あの時の結末を思い出して、早瀬は叫んだ。

「千里ちゃん！」

「零」

千里は応えず、絶妙に被せられた京那の呼びかけの方に、わずかに零が目線を向けた。

「くだらない条件に惑わされてはだめよ、零。本気で……いいえ」

天井のシャンデリアを指した鉄扇に、力が籠もる。

撃発の時が、近づいていた。

「殺す気で、やりなさい」

京那の腕が、合図と化して振り下ろされた。

黒いつむじ風が走る。

飛び出したのは、零だった。

戦いが始まれば、相手が誰かも、抱えている想いも、全て消えてしまう。数メートルの間合いを瞬時に削って、ただ自分が倒すべき敵の前に迫る。

いや——今回だけは、殺すべき敵の前に。

蹴りの間合いに踏み込む直前で、さらに地を蹴って加速した。避けようも無い距離から、一直線に漆黒の矢を放つ。

風を従えた右の拳が千里に届き、鈍く重い衝撃が伝わった。

拳ではなく、自らの頭蓋から。

「なっ……っ！」

それは京那か、あるいは零自身の驚愕か。

思わずバックステップを使った零の前で、彼女の初撃にいと容易くカウンターの掌底を合わせた千里は、元の位置で構えたままだ。

正確には構えも足の配置もわずかに変わっていたが、いずれにせよ追撃の意志は見せてこない。

「やる……っね」

零は小刻みに身体を揺らし始めた。

軽くステップを踏んで、再び懐に——互いの死地へと飛び込む。

刹那の間に、左右合わせて拳を五撃、いや、六撃。

人間離れた速度の連打でも、その一発一発が必殺の威力を秘めることには変わりない。喰らえばもちろん、ガードしただけでも吹き飛び、あるいは動きが止まって、零の繰り出す拳の暴風に晒されることになる。

それら機関銃のごとき猛攻を——全て千里はかわ躲し切っていた。

「馬鹿な!？」

今度こそはつきりと京那が上げた叫びに、零も動いた。

左右に足を使い、フェイントを織り交ぜ、まずは軽い一発を当てる——と見せかけて踏み込み、大気すら揺るがすブローを、至近距離から千里の右脇腹へと送り込んだ。

それを、跳ね上がった左膝が斜め下から弾くとは。

なおも突進を試みた拳は、しかし反転した身体に巻き込まれて殺傷力を失った。対して零を襲ったのは、回転した千里の返刃——後ろ回し蹴り。

唸り上げての大技はさすがに残した腕のガードで防がれるが、その威力に顔をしかめた零は反撃を断念、後退を余儀なくされた。

「何よ……あの娘。どういうこと？ いったい、何が……っ」

手にした鉄扇が落下していくことにも気付かず、京那は虚ろに呟いた。

この短期間で柳生たちから何を学んだというのか。千里の動きは、かつて零に敗れ去った時とは全くの別物だった。

しかし、京那を真に驚かせたのはその点ですらない。

所詮、千里は素人だ。その急成長を鑑みてもなお、パワーもスピードもテクニクも、場数や駆け引きまでも、零の方が圧倒的に上回っている。

この場の戦いを見た上でも、間違いなくそうだとと言える自信と確信が、京那にはあった。「なの……なぜよ？　なぜ、零の攻撃が当たらないの？　見切れるはずは無い……そんなスピードじゃないはずよ。それを……」

「見切れないなら、読み切るまでです」

千里の静かな声は、その何倍もの衝撃を持って京那の鼓膜を震わせた。

弾かれたように目を剥いた京那の前で、こちらに背を向けた千里が、零と対峙している。「読む、ですって？　どこの超能力者よ……ありえないわ……！」

「読めます」

その言葉を置き去りに、千里は横へ跳んだ。

もといた場所を、質量すら持った風が吹き荒れた。放った蹴りの威力をそのまま推進力に換えて、零が千里に迫いする。



決して逃さぬと語る零の瞳が、千里の再跳躍を止めたのか。千里の視界一杯に、空間を引き裂く凄まじい拳が広がった。

そのまま——出る。

突き出される拳のさらに奥へと上体ごとねじ込んで、恐るべき風鳴りを頭上に感じつつ、千里の脚が垂直に跳ね上がった。

下から上へと走った雷光は咄嗟ととさに避けた顎を外れ、灼熱の摩擦を零の頬に感じさせた。零と千里、二人の視線が上下に交差し、千里の唇が動く。

「前の闘いで、わかったんです。あなたの技は——ただ相手を倒すためのものだから」  
零は気圧されたように退がった。さらに一度の跳躍で、距離を伸ばす。

その眼前へと、夢幻の如くに迫った千里の足捌き。

思わず放った左ジャブは威力無くガードされ、それでも斜め上へと千里が跳ね上げた変形のみドルキックを余裕で避けきって、零は好機と前に出る。

「——今までの私と、同じだから!!」

避けたはずの蹴りが一瞬で跳ね戻って、今度こそ零を、そのこめかみを打ち抜いた。

大きくよろめいた零よりも、その掛け蹴りの見事さに、早瀬だけでなく京那までもが目を奪われる。

「あなたたちには、感謝しています！」

ここを先途と決めたか、千里が一気に攻めに出る。

迎え撃つ零の目も、死んではいけない。

ノーモーションから、まさかの浴びせ蹴り——読めるはずもない大技が千里を急襲した。死神の鎌を地を這うようにして躲し、身体の流れるままに千里は斜め前方へと跳んで、手をつけて前転した。

間合いが開いたことを感じ取りつつ、零も自らの技に受身をとって、仕切り直しと構えを取った。

よもや、千里が地を蹴って瞬時に跳ね戻ってこようとは——！

「ただ強くなるだけでは、強くはなれない——それを教えてくれたっ！」

風を切る膝蹴りは、先生と呼ぶ伊達遥の教えか、あるいはこれも独学か。

強烈な閃光の槍を、回避もガードも間に合わず顔面に受けて、零は仰け反りながら宙を飛んだ。

自ら飛んで威力を殺していたのか、すぐさま起き上がったのはさすがの一言だが、その表情と呼吸に余裕は一片も無い。

京那にとっては、出来損ないの悪夢としか思えない光景だった。

「何を……何をしているの、零!？」

長い黒髪を掻きむしらるばかりに、京那が叱咤を飛ばした。

「負けなんて許されないのよ!? 相手は素人同然——打撃にこだわる必要だってない! いいからさっさと勝ちなさい!」

京那の指令は絶対なのか。零は強引に呼吸を整えると、空気が悲鳴を上げる速度で再び打って出た。千里も応じて前に滑る。

ぎりぎりのアウトレンジから零が放った砲撃の如きワンツを横に躲して、千里は続く零の下段蹴りまでも読み切った。戻り際に中段蹴りを合わそうとして、

「だめっ!」

唐突に届いた声と千里の直感は同時だった。

一瞬、いや半瞬の停滞の間に零は全身を沈ませ、這うほどに低く飛び込んでいた。

誘ったミドルこそ来なかったが、結果は変わらない。

軸をずらして肘も膝も届かぬ位置から伸ばされた腕が、奈落へと千里を引き摺りこむべくその脚を刈って——

「今っ!」

鋭い指示が飛んだ矢先に、零の運命は暗転した。

退がった脚を追った身体に上から圧力が掛かり、タックルを切られたと悟った瞬間、床に落ちた顎に重い鈍なだの一撃が炸裂した。

錐揉み状態で低空を飛び、受身もとれず床で数回転した零は、横倒しの状態でようやく

止まった。

千里は、蹴り足を戻しても警戒の構えは解かず、息を一つ吐いた。零を見据えたまま、握った右腕を軽く上げる。

その意味を悟って、後方に立つ早瀬も、右手を上げて応えた。

零のタックルをいち早く察したのも、そのタイミングを計ったのも、対処する術を教え込んでくれたのも。

早瀬が自分を助けてくれたと、千里にはわかっていたのだった。

「う……くう……」

寿零は、まだ戦おうとしていた。

両手を床につき、揺れる景色の中でどこまでも沈んでいきそうな身体を必死に支える。

茫然自失にあるのだろう、京那からは何の声も掛からない。それでも彼女は、諦めるわけにはいかないのだった。

「終われない——まだ、負けられない。違いますか？」

心を読まれた気がして、零は四つん這いの体勢から顔を上げた。

「寿、零。あなたが懸けたものは、この程度なんですか？」

挑発だ。

他に聞こえようもない言葉は、なのになぜか、まるでエールのように零の胸を打った。倒れているとささやく身体をねじ伏せ、必死の形相で膝を持ち上げる零に、千里は言葉が続けた。

「あなたにはまだ……守るべきものが、あるんじゃないですか？」

マモルベキ……モノ？

マモリタイ……モノ。

マモラナケレバナライ……モノ——！！

咆哮が——押し殺されていた心が、天を突いた。

凄まじい衝撃波が幾重にも弾け、闇空に浮かぶ部屋が軋み、京那を我に返らせ、早瀬をたじろがせた。

「私、は！ 負けられない、んだっ！！」

屹立して叫ぶ零を中心に、荒れ狂う暴風。

その中で、千里は立っていた。ただ静かに零だけを見つめ、その叫びを耳にして。

「千歌、お姉さま！ 小鳩、ちゃん！ 私が……私が、守るんだ——からっ！！」

魂をつんざく絶叫——その終わりは、突然だった。

突如として舞い降りた、静寂。零の顔が、ゆらり、と正面に戻った。

むしろ隙だらけとさえ見える自然体なのに、それを見た早瀬の心臓は凍りついた。殺気や闘気によるものではなく、それらが全く感じ取れない、鮮烈なまでの違和感。

同じものを先刻に伊達が感じたとは知らず、しかし視界の端で急速に確信の笑みを取り戻しつつある京那と相まって、早瀬は血がざわめくような不安に襲われ――

「――早瀬さん」

心が、優しく包み込まれた。

明鏡にて止水、でもどこかほんのりと暖かい、千里の声。

「早瀬さんが……教えてくれたんです。私が本当に欲しかった強さが、何なのかを」  
零が、動いた。

千里に何の反応も許さないまま、急速に二人の距離が集束していく。

伊達と同じ運命を、千里もまた辿るのか。

「技も力も、全ては――」

静かな声がぶつかる前に、零の姿が消えた。

まさに神速にして幻妖の拳――サイレントナックルが、為す術なく立ち尽くす千里の側面に、唸りを上げて叩き込まれる。

神速の竜巻に――亀裂が疾った。

下段から跳ね上がった稲妻が、その光さえ置き去りにして、零の側頭部へと吸い込まれ

ていた。

あの時。斬馬迅を糸口に生み出され、世界で柳生美冬だけが目にした、知覚すらも及ばぬ千里のハイキック。

見開かれたまま時を止めた早瀬の瞳の中で、零が力なく崩れ落ちていく。全ての操り糸が切れた、マリオネットのように。

「全ては——誰かの心に届いて、初めて輝くものなのだと」

——お姉ちゃんは、ひとりぼっちなんかじゃないよ——

あの雨の日の、淡い微笑み。

そのまぼろしの向こうで、肩越しに振り返った、瞳。

彼女の知る限りこの世で最も美しく輝くその瞳が、早瀬を見つめてくれていた。

「嘘でしょ……そんな。零……が……？」

よろめいた京那を支えるものは、もう何もなかった。

「この私の……作品が。こんな、簡単に……？」

終わってしまった、何もかも。

腰が落ち、幼女のように床に座り込む。両脇についたその右手の先が、何か硬い物に触れた。

——いいえ、まだよ。

どこかで誰かが、そう言った気がした。

握った鉄扇とともに——暗い影が立ち上がる。親指が小さく動くと、閉じた鉄扇に仕込まれた鋭い刃がせり出した。

声の主は、まだ全てを無かったことにしてしまえりとも思っただろうか。

黒い情念が揺れる瞳は、無防備な早瀬の背を映し出していた。

早瀬にも千里にも気付かれないまま、ゆっくりとその手が振りかぶられる。

忠実なる死の使いが、今——解き放たれた。

天井へ。

仰向けに倒れる投擲者の視界の中で、狙いを外れてシャンデリアの腕木に当たった鉄扇が、同じ軌跡で跳ね戻ってくる。

京那の呼吸が止まり、輝く刃が視界に広がった瞬間、鼓動までも止まった。

恐怖が臨界を超えたのと、床に落ちた後頭部の、どちらが早かったのか。それは誰にもわからず、ともかく京那は、泡を吹いて失神した。



「……危機、一髪……」

ほっとした声は、早瀬と京那、どちらの危機に対してのものか。

部屋に飛び込むや水面蹴りで京那の足を刈って倒し、その京那に牙を剥いた鉄扇を空中で掴み取った女性は、

「先生！」

「伊達さん!? 大丈夫なんですか？」

千里と早瀬からの驚きと喜びの声に、照れた微笑みで肩をすくめた。

「……鍛えてるから。……それに……」

伊達ははにかんだまま、視線を移した。千里と早瀬も、後に続く。

「……最後の最後で、力を抜いてくれたんだと、思う……」

三つの視線が合わさった先には、意識を失った零の姿があった。

死力を尽くした戦いに敗れ、無念に満ちているはずの横顔。それは今、穏やかに微笑んでいた。

まるで、楽しい夢を見ている子供のように。

激しかった外の雨は、いつの間にか降り止んでいた。



## エピローグ 太陽が似合うよ

## 1

まばゆいばかりの日差しが町を包み込んだ、その日。

町外れの一角に居を構えるジムには、しばらくぶりの喧騒が戻ってきていた。

「それじゃ、京那の奴はめでたくお役御免になったんすね!？」

タオルと一緒に先輩が渡した話を、真田は明るい表情で受け取った。後輩の練習生と並んでサンドバッグ相手に散らせていた汗を、元気一杯に拭い取る。

「うむ。京那がというより、プロジェクト自体を打ち切るということらしいがな」

柳生は、真田に頷いて見せてから、隣の練習生に最後のタオルを渡した。

まだリハビリとしてではあるが、入院していた練習生たちは、今日から揃ってトレーニングに復帰している。

あんな目に遭いながら、彼女たちは一人も欠けることなく、笑顔で戻ってきてくれた。喜ばしいその事実と、真田に伝える話の内容が、時代がかった柳生の言葉にも、いつに

なく弾んだ調子を与えていた。

「京那の過激なやり口には、内部でも相当に批判が出ていたようだ。加えて、本家を本家とも思わぬ扱いをする分家たちに不満を持つ者も多く、それらが、京那の失敗で一氣に噴出したのだ。——と、あの御仁ごじんは言っていたよ」

つい先ほどまで話していた人物の、丁重かつ礼を尽くした態度に、柳生は好感を持っていった。

寿家の執事長と名乗ったその老人は、謝罪と今後の補償、そしてなにより感謝の意を伝えなければという次期当主たる女性の命で、本家から遣わされて来たのだった。

「次期当主というのは、零の義理の姉にあたる女性だな。これは友人からも聞いていた話だが、京那は零を従わせるために、零のタッグパートナーでもある親友とその次期当主の二人を、半ば軟禁状態に置いていたらしい。プロジェクトに反対および妨害した、との理由でだ」

「じ、次期当主を軟禁って……まあ、あの女らしいっすけど……」

絶句の中にも苦笑を見せる真田。柳生も釣られて苦笑を返した。

「まったくくだな。その発想と、それだけやっても反対派を抑えていた手腕は、大したものだと言えなくもないが……」

苦笑を限界まで深めてから、ふと何かを思い出したかのように、柳生はその笑みを仕舞

い込んだ。

「実のところ私は、京那の考えに共感できる部分もあると思っっている」

「せ、先輩!？」

「無論、やり方は決して許せるものではない。ただな、一時期の勢いを失った今のプロレス界には、絶対的なエースこそ必要だ、という点だけは、理解できなくもないのだよ」

「柳生先輩……」

尊敬する先輩の名を、感慨深げに呟いた真田は、

「それはちよつと違うんじゃないスカね？」

と、あっさりばつさり切り落として、柳生の精悍な顔を珍妙にしかめさせた。

「ほ、ほお。それは、どういう……」

「だって、そんなもん、一人だけいたって意味ないじゃないスカ」

何を当たり前などでも言いたげに、真田はきよとんとした目で柳生を見つめた。

「プロレスは、技を受けてくれる相手がいてこそですもん。一人じゃ駄目駄目に決まってるっすよ」

何気ない言葉に胸をつかれて、柳生は真田を見やった。

特に考えなしとも見える後輩と向かい合ったその表情に、苦笑が呼び戻されてくる。

「そうだな。お前の言う通りだ」

光に満ちた窓の外を見上げる。

「一人では、意味が無いな」

高く澄んだ青色の中に溶けて、苦笑は穏やかな笑顔に変わった。

## 2

防波堤沿いの道を、潮の香りをまとわせた白い風が流れていく。

後ろに靡いた髪を少し気にしながら、千里は携帯電話に届いたメールを読み終えた。

「伊達さん、なんて？」

腰まである防波堤に両手をついて待っていてくれていた早瀬の声に、自分もその隣へと足を進めていく。

「今から復帰会見だそうです。人前で話すのなんてイヤなのに、とか、今すぐ逃げたい、とか書かれてました」

「あはは。伊達さんほどの人だと、そういうのあるから大変よねー」

「あと、誰と戦ってみたいかという質問があるから、早瀬さんの名前を出すね、ともありませんよ」

「うっ」

いきなりの名指しにプレッシャーを感じたのか、海を眺める早瀬の笑顔が引きつった。そ知らぬ体で千里も防波堤に手をかけて、その向こうに輝く蒼い海を見つめた。

しばしの間、小さく打ちよせる波の音に二人で身を任せていると、会話は自然と先ほどまでの続きへと巻き戻っていく。

「それで、早瀬さんの団体は大丈夫なんですね？」

「うん」

一つ頷いてから、早瀬はくるりと反転した。

海原に背を向けてコンクリートに寄りかかると、ちょうど吹いた海風が、二つに束ねた長い髪を前へとたなびかせた。

「那月ちゃんがね、連絡くれたの。京那が——っていうより寿家が、約束を守ってくれたみたい。お金の心配も無くなったし、入院してたみんなももうすぐ全員戻ってこれるって。興行が再開できる日も近いんじゃないかな」

「それは、なによりですね」

「うん、これも千里ちゃんのおかげだよ。ありがと。あの零さんに勝てるなんて、正直信じられなかったもん」

「私一人の力ではありません。皆さんがいてくれたからですよ。それに、零はあの時

……」

「あの時？」

「……いえ。勝ったのは、当然の結果です。結局、守るものという弱さを持っていたあの  
人に、私が負けるわけがないんです」

「うわぁ……」

本当に当然だと思っっている、少なくともそう聞こえる千里の声に、早瀬は頭上の青空を  
仰いだ。

どこまでが本気でどこまでが冗談か、やっぱり千里は奥が深すぎて、よくわからない。  
遙か蒼穹に浮かんだ、一筋の飛行機雲の跡を追いかけて、

「ねえ。私、何か教えたかなあ？」

唐突な問いに顔を向けた千里の前で、早瀬は天を見上げたまま、続きを口にした。

「あの時、私が教えたって言うてくれたよね。本当の強さが何なのか……って。でも、私  
が教えたのは防御の技ぐらいで、そんなの、何も……」

「早瀬さん」

「はい？」

「本当に、バカなんですわね」

「ふえっ!？」

白黒させた目を下界に戻した早瀬の隣に、もう千里はいなかった。



すたすたとアスファルトを遠ざかる千里の背を、慌てて早瀬が追いかける。

「待って！ 千里ちゃん、待ってってば！」

と言ってみたところ、千里は素直に足を止めた。目線は向こうに、背はこちらに向けたままで、

「早瀬さんは、これからどうするんですか？」

「え？ どうする……って？」

「団体のことは解決したわけです。早瀬さんは、どうするんですか？」

「そ、それはもちろん、団体に戻って……」

団体に戻って、ブランクを取り戻して、リングに復帰する。そう告げようとした寸前で口をつぐむと、早瀬は一度、深く息を吸った。

「——あのね。謝ろうと、思ってるの」

再び開いた口からは、ずっと前から考えていたことが、すんなりと出てきてくれた。

「みんなに、全部話して、謝るの。許してくれないかもしれないけど、許してくれるまで謝って。もしも許してくれたら、また一緒にやっていきたいって思ってるんだ」

失くしたものは、還ってこないのかもしれない。

けれど、新しいものを手に入れることはできる。

信頼も。友情も。そして――

「そうですか」

千里はもう一度、海を見ていた。

そよ風が髪に触れるたびに、きらきらと光り輝く小さな波。

それを眩しげに見つめていた切れ長の瞳が、静かに閉じられていく。

「……プロレスラーには、今からでもなれますか？」

早瀬の目が、大きく見開かれた。驚きと、そしてもう一つの感情で。

「う、うん！ もちろん！ 千里ちゃんなら、私――」

弾ませた早瀬の胸と言葉に、不意に別の感情、あるいは理性が割り込んだ。

「どこの団体だつて一発合格だと思っ！ 新女でも、WARSでも、伊達さんのところや柳生さんのところだつて、きっと引く手あまたの大歓迎だよ！」

「……早瀬さん」

「は、はい？」

「本っ当に、バカなんですかつ？」

「あ、あううう……」

今度は、早瀬にもよくわかっていた。胸の前で指を合わせて、小さく縮こまる。

「でも……でもね。千里ちゃん……いいの？　うちの団体、小さいし、お給料も安いんだよ？　千里ちゃんのこと考えたら、私はやっぱり……」

「ひよつとして、迷惑、ですか？」

「ち、違うよ！　千里ちゃんが来てくれたら、みんなもきつと喜んでくれるけど！　第一、私が一番うれしいもん！」

「無理にフォローをする必要は、ありませんよ。私は、自分が他人に好かれる人間だとは思っていませんから……」

「そんなことないっ!!」

怒りにも似た激しい感情が、千里の耳を打った。

はっと目を開いてこちらを向いた千里の顔を、早瀬の瞳がくつきりと映し出している。

「そんなこと……ないからね」

鬩かりのない瞳で真っ直ぐに見つめられて、千里はほんの少しだけ視線を逸らした。

「あ、ありがとうございます。その——うれしい、です。それから……」

出会った日の朝と同じように。千里の頬はほんのりと紅く染まり、気付いた早瀬の表情を、微笑みへと和らげた。

「……それから？」

「私も、その……早瀬さんと一緒に……いいかな、と。だ、だから、これからも、お世話

になります！」

真つ赤になつた頬と、少し乱暴な口調。

それらが伝えてくれた千里の真摯しんしな想いに、早瀬は心からうれしくなつた。だから思わず、

「うん、これからもよろしくね！ ちーちゃん！」

と言いつ切つてしまつてから、はたと気付いた。

上目遣いで口を押さえて、おそるおそる付け加える。

「えと……じゃなかった、千里ちゃん……」

「——いいですよ」

「え？」

「ちーちゃん、いいです」

潮風が優しく二人の間を吹き抜けて、その先で光が揺れた。

早瀬が、顔をほころばせる。

まばゆいばかりの光の中で、千里の表情もゆつくりと変わっていき——

それに合わせて、早瀬ももう一度、表情を変えた。

どんな天使にも負けない、とびきりの笑顔に。

早瀬葵。

そして、桜井千里。

二人のレスラーの風変わりな師弟、いや、師妹関係は、この日から始まったのである。

『Seraphic Strikers』完

あとがき

この二次創作小説もどきは、ゲーム『レッスルエンジェルス』シリーズの反則ファンサイト「かってにレッスルエンジェルスハイライト」（サイト名長いよ）に連載気分で半年もかけて書いたものです。

(<http://www9.atpages.jp/asinakatu/wrestleangels/>)

驚くべきことにPDFにしてなんてご希望を（一つだけですが）いただいたことから、見よう見まねで縦書き&PDF化を。参考サイトがそうしたので、A6文庫サイズにしましたが、やってみてびっくりしたのは文庫サイズで二百ページもあったということ。まさか薄めの小説一冊分もあるとはねえ。

この長さで中身がアレなので、最後まで読み通せる人がいるとは思えなかったり。読みきったぜという人は、きつと早瀬や千里同様「不屈」スキル持ちなので、大いに自慢しちゃってください。なんてね。

あしなかつ

六月十二日（早瀬誕生日）

「太陽が似合うよ」  
（ママ 千里の中の人）  
を聴きながら